

トレーナー、仕事辞めるってよ

TE勢残党

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その”神のひと声”は瞬く間に、全ての担当ウマ娘どもの”心”に火を付けた!!!

……しつとりしすぎて煙出てる？ 知らんな。

# 目次

プロローグ	—	1
#1 皇帝	—	10
#2 スーパーカー	—	18
#3 超光速のプリンセス	—	26
EX1 エリートトレーナー	—	39
#4 坂路の申し子	—	46
#5 破天荒	—	53
EX2 変人記者+α	—	58
#6 帝王	—	64
#7 異次元の逃亡者(前編)	—	74
#8 異次元の逃亡者(後編)	—	81
#9 選択	—	89
#10 GOOD END⑦	—	96
#11 BITTER END	—	104
#12 BAD END	—	109
#13 GOOD END⑤	—	116
#14 GOOD END②	—	124
#15 GOOD END③	—	133
#16 GOOD END⑥	—	139
#17 GOOD END④	—	145
#18 GOOD END①	—	152

## プロローグ

” 楽しんで金を稼ぎたい”

皆そう思っている。ただ、普通は叶わないので、どこかで折り合いをつけて働いているのだ。少なくとも、俺はそう思う。

そこで俺が考え出した人生設計は、さっさと一生分稼いで引退することだった。楽しくもない労働をさせられる時間を最小限にしようという次善策である。

まあ、中学くらいで皆一度は考えたことがあると思う。かくいう俺も、思い付いたのはそのくらいの時期だった。

だが、俺はその夢を諦めず、同時に「楽しむために楽しめない」という二律背反を受け入れられる程度に要領が悪かった。

だから俺は、ウマ娘のトレーナーになった。

何せ給料が高い。座学くらいしか能のない俺が手っ取り早く稼ぐなら、これが一番だと思ったのだ。何より、自分がレースに出る訳ではないというのが気に入った。俺が目指す平穏な暮らしに、知名度は障害でしかない。

数年後、試験に受かった。超難関だと聞いてたが、普通に勉強してたら普通に通ったので多分噂が独り歩きしているか、真面目に目指してるやつがあんまり居ないんだろう。

後は早かった。トレセン学園で一番と言われる凄腕トレーナーに弟子入りし、専属に昇進し、チームを率いるようになり……やってみると案外楽しかったのもあって時間はあっという間に過ぎ――

「慰留ッ！ 君はこんなところで終わっていい才能ではない！」

「そうですよ！ あなたほどのトレーナーが、こんな……っ！」

退職を申し出た時、秋川理事長とたづなさんの言葉は随分とお優しいかった。

11月の15時過ぎである。理事長室の中は、西日が入らず薄暗い。応接セットの上座、高そうな革のソファに腰掛ける理事長の顔は、それ以上に暗く見える。

金持ちの部屋特有の低いテーブルに用意された紅茶には、誰も口を

付けていなかった。

「買い被りすぎですよ。俺の器も底が割れましたし、最後のウマ娘もトウインクルシリーズを引退しました。潮時です」

何かと目をかけてくれていた理事長のことだから、こんな反応になるのは薄々分かっていた。だから予定通り、説得を試みる。

「最後だなんて……あのことなら、誰も責めてなんか」

「たづなッ!!」

怒号とも、悲鳴とも取れない切羽詰まった声を受けて、たづなさんは即刻黙った。顔に「しまった」と書いてある。庇おうとしてくれた手前俺もフオローしたかったが、今にも泣き出しそうな理事長にビビって何も言えなかった。

「……謝罪。だが、今のはトレセン学園の総意と受け取ってくれて構わない」

「ありがとうございます。ですが……だからこそ、これが互いにとつて最善でしょう」

今俺は、故あって盛大なやらかしをしてしまい、マスコミの総攻撃を受けている。それでも庇い立てしてくれる学園上層部には感謝しているが、現時点で目標だった「一生分の蓄え」は達成できている。

つまり俺の方には、学園に残る理由が特にないのだ。学園側にこれ以上迷惑を掛けないためにも、ここで身を引くのが最善。そう考えての退職願だった。

……潰してしまった担当に、サイレンススズカに合わせる顔がないというのも、勿論ある。

「っ、責任を取るなど言ってるのではない！ 世間を見返せと言っているのだ!!」

一度は気持ちを落ち着けた理事長だが、喋っているうちに再びヒートアップしていく。

「悲劇ッ！ 確かに事故はあった!! だが君の対応は、実績は、決して非難すべきものではなかった!!」

矢継ぎ早に、言葉がぶつけられる。

「君ほどの名伯楽が逃げるように引退するなど、私は認めん！ 世間

が言わぬなら私が言ってやる、君はトレセン学園の星だツ!!」

「理事長……」

怒鳴りつける、と形容するには悲痛すぎる叫びを、俺は何も言えずに聞いていた。

何か言葉を返すとするならば……俺はそんなに立派なトレーナーじゃありませんよ、だろうか。信じてはもらえなさそうだが。

「マスコミの制御もまともに来ぬ、無能な私を恨め! 好きだけ罵ってくれて構わん! だが、どうか堪えてはもらえないかツ!」

段々語気が弱まって、

「……っ、トレセン学園には、君が必要なのだ……!」

一瞬何かを言いかけてから、絞り出すように言い切った理事長を見て……全く揺らがなかったとは言わない。

「すみません」

が、俺の意志は変わらなかった。単純に、ここから挽回するのに必要な労力が、得られるだろう報酬に見合っていないなすぎた。

最後だと言うのに、大恩あるこの人にこんな顔をさせる自分には少し失望したが、それだけだ。

「っ!! あなたは——」

たづなさんが身を乗り出そうとして、理事長に手で静止される。

「確認ッ。意志は固いのだな」

「理事長!」

何やら覚悟を決めた風な理事長に、俺は短く「はい」と答えた。

数時間に及んだように感じられた面談も、終わってみればせいぜい30分。俺は晴れてアーリーリタイアを達成する訳だ。

「惜別。ここを去った後は、どうするつもりだ」

「ほとぼりが冷めるまで……そうですね、2年か3年は田舎に引っ込んできますよ」

実家はマスコミに割れているので、行くのは故郷ではなくどこか違う僻地になるが。所在地を教えたら早晚呼び戻しに来そうなので黙っておく。

「幸い、マルゼン達に一生分稼がせてもらいましたから。心配無用で

す」

生臭い話だが、昔の俺が思い描いた以上に、トレーナーという仕事は儲かった。

勤務医並の基本給に加え、担当ウマ娘が何かするたびにボーナスが出て、大会に勝てば賞金の分け前がガツンと入ってくるのだ。金を使う暇のなかった俺の預金通帳には、軽く100年以上は遊んでいられる額が塩漬けになっている。

「戻る気は、ないのか？」

案の定、継るような目で復帰の有無を聞かれた。

すみません理事長、期待してもらったのに。でも俺はただ、自分の楽隠居のために荒稼ぎしてただけの……クズです。理事長の言うような、革命児だとか時代の寵児だとか、そんな大それたもんじやないんです。

「ありませんね」

「っ……そう、か」

これだつて相応の末路だと、納得しているんですよ。

「一度の失敗で逃げ出す程度のやる気で担当持っても、ロクなことにならないでしょうし。これきりです」

10年に満たない現役生活だったが、もう一生分働いたと断言できるくらいには仕事に打ち込んできた。

そう、過去形だ。

他ならぬ自分がこう思ってしまったている手前、やはりもう”枯れた”ということだろう。

それが伝わったのか、理事長は今にも泣き出しそうな顔で、それでも何とか飲み込んでくれたようだ。それ以上引き留められはしなかった。

「お世話になりました」

「……命令っ。自分の担当したウマ娘達には、直接伝えて回りたまえ」

最後の仕事だ、と言う理事長の言葉を背に、俺は振り返らず理事長室を出る。

「ふうー。緊張した」

閉じたドアを背に、解放感からかつい口走ってしまう。ああいう重苦しい空気は苦手だ。

だが、真面目に仕事をするのも今日で終わり。最後にケチはついてしまったが、俺は晴れて自由の身だ。

確かに担当のあいづが故障して引退になったのはかなり堪えた。今でもそれに関しては申し訳なきで一杯だ。それ関連でマスコミにぶっ叩かれてるのもまあ、大体合っているので仕方ない。

ただ同時に、「一生分稼いでさっさと楽隠居」という目標のために今まで働いてきたのも本当のことなのだ。

そして、スズカがG1を初勝利した時点で、俺の貯金は目標額に達した。俺の退職時期は、元から彼女のそれと同期していたのだ。後は前もって購入しておいた不動産の管理をしながら遊んで暮らすだけ……という矢先の事故であった。

選手一人潰しておいてこんなことを考えているくらいだから、俺は当然、褒められるべきトレーナーじゃない。むしろ、根っこの部分でウマ娘を金蔓と見なしているクズ野郎である。クズはクズらしく、さっさと消えるのが似合いだろう。

その自覚があるから、悪口をうけての感想はだいたい「遂にバレたか」だ。だからこそ――

「皆して俺のこと持ち上げすぎなんだよ」

理事長があそこまで庇ってくれるのは予想外だった。まるで俺に凄い才能があるかのような口ぶりだったが、凄いのは俺じゃなく、やりたいようにやらせただけでG1レースをいくつも勝ち抜いてのけた担当ウマ娘達だ。

マルゼンスキー。シンボリルドルフ。アグネススタキオン。ミホノブルボン。トウカイテイオー。そして、サイレンススズカ。あとゴルシ。流石に中央、そこら辺に天才が生えていた。

「元々あったものを引っ張り出すのが、そんなに上等かね？」

彼女らは、誇りだ。皆、自分の持てる力を尽くしてそれぞれの夢に突き進んでいた。文句ひとつ言わずに辛いトレーニングをこなし、結果を出した。傍から見ている、こちらまで熱くする力があつた。こん

な天才の後押しが出来て光栄とすら思った。

俺は違う。俺は0を1にも、1を10にもしていない。ただ10があったのを見つけて引き出しただけだ。いや、スズカに至ってはそれすらしてやれなかった。

「……考えても仕方ないか」

益体もない思考は切り上げて、理事長に言いつけられた最後の仕事について考えを巡らせる。

レース中の怪我で引退になったスズカ含め、全員が既にトウインクルシリーズを退いている。皆何かと俺を慕ってくれたいいいヤツらだ。優秀だから俺がいなくても遅しくやっていけるだろうし、まあ、問題はないだろう。

……いや中等部のテイオーと怪我で落ち込んでるスズカだけはちよつと心配だな。ルドルフとマルゼンあたりに世話を頼んどくか。

ともかく、俺が辞めること自体は……言ってみれば「卒業した学校の元担任が辞める」くらいの感じだろう。引継ぎ作業は面倒だが、それくらいの筈だ。

現在時刻は……16時前5分か。挨拶だけとは言え、7人に言っただけとなると2日ばかりになりそうだ。さしあたり――

「ルドルフだな」

生徒会長であり、初代チームリーダーたる”皇帝”に、まずは伝えるべきだろう。

ここでようやく考えが口に出ていたのを自覚して、慌てて口をつぐんだ。

（――二人の時は「ルナ」呼びしないと拗ねるんだよなあ）

「終焉ッ。不敗”のアンタレスもここまでだな」

トレーナーさんが退出してすぐ。私……駿川たづなが何も言えず

にいるうちから、理事長が吐き捨てました。

最大最強のチームたるリギルに唯一伍する、少数精鋭のチーム・アンタレス。あのトレーナーさんのチームです。

同世代には原則1人しか出さない方針ながら、今まで輩出した7人全員がその世代の最強クラス、一人として”出来損ない”がないことから、いつしか”不敗”を冠するようになりました。

天才は天才を知るのだと、人は言います。トレーナーさんはいつも謙遜して、悪口を言われても「バレたか」などとおどけて受け流すつかみどころのない方でしたが……担当しているウマ娘には絶対の自信を持っていました。

どんな時でも「あいつは勝ちますよ」と言い切り、本当に勝ってしまふ。後のインタビューでは、いつも「トレーナーが信じて後押ししてくれたから勝てた」という文言が並ぶ。そういうチームでした。

”人バ一体”を体現する強固な信頼が、どれだけのウマ娘を彼の虜にしたことか。

「無常。あれほど強固に思えた彼らの牙城も、崩れる時はあつけないものだな」

呆れたような声でした。

けれど、秘書である私には分かります。呆れているのはトレーナーさんにはなく、自分に。

「理事長は悪くありません」

悪いのは、一度の失敗で彼を追い込んだ周囲の目とマスコミで――

「否定ッ！」

けれど、理事長がそうは思わないのも、分かっていました。この数日、報道陣の熱を抑えきれないことをずっと憂慮しておられましたから。その対応で、私ともども徹夜続きです。

それでも理事長が止まらなかつたのは、偏にURAのより良い未来のため。

「悔恨ッ！ トレーナー1人守ってやれずに何が理事長か！」

ぐしやぐしやと頭を掻きむしる理事長があまりに痛ましくて、私は硬直しました。

ああ、髪の毛が巻き込まれて抜けています。止めなければ。

けれど何と言えど。私に何を言う権利があるのでしよう。理事長に代わってトレーナー達の動向を調べ、こういう事態を未然に防ぐのは、私の仕事だった筈なのに。

「自責……期待ばかりを押し付けて、肝心な時に何もしてやれんとは！ 私は、無力だ……っ！」

理事長は誰よりも、あのトレーナーさんに期待を寄せていました。彼こそはURRAに更なる革新を齎すと。

史上最年少の17歳でトレーナー資格を取得した彼は、鳴り物入りで中央トレセンに配属されるや否や、凄まじいまでの才覚で見る間にトップトレーナーになりました。

まだ幼かった理事長はすっかり懐いて……きつと、初めは憧れていたのでしょう。彼がシンボリルドルフを輩出した時など、多忙の身を押しして毎レース見に行っていたくらいです。

私とは世代が被っていませんでしたが、間違いなくあの時のレースはルドルフのもので、そして彼女を育てたトレーナーさんの名声も天井知らずに高まっていました。

満を持して結成されたチーム・アンタレスを、いいえ、それを率いるトレーナーさんを理事長は格別に気にかけていて――

——だから、身を引いたのに。

「私は、どうすれば良かったのだ。私はっ、ふぐっ、うう……」

ついに、理事長の目から涙が零れました。

若くして学園を継ぎ、今も少女と呼んで差し支えない年齢の彼女は、それでもURRAをよくするために、あらゆる努力を惜しまずここまで来ました。彼女のひたむきさは、誰より私が知っています。

それが、どうしてこんなにならなきゃいけないんですか。おかしいじゃないですか。

「私は。私は味方です。学園の皆も。皆で少しずつ、乗り越えて行きましょう」

結局。私が掛けられた言葉は、そんな月並みなもの。

「うう、ぐしゅっ、たづなあ……っ！」

(……恨みます、トレーナーさん)

筋違いと分かっているにしても、そう思わずにはいられませんでした。私は理事長の秘書として、彼女を泣かせる人を許すことはできません。学園に残る道は、本当になかったんですか。

理事長はあなたに期待をかけて、きつとそれ以上の感情さえ持っていたのに。あの時「トレセン学園には」ではなく、「私には」と言おうとして、重荷にならないようにと堪えたのに。

私に語ってくれた担当ウマ娘への熱意と信頼は、嘘だったんですか。

どうして、一緒に歩んであげなかったんですか。

どうして、自分だけ逃げてしまったんですか。

自分のせいでトレーナーさんの未来を消してしまったスズカさんがどう思うか、考えなかったんですか。

気づくと、握った拳から血が滴っていました。けれど、泣きじやくっている理事長に比べればこんなもの。

(……さようなら、トレーナーさん)

初恋でした。

これ以上嫌いになる前に居なくなってくれたことにだけは、感謝します。

## #1 皇帝

異能の天才。革命児。秋川の秘蔵っ子。今遼陽。天才発見器。時代の寵児。

特筆大書と言わんばかりに騒がれた二つ名の数々は、私、シンボリルドルフに言わせれば過小評価だ。

ふふ、本人に言ったら「変なヨイシヨはやめろって」とでも言われるのだろうか。だが私は、きつと彼と一緒にでなければ、今ほどの立場にはなれていなかっただろう。

あの日。デビューを控えた私は、スカウトしようと思集まってくれた3人のトレーナーに課題を出した。

「三日後。君たちの気持ちをも、形にして提出してくれ」

今にして思えば傲岸不遜とも言える行い。あの頃の私は必死で、余裕がなかった。

だが、幸いにもトレーナー達は応えてくれた。

一人は私を必ず強くすると言い、三年分のトレーニング計画表を製作してくれた。

もう一人は私と共に歩む覚悟があると言い、私の脚質やクセを徹底的に研究した上で、レースで勝つための戦術を提案してくれた。

そして——トレーナー君は。

「これは……スマホ?」

「動画にしたんだ。見てくれるか」

去年の日本ダービーだった。マルゼンスキー……「怪物」と呼ばれたウマ娘だけをカメラが追い続けている。GⅡ以上のレースには全て目を通していているが、これは初めて見るアングルだ。恐らく彼が独自に撮影していたものだろう。

マルゼンスキーはスタートから他者を圧倒、大逃げしたまま最終コーナーでさらに加速。最終的に2着と8バ身差をつけての圧勝だった。大外枠での出走でありながら、レコードタイム。

正直に言つて、見とれていた。

Eclipse first, the rest nowhere.  
唯一抜きん出て並ぶものなし。それを体現するかのような走り

だと思った。

しかし、良く撮れている。脚の動きからストライドの長さ、走行フォーム。マルゼンスキーの美しいそれが見事に映し出され、走りに関しては丸裸と言っていいくらいだ。

そういう観点での研究資料としても、かなりの値打ちもの。きっと門外不出の、極秘資料の類だろう。

「素晴らしい走りだ」

故に私は「こういう走りをさせてやる」という意思表示だと受け取った。

果たして、それは半分だけ当たっていた。

「ああ。楽しそうだろ、俺の担当」

彼が示したのは、速さでも強さでも、勝ちでさえなく……もつと純粹な、楽しさだった。

「自慢のウマ娘だ」

スマホを回収してそう語るトレーナーは、眩しいほどに自信に満ちていて。

「……全てのウマ娘が幸せになれる世界。そう言ったよな。だったらまずは、君からだ」

目から鱗が落ちる思いだった。

「最低でもこれ以上は、走りを楽しんでもらう。君の理屈を借りれば、まずは一番上が楽しんでみせなきゃ、下も付いてこないだろ」

マルゼンスキーの天衣無縫とでも言うべき走りに魅せられて、トレセンの門を叩く新入生は多い。

その理由は、こういうことだったんだと、この時漸く理解した。

「なーに、君ほどの才能なら、よほどの無能じゃない限り誰がトレーナーになろうがトップには立てる。……だから、トップに立つてからの在り方を提示させてもらった」

彼は、彼だけは、勝利が”目的”ではなく”手段”であると、理解してくれた。

「その上で、お願いだ。君の覇道……どこまで行けるか、俺に見せてくれ」

私を真つすぐに見つめるトレーナー君を見たあの時から、私はきつと彼に惚れてしまったのだろう。

……あれから、色々なことがあった。

無敗のクラシック三冠。有馬記念2連覇。春の天皇賞。ジャパンカップ。URAFファイナルズ。

その全てに勝つてこられたのは、トレーナー君のお陰だ。

『何がしたい？ 言ってみてくれ、サポートする』

私と彼との関係は、選手とトレーナーと言うには少し特殊だったように思う。

私が求める結果を言えば、彼が筋道を立ててくれる。その時の体調から気分に至るまで完璧に把握された上で、今の私に最適な方法を示してくれるのだ。打てば響くというのは、ああいうことを言うのだろう。

アスリートと言えど一介の高校生に過ぎなかった私のトレーナーは、彼との丁々発止の議論によつて磨き上げられ、飛躍的に効率を増した。

何より凄かったのは分析だ。正確無比どころか、走りを目見ただけで大まかな脚質から筋肉の付き方、重心移動の偏りに、酷い時は潜在的な怪我のリスクまで見抜いてしまう。現に、そうやって怪我を未然に防いだチームメンバーが少なくとも2人いた。

有力な対抗バ相手では、レースの映像をコマ割り単位で解析してフォームのクセを割り出していらしい。

タキオンが言うには「複数の平面を脳内で組み合わせて立体を作り出し、それを元に関節などの構造を予測している」らしいのだが……正直に言つて、未だに理解できていない。

彼の指導の下でトレーニングをするのは心地よかった。何より、彼に走りを見てもらうのが好きだ。

他にも数名の担当がいる彼だが、走りを見る時はそのウマ娘だけを真剣な表情で見つめる。走っている私だけを、見てくれるんだ。

レースを引退してからも、何かにつけて相談に乗ってもらったり、走りを見て貰ったりしている。何のかんと言いながらも、彼は必ず

付き合ってくれた。

私が安心して全てをさらけ出せる相手など、両親の他には彼しかない。

……生徒と、トレーナーだ。これ以上の関係になることはできない。

それでもあの日の約束通り、これからもトレーナーは私を見ていてくれる。

ならば、それでいい。心の中でそう決めた。

「い、ま。何と言ったんだ……?」

「トレーナーを廃業する、と言った」

今の今まで、何の根拠もなく、そう思っていた。

事故だつてきつと、力強く乗り越えて、暫くしたらいつも通り飄々と笑ってくれろと。

「こないだの秋天(秋の天皇賞)のことは知ってるだろう。その関係でまあ、な」

「そん、な……っ!!」

あまりにも唐突で、事態を飲み込むのに数秒を要し……襲ってきた絶望感に身震いした。

ああ、いかん。二人とは言え生徒会室なのだから、威厳を……。

「見ていてくれると、言っただじゃないか」

無理だ。私には、手の震えを止められそうにない。

トレーナーが居なくなる。そう考えただけで、背筋をぞわりと何かが這い上がってくる。焦燥と喪失感に頭の中を掻きまわされるようだ。視界が霞み、口の中が乾く。

「見届けたさ。君は皇帝として、立派に学園を、業界を、ウマ娘を率いていたよ。俺が保証する」

「あ、ちがつ……」

過去形。

それが意味するところが、痛いほど理解できた。

そうじゃない。そうじゃないんだ。

「そ、そうだ。皆はどうなる。他の担当はっ」

「これから話して回る予定だ」

声が掠れる。きつと酷い顔をしているだろう。

「理事長の了解は、得たのか」

「さつき行ってきた。かなーり止められたけどな」

「だったらっ」

「もう決めたことなんだ。君だって賢いから、分かるはずだ。ここで消えるのが最善だって」

ああ、分かるさ。君が全ての責任を背負い込んで消えようとしているのは。

”沈黙の日曜日”の衝撃は……いや、その後の”疑惑”は、今はまだ、君にだけ向けられている。君を庇い続けるトレセン学園に矛先が向くのも時間の問題だ。

会長としての私は、それが”正解”だと判断している。

だからこれは、我儘だ。

「だが、辞めれば、認めたことになるんだぞ」

「覚悟の上さ。実際、間違っではないいな。まあ、俺にはお似合いの最後だろ」

平然とキャリアを捨ててのける彼への、情だ。

私達との時間は、惜しくないのか？

「あと……そういえば言っけなかつたな。事故の前から、スズカまでと決めてたんだよ」

必死に頭を回して、引き留める方法を考える。同時に、私の頭脳はあまりにも無情な結論を出していた。

初めから断定口調なのは、もう決まったことを通達するときだけだ。きつと説得には応じないだろう、と。

「……すまん、ルナ。急に決めたいになって」

最後まで、私をルナと呼んでくれるのだな。

でもそれなら……それなら。私を置いて行かないでくれ。人に頼ることを覚えさせたのは君だろう。

「必要なら、他のトレーナーに話を付けるが」

「いらない」

私のトレーナーは、君だけだ。

「お、おう、そうか。まあトウインクル終わってるし、そこは好きにしてくれ」

「私が会長の重圧と常勝のプレッシャーに打ち克ってこられたのは、君がいたからなんだ。」

「もう、すぐ出て行くのか」

「荷造りと引継ぎがあるから……早くても2日後だろうな。それまではトレセンで世話になるよ」

あと二日。急すぎる。

「……だ」

君の前でだけは、私は会長でも皇帝でもない、ただのルナでいられた。

ただ一人君だけが――

君だけが、私に理想を忘れさせた。

「やだ」

「は？」

「嫌だツ!! いやだいやだいやだ!! 行かないでくれトレーナー君!!」

構うものか。ルナでいい。我儘でもいい。

「わたしは君がいないとダメだ!! わたしが不器用なの知ってるだろう!? 今更君以外に甘えられるものか!」

恥も外聞もかなぐり捨てて、いやいやと首を振るわたしを、彼は優しく抱きしめてくれた。

「……ルナモードも久しぶりだな」

昔何度か、ストレスが爆発寸前になった時、こうして甘やかしてもらったことがある。最初の時に『二人の時はルナと呼んでくれ』と口走ったことから、彼曰くルナモード。

そうだ。いつも彼は、どんな”わたし”だって受け入れて……。

「ごめんな、ルナ」

そして今日初めて、我儘を聞いてもらえなかった。

「嫌だ、離さないぞ。君が残ると言うまでこうするからな! うう、一

緒に居てくれるって言ったじゃないかあ……」

トレーナー君に縋りついてぐずる私を、彼は何も言わずに受け止めて、頭を撫でてくれる。

けれど、私の望んだ言葉は最後まで出てこなかった。

分かっていたさ。君は、ごく稀に自分で何かを決めた時、それを譲ったことは一度としてないものな。案外この結末も、本人の言う通り初志貫徹、初めから決めていたのかもしれない。

これがきつと、最後の思い出になる。思いっきり甘えた後はいつもの「シンボリドルフ」に戻って、そしたらきちんと、君を見送るから。

だから、今だけは――

泣き疲れて眠ったルドルフ……ルナをソファに寝かせて、戸棚の奥に入っているブランケットを掛けてやる。

「参ったな……ここまでするとは……」

たまに甘えてくることはあつたし、ワーカホリック気味で休むのが下手なのも把握はしていたが……一応、俺の担当では上から二番目の世代である。もっとこう……カラつとしてるんじゃないかと思っただが。

「やっぱ、根っこがテイオーに似てるよなあ」

この俺が、担当ウマ娘のことを読み違えるとは。

「これ、俺が居なくなつてから大丈夫か……?」

元々俺と彼女では不釣り合いが過ぎる。俺のことなんてさつさと忘れて進んでいってくれると思つたんだが……心配だ。しかしあんな啖呵を切つた手前「やっぱ残ります」とも言えんし……。

考えても仕方がない。とりあえずこの件は先送りにして、次に伝えに行くウマ娘を決めよう。

(……ちよつと、重たいのが続いているから小休止が欲しい)

正直しんどい。俺だって人の心がない訳じゃないんだ。予想外のボディブローをもう一発貰ったら気力がなくなりそうなので、ここは安牌から行こう。

「丁度、マルゼンの部屋をチェックしに行く時間だ」

マルゼンスキー。俺が最初に専属として受け持ったウマ娘。……特別な思い入れがないと言えば嘘になるが、一番大人だし、伝えるのは一番楽なはずだ。

そんなわけで、机にルナに充てた置手紙をしたためた俺は、マルゼンスキーの暮らすマンションへ向かうことにしたのだった。

## #2 スーパーカー

前々から思っていたことだが、ウマ娘は1年にだいたい1〜3人くらい、明らかに際立ってるやつが出てくる。パドックでそのレースを獲るウマ娘が際立って見えたあの、光ってたあの、そういう話はよく聞くだろう。恐らくあれだ。

マルゼンには楽しく走るだけで周りを圧倒するほどの才能があった。

ルナは初めから全部持ってた。

タキオンには自分の脚を破壊しかけるほどの破滅的な出力があった。

ブルボンはオーバーワーク寸前のトレーニングを軽々こなす精神的怪物だった。

テイオーにはルナをコンパクトにまとめたような基礎能力と、ルナ以上の関節の柔らかさが。

ゴルシには一周回ってバカに見えるくらいの明晰すぎる頭脳が。

スズカは内に秘めた闘争本能と、それに裏打ちされた身勝手なまでの速さがあった。

だからスカウトした。

何が言いたいかと言うと、マルゼンの時から、俺のチームは俺の独断と偏見によって編成されていたのだ。

因みに、それより前に俺が見つけていた「世代最強」はだいたい師匠んとこにいたので、恐らく彼女も同じ目を持つてるんだと思う。

その上で師匠には熱意があったので、他のウマ娘たちもできるだけたくさん引き抜いて教育していたんだろう。なまけ癖が高じて、最小限の人数で最大の成果を求めた俺にとっては耳に痛い話だ。

そういう意味でも、能力的に俺の上位互換。尊敬できる師匠だ。

閑話休題。

マルゼンをスカウトした当時の俺は、師匠……東条ハナさんの下で経験を積むサブトレーナーだった。

下積みも2年目に入り、いい担当が見つければ専属としてデビュー

してもいいと、お墨付きをもらっていた時のことだ。

選抜レースを、楽し気に圧倒してのけるウマ娘がいた。

(ああ、この世代はマルゼンスキーなんだな)

こういうウマ娘は一目で分かる。明らかに、他とはモノが違う。

ティンと来た、とても言うのか。デビューするなら、あのウマ娘がいい。そう確信した俺は早速行動を開始した。

交渉は難航した。目立った実績もなく、この時はまだ10代のヒヨッコだ。頼りないと取られても仕方がない。

何より、東条トレーナーの弟子という肩書が、彼女にとってはマイナスに働いていたらしかった。もったも、それに気づいたのは大分経ってからだったが。

「すまない、話だけでも」

「あらら、また来ちゃったの？ もう、仕方ないトレーナー君ねえ」

一応俺の方が年上だが、何かとお姉ちゃん風を吹かせてきたマルゼンスキーは、しかしその甘い態度と裏腹に、勧誘の話に関しては門前払いだった。後から聞いたところによると、この頃の俺の事は「ませて生意気な弟」と思っていたそうだった。

「今度はどうだ！ 分析は万全だぞ！」

「うーん、そういうことじゃないのよねえ」

それからおよそ一か月。俺はあらゆる手段で彼女を口説き落とそうと奮闘した。

「もっと上手く走れるフォームを考えて来たぞ！」

「んふふ、まだ合格はあげられないわねえ」

ある時は脚質分析。ある時は運動生理学。またある時はレース戦術。彼女の求めているだろう「楽しい走り」を存分に追求できる環境を整えて見せるとアピールした……いや、しようとしたが、ほとんど聞いているは貰えなかった。

途中からは彼女も揶揄う方向にシフトし始めたらしく、言われるままに映画とス○ツチャを奢らされたりもした。ボーリングとローラースケートだけ異様に上手かったのは何なんだろうか。

「……ねえ。私にレースプランを出さないのはどうして？ スカウ

トって、普通はそういうので勧誘するんでしょ？」

悪戦苦闘が板についてきたある時、そんなことを聞かれた。多分だが、焦れた彼女からの助け舟みたいなものだったのだろう。

「確かに、普通はそうする。けどあんたは……そういうの、合っていないだろ」

「ふーん、なんでそう思うの？」

まだまだ生意気だった俺は、突っぱねるクセに歩み寄ろうとしてくるマルゼンスキーにムツとしながら、慥然と分析結果を答えた。

「走りを見たからだ。勝利の栄光とか、ビッグタイトルとか、そういうのを求めているようには見えない」

「じゃあ、どういうのを求めている？」

「……楽しさ、だと思う。勝ちたいんじゃない、走りたいたから走ってる。才能があつたもんだから、たまたま勝ちも付いてきたっただけ。そういう質だろ」

マルゼンスキーが目を見開いたのを、今も覚えている。この時ようやく、俺は「弄り甲斐のある弟」から、「いっぱしのトレーナー」へと認識を改められたのだ。

「確かに、おれは東条トレーナーの弟子で、”常勝”リギルの因子を引いている。でも、おれはリギル式の管理教育じゃなく、本人の持ち味を最優先したい」

「……それは、どうして？」

この時のマルゼンは、今までになく興奮していた。というか、ワクワクしていた。

「競うな、持ち味を生かさせて昔の漫画も言ってたろ……分かった、正直に言うから無言で口紅出すのはやめろ」

「……おれ、無理強いと言うか、何かを押し付けるの嫌いなんだよ。おれ自身が一番やられたくないことだから。折角我儘を通せるくらいの才能があるなら、やりたいこととして生きるのが一番いいじゃんか」  
そしてどうやら、俺の答えは彼女のお眼鏡にかなったようだった。

「——もー!! 何でそれをもっと早く言わないの!」

思いつきり抱き着かれた。あの体でだ。10代の身空には中々厳

しいものがあつた。性癖を歪める気だつたのだろうか。

「だからその姉ちゃん風をやめろつての！ おれ年上だぞ?!」

「えー、いいじゃない可愛いから。あそうだ！ 私のことねえちゃ  
んって呼んでもいいのよー!」

「そういう問題じゃなくてだなー!」

「えー、なんでよお！ 自分で言うのもなんだけど、こんなにマブい子  
そうそういないんだから、甘えればいいじゃない!」

(マブい……?)

照れ隠しにギヤースカ言いながら、しかしお互いに嬉しそうで。そ  
の日のうちに学園に届け出を出して、晴れて俺達は専属トレーナーと  
担当ウマ娘になった。

今なら分かる。マルゼンは初めから、俺をトレーナーにする気だつ  
た。

最初の頃の生意気な俺に、何を見出したかは分からない。だが最終  
的にスカウトされる気がないなら、俺のへ々な勧誘に根気よく付き合  
いなどしなかつただろう。

彼女のそれとないアドバイスもあって、あの一か月で、俺のウマ娘  
との関係構築能力は一気に成長した。一年と少し後には、ルナを相手  
にクサイ演説をかましたくらいだ。

色々な意味で、トレーナーとしての原点は、やはり彼女だ。

全く、トレーニングさせられてたのはどっちなんだか。

---

——随分、懐かしい頃のことを思いだした。

「まだまだガキだったな、あの頃は」

「今もそんなに変わってないでしょ」

部屋に着く前から背後に居たのは分かっていたので、白けた顔で振  
り返る。

「あらら、バレてた?」

「いつもだからな。部屋、入っていいか?」

了解を得て、預かっている合鍵で玄関を開ける。

整然とした廊下と、その向こうにはリビング。

何年も通ってれば流石に慣れる。彼女に関しては最初の頃の”姉”のイメージが強すぎて、異性がどうかいうのも大分前に通り過ぎてしまった。

「片付いてるな」

「お陰様でね」

何を言うでもなくキッチンで食事の支度を始めるマルゼン。

初めは、部屋の片づけをやる気が出ないから、手伝いついでに監視しに来てくれという話だった。

それだけでは申し訳ないからと夕飯を作ってくれるようになり……それがかなり美味かったので、いつの間にか週に1度はこうして食事を集りに行くという、良く分からない生活が日常になってしまった。

半年もするころには片付けも板につく。何度も負担じゃないか聞いたのだが「おねーさんに任せなさい!」の一点張りであったので、その内考えるのを止めてご馳走になることにして、曖昧な関係を続けてきた。

そんな暮らしも、今日までだ。

「乾杯っ♪」

「ジュースだけだな」

出て来た料理は、とんかつだった。好物だ。

「もうっ、もつと気の利いたのなの? キミの瞳に、とか!」

「じゃあそれで。あ、ソースこっち置いとくぞ」

「ええ、ありがと」

例の事故以来、彼女は何も言わずに好物を出してくれるようになった。自然と、部屋では仕事の話をしていないのが不文律に。

彼女なりに、居場所であろうとしてくれる、ということだろうか。

俺は今まで、ただ何となく、それに甘えていた。我ながら意志の弱

いことだ。

「……決めたのね」

マルゼンが意を決したようにそう言ったのは、食事を終えて二人して洗いや物に勤しんでいる時だった。

「分かるのか」

「あたり前田のクラッカーよ♪ 何年の付き合いだと思ってるの」

どうにも、このウマ娘には頭が上がらない。まあ、だからって悪く思ってるわけではないが。

「引退するよ」

「そっか」

短く答えて、短く返ってきた。

「……じゃあさ、私と一緒に逃げちゃおっか」

ただ、続く言葉はかなり予想外だったが。

「……………は？」

「あははは！ 久しぶりに見たわその顔！」

事態を飲み込めない俺を見て、マルゼンは心底楽しそうに笑っている。

「だって、あなたのいないトレセンで走っても楽しくないし。貴方のことだから、ほとぼりが冷めるまで田舎でのんびりしてよくなんて思ってるんですよ」

完璧に言い当てられてしまい、何も言い返せない。流星に付き合いが長すぎてお見通しか。

「私も連れてって」

一瞬だけ、笑顔が消えた。

『やりたいようにしていい』って、言ってくれたのはトレーナーですよ。私は、キミと二人で愛の逃避行、なんてのもいいかなーって思うんだけど、どうかしら？」

「愛って、お前な…………」

お前呼びをしているのは、マルゼンだけだ。むかーしそれを伝えたら、他人にはダメだが私にはお前呼びでいいわよと言われて今に至

る。

「あら、世間の目を逃れ、トレーナーと教え子の禁断の愛、なんてロマンチックじゃないかしら？」

測り切れない。どこまで本気なのか。

「それとも、私は邪魔？」

「……お前、その聞き方は卑怯だろ」

邪魔なものか。

俺だって人の子だ。こんな暮らしが一生続いたらと、思わなかった訳じゃない。

だが、それでは駄目なんだ。

全ての責任を、俺が背負って消えなければ。

ただでさえ地に落ちている俺の評判に、女に手を出してそれと一緒に逃げたなどという情報まで追加されてしまったのは今度こそトレセンに致命傷が入ってしまう。

「……ごめんなさい。困らせちゃったわね」

そんな事情を知ってか知らずか、マルゼンはあつさりと引いた。

「いつ、出て行くの？」

「明後日だろうな。挨拶回りが長引けばもつと後になるかも」

「そう」

今のマルゼンに嘘を教えるのはまずい気がして、素直に答える。

「タツちゃん、いつもの所に付けて待ってるわ」

彼女の愛車、真っ赤なランボルギーニ・カウンタック。

「もし、私を少しでも……求めてくれるなら。乗って来て」

言う直前に彼女が窓の方を向いたので、表情を窺い知ることが出来なかった。

なんとなくだが、無理に覗いたり、触れたりすべきではない気がして、ただ俺はその場を後にするのだった。

その足で、薄暗くなったトレセンに戻ったのは、現実逃避だろう。

来てしまったものは仕方ないので、返事のこととは一度棚上げして、近くの研究室に今も籠っている筈のアグネスタキオンと話をすることにした。

……俺は、最低だ。

### #3 超光速のプリンセス

”逃げ”が得意なウマ娘というのは、総じてマイペースで他者への関心が薄い。

良く言えばストイック、悪く言えば自己中。自分の走りだけに集中し、ライバルのことは眼中にないというある種傲慢な姿勢こそが、他を圧倒するほどの大逃げを作りだす。

馴れ合いを好み仲間と一緒に走ることに喜びを感じるとされるウマ娘としては異端で、だからこそ強く、華がある。

そしてそういう手合いは得てして、逃げ以外の戦術がほぼ取れない。

そもそも「差し」や「先行」のようにペース配分やコース取りなどを考えるのが苦手か、あるいは考える気がハナからなく、思うままに走った結果が”逃げ”なのだ。厳密に言うとなれば戦術じゃない。

戦術じゃないから、成功も失敗もない。ただスタミナが持ったか、持たなかったかだけだ。単純で、「力を出し切れなかった」という事象がほぼ発生しない。

だから俺は逃げウマが一番好きだ。いつも思い通りに走れて楽しそうだしな、あいつら。

それが指導にも伝わっているのか、あるいは「好きなように走れ」と言い続けたからか。俺は本能任せ、マイペースが持ち味の才能と相性が良く、自然と俺の担当には実力は高いがクセも強い逃げウマが多くなった。

「やあ、モル……トレーナーくん」

そしてこいつは例外的に、逃げ連中よりよっぽどマイペースだ。

いや、変な方向を向いているだけの泥臭い努力家、というのが正しい評価なのだが……どうにも三冠以外はどうでもいいと言わんばかりだったブルボンやコミュ障でスピード狂のスズカと同列に並べてしまう。

「モルモットでいい。今更取り繕うな」

寮の部屋にも戻らず、チームの第2ミーティングルーム（持て余し

ていたのだけれどやった)を改造したラボに入り浸り。まあ本人が稼いだ賞金が元手だから強く言う気もないけれど、ヨレた白衣と手入れの行き届いていない髪の毛が俺を心配させる。

「そうかい、では好きに呼ばせてもらうよ。して、こんな時間に何の用だい？ キミが定時より後に自ら訪れるとは、ヒトの奇行と天候との因果関係について検証データが取れそうだね」

「雨が降るって言いたいのか」  
「そうなるか観測しようという話さ」

タキオンがボケて、俺が突っ込む。いつものやり取りだ。

ただ、普段はどんなに忙しかろうと尋ねればこちらを向いていたタキオンが、今は机に向かったまま、手を動かし続けている。

「で、それ何だ？」

タキオンの手元でカチャカチャと音を立てる機械。よほど集中しているのだろう、一度も視線をこちらによこしてこない。

そもそも、薬学・生理学畑のこいつが本気で機械いじりをするとは珍しい。

「義足、いやパワードスーツかな。歩行補助具というやつだよ」

「……償いのつもりか？ タキオンらしくもない」

「まさか。そんな真似をする時間も資格も、私にはどうに失われているとも。そうさな、あの事故で内的強化に限界を感じ、戯れに作ったとでもしておこうか」

建前であることを隠しもしない理屈を並べるタキオンに、1歩近づくと。締め切った部屋特有のぬるい空気が肌に触れ……こいつ、また風呂をさぼったな。

「……あまり近寄らないでくれないか、このところ実験室に籠り切りでその」

「自覚があるならシャワーくらい浴びてこい。……理屈は分かった、そう言う事しておくから出来上がったなら教えてくれ、試験運用のあたりがある」

「そうやって苦言は呈しても最後はこちらの判断に任せてくれるところ、本当に好ましく思うよ」

「あくまで主体はウマ娘。トレーナーとしちや当然だと思いがね」

「東条トレーナーの前でも同じことを言えるのかい？」

「言えるさ」

「ふうん、根拠は？」

「二点。広報に際して厳しい方針を隠していない点と、チーム入りにテストが設けられている点だ。つまりあのチームに所属している時点で、入会の意志を示した上でテストを突破したことになる」

「なるほど」

小気味よいテンポでかけ合う。お互い理屈屋、タキオンとの会話は嫌いじゃない。

向こうの頭が良すぎて付いて行くのが大変なゴルシ、俺の言ったことが半分も伝わらないテイオー、それなりに肩肘張って話してるルナと違って、素の俺に近い思考ルーチンで話せて気が楽だ。

「相変わらず無駄に弁が立つね、君は。ドーピング検査と上の査問に同行しなかったのは正解のようだ」

「タキオンもル……ドルフの追及をかわし続けた腕前だろ」

「あアルナでいいよ。君達のただならぬ仲については公然の秘密だからね」

「大して面白い関係性でもないぞ」

「それを決めるのはキミじゃあなからうさ」

「そんなもんか」

「そんなものだ。……今、それを痛感しているよ」

タキオンが何のことを言っているかは、すぐ分かった。今まさに受けている、マスコミからのバッシングのことだろう。

「最初に受け持ったマルゼンスキーがいきなり秋シニア3冠。次のシンボリルドルフは言わずもがな。そして私が菊花賞除くクラシック二冠に秋の天皇賞と有マ記念。リギルが最強というのは、もはや建前上のことになっていた」

ああ、思い出せるよ。

火星アレンチアレに對抗するものの名は、リギルリギルに對抗してみせろ、と師匠アレンチアレに冠してもらったものだから。

「あと、ブルボンとテイオーも二人でクラシック5つか。思えばキミのデビュー以来、ことクラシック三冠の占有率は8割近かったんじゃないかい？ ……私もキミも全く気にしてこなかったが、輝かしすぎる戦績は、余人の目には毒だったのだろうね」

「俺が凄いいんじゃないんだがなあ」

俺が首をかしげてみせると、タキオンがわざとらしくため息をついたのがわかった。

「ハナより出でてハナより強しと言われた君がかい？ 謙遜も過ぎれば嫌味だよ？」

少しの沈黙を挟んで、タキオンがぼつりと、昔話を始めた。

「まあ、キミの自己評価が著しく低いのは今に始まったことではないか」

「なあ、覚えているかい？ 私が”ウマ娘の可能性”などという荒唐無稽な夢を語り、ルドルフに実験させると言った時の君の台詞を」

「ルドルフは天才だったが、俺は育成に失敗した」

二人の台詞が同期した。

「くく、ハハハ！ 今思い出してもおかしい、狂っている！ あのシンザンを超えたときえ言われるルドルフを、言うに事欠いて失敗と!!」  
「シンザンを超えたか、議論になってる時点で失敗なんだよ。だが言つとくが」

「分かっている、悪いのは自分だと言うのだろう。『限界を超えられる素質を持つていながら、それに見ないふりをしてバランスよく鍛え、格下狩りに特化させた』。 ……故に、素質を全て引き出せたとはいえない」と

毎回付け加えられるからもう覚えてしまったよ、と悪態をつくタキオンだが、その目にはむしろ好意的なものが宿っている。

「そうだ。いちばん強いヤツが格下狩りに特化してたら、それは誰も勝てないってことだからな。 ……本人に言うなよ」

事実、彼女のトウインクルシリーズただ三度の敗北は、全て周囲のミスや不運が重なったの事。彼女自身に責任のある負けは、なかった。

だからウマ娘の能力に、タキオンの言う限界点があるとしたら、それはシンザンや今のルナと近似値であると。こいつを勧誘した時、俺はそう言った。

「分かっているとも。私とて、超えていいラインといけないラインは弁えているつもりだ」

「ここ2、3年でトップクラスに信用できない言葉だな」

「えー！」

ともかく、ウマ娘の、可能性の果てを見る。彼女の描く理想に、俺は惹かれた。

「んん、っ、そして、可能性の果てが見たいと言った私を、キミはチームに引き入れた」

「ルナの件で、潜在能力を引き出す難しさを実感してたからな。助けになるかと思っただんだ」

最初は、ルナの才能を自分にしか分からない程度に捻じ曲げてしまったことへの罪の意識から。

「おや、それだけかい？ 寂しいねえ、私の脚には期待していなかったと」

「実際、期待はしてなかったぞ。脚の爆弾とタキオンの性格を見れば、どっかで自分の脚を研究データにかえて壊すだろうと予想がついたからな」

「……それは初耳だね。初めから見抜いていたのか」

今日初めて、タキオンが明確に驚いた声を出した。

「ああ。プランAとBの正体にも察しがついてた」

自分の脚で限界に挑むプランAと、自分の技術を他のウマ娘に継承させて果てに至るプランB。概要が分かれば、Wチャンスで行けばいいと言っただけやるのは簡単だった。

「自分の脚を犠牲にすると決意する……つまりプランAを諦める日までは脚を温存しようと考えた結果が、あの走りの超少ない育成メニューだ。俺がただ我儘を聞くとも思ってたのかよ？」

「というか俺、夏合宿で言ったろ。Aが完全に詰むまでBへの移行は許さんってな」

「あ、ああ。私が気づかれていると気づいたのはその時だ。そこである程度の事情を察した私は、この底抜けに献身的な男に何か返してやりたいと、柄にもなく思ってしまった訳さ」

「自分でそれ言うのかよ」

「私はこういう女だよ。諦め給え」

彼女との会話は弾むようで、つい長話になってしまう。

だが今日、思い出話をしているのは……きつと、お互い今後はどういう話をする機会がないことを、薄々察してのことだろう。

「晴れて私の脚は、最後の有マ記念を走り切つてなお、壊れなかった。タイムは会長のソレとほぼ並び、私は私の脚で、私の体で、ウマ娘の限界を体験することが出来たわけだ」

「そして気を良くした俺とタキオンは、プランAの完遂に満足せず、その先を求めた」

ナレーション調の芝居がかった口調で話を進めるタキオンに、一声。

それで、場の空気が再び重くなった。

「……初めは、ブルボンだったね。持ちえない距離適性を後天的に獲得してのけた彼女のデータは、確かに興味深かった」

「あの頃には俺達の理論もそれなりに煮詰まっていたからな。全盛期のあいつは、恐らく2000までならマルゼンスキー並のスピードが出てたろう。ライスに差されさえしなければ、あいつに三冠を取らせてやれたんだが」

「まあ、本人がいいと言っているからいいじゃないか。それに、あの時のライスシャワーの持ち上げられ方といったら愉快だったろう。さながら魔王を討ち果たした英雄だったぞ、あれは」

当日のウイニングライブの盛り上がりが目に見えかぶ。

菊花賞、夢破れた割に清々しそうなブルボン。報道陣に褒めちぎられて縮こまっているライスシャワー。王朝の終焉と騒ぎ立てるマスコミ。一時期はライスシャワーを主役にした、あのURAのカッコイイCMがそこら中で流れていたものだ。

前年のタキオンは脚部不安で菊花賞を出走回避していたので、クラ

シツク3冠レースで戦って負けるのはあれが……何年ぶりだ？

そういえばあのレースを元にした映画が、今度上映されるらしい。競バゲームや漫画なんかでもラスボスだの隠しキャラだので出していいかとしよつちゆう聞かれるし、ブルボンには申し訳ないがヒール人気で随分稼がせてもらった。

負けた時だつてのに、褒められたり安心されたりした覚えしかないってのも変な話だ。

「否定はしない」

タキオンは頷く。

「テイオーとゴルシは普通に育成した。あいつらは限界を超えるほどの才覚じゃなかったからな。ゴルシに関しちやいつの間にかいたし」  
「ああ。あいつらも随分強くなってくれたよな。……そして、スズカだ」

まあ結局、話はスズカの方向へ。

「……容態は？」

「その機材が病院の計器とリンクしている。見ての通り今も安定しているよ。6時間ほど前に聞かれたばかりだし、急変するようなことがあれば伝えるとも」

台詞だけ取ればおどけているようだが、その口調はしつかりと沈んだものになっていた。

仕方ないじゃないか。最初に彼女が病院に担ぎ込まれた時、即死してないのが奇跡だと言われたのだ。今も心配でならない。

「……素質があった。本人の意思も。だから鍛えた」

タキオンの言葉で思い出すのは、師匠……東条トレーナーからスズカを預かった時のこと。

こいつはうちの管理教育に合っていない。そう言って見せられたレース映像の中で、あまりにも窮屈そうに走るスズカを見た。

俺の目によれば、明らかにこの世代は彼女だった。なのに遅い。聞けば師匠も同じ結論に達したと言う。

大抵の場合、逃げウマは逃げ以外できない。

彼女もそういうタイプだと考えた俺は、二つ返事でスズカの移籍話

を受け入れた。逃げウマの育成なら、師匠より得意だという自負もあつた。

「速さだけで言うなら、彼女は間違いなくルナを超えてた」

果たして、スズカは化けた。

今まで担当したどんなウマ娘より速く。ただ速く、ターフの先頭を自由に駆けた。

——だから、可能性が生まれてしまったんだ。

机上論でしかなかったはずの、限界の先。そこに届きうる才能が、手元に現れてしまった。

「……ウマ娘のスピードの限界。それを、彼女は超えた。あまりにも完璧に。あつさり」と

思案に入った俺を引き継ぐように、タキオンが言う。俺は一つ頷いて、続く情報を提示する。

「あのカーブに入った時点で、時速84キロ出てたそうさ。ウマ娘の限界速度は精々70キロ、俺達の技術を尽くして、最高速度の限界ラインとして試算されていたのが78.5キロ前後。そりゃあ、壊れる」

原因は分からないんじゃない。ないんだ。

今はまだ、俺達二人だけが知っていることだった。

「……しかも俺達だけは、当日のスズカのコンディションが良すぎることに薄々気づいていた。今のスズカが本気を出したら、ウマ娘の限界を超えてしまうんじゃないかと、予想できていた」

「そして、あのスピード狂は……スピードの向こう側が見られるなら、負担なんか気にせず加速するとも分かっていた。元々、速く走りたいという本能に逆らえるなら逃げウマじゃない。引退レースの予定だったから、なおさらだ」

淡々と、起こったことを、事実を再確認していく。

それはどこか、懺悔に似ていた。

「だが俺は。最高のコンディションで迎えた引退レースを、走るなど言えなかった。思いつきり走りたんだと訴えるスズカを、止めることができなかった」

「代わりに、キミは出来る限りのリスクヘッジ……いや、フェイルセーフを試みた」

「私費で雇った医師団を各コーナー最寄りの観客席に配置。かかりつけ医に話を通してベッドを確保。無理を言ってスペースを用意してもらい、会場に応急処置のできる医療キットを搬入。救急車まで用意していたのは流石に驚いたがね」

「救命医の人達が、ファンだと言っつてな。事情を話したら非番なのに詰めていてくれたんだ」

俺は、彼女が更なる加速に入るだろう、第三コーナーの終わりに待機した。

嫌な表現だが、そこが”本命”だったからだ。

「そして案の定、第三コーナーの終わりで事故が起きた。……医者に、即死してないのが奇跡だっって言われたよ。全くお笑いだ」

嘲るようにタキオンが言う。自嘲か、俺も含めてか。

「スズカの命は助かったが、速度の出しすぎで自壊した脚はどうにもならなかった。……出てはいけないものが飛び出してたんだ、死ぬ気でリハビリすれば1年で歩けるようになるかも、というだけでも奇跡的なのだそうだよ」

天皇賞は走り切れず。彼女の選手生命は、断たれた。

「あの時キミが庇わなければ、彼女は二度と歩けなかった。続く応急処置が10秒遅れていたら脚は切断だった。30秒遅れていたら失血か出血性ショックで死んでいた」

「そして我々の肉体改造がなければ、そもそも踏ん張りがきかずに顔から倒れ込み、トレーナー君もろとも空中分解していた……おかしな話だ。彼女の脚を壊すほどに速度を強化したのもまた、私達だということなのに」

「ああ、自殺する気かと医者に怒鳴られたよ」

タキオンによってただ淡々と、起こり得た可能性が列挙される。

「トレーナー君がコースに乱入してまで庇ったお陰で、応急処置は完璧だった」

「……完璧すぎたんだ」

はた目には、今日スズカが壊れると確信していたようにしか見えな  
い。

というか、実際にそれは正しい。薄々彼女は限界を超えるだろうと  
分かっている、出走を止めなかったのだから。

「常勝トレーナー初めての失態だ。マスコミ各社が一気に叩き出すの  
も当然だろう」

原因はオーバーワークではないのか？ 担当を壊してでも常勝を  
維持したかったのか？ 行き過ぎたスパルタ指導で勝ってきたん  
じやないか？

そういう感情的なものが過ぎ去ると、今度はドーピング疑惑と身体  
改造疑惑が飛んできた。アグネスタキオンとの研究が、中途半端に外  
部に漏れたらしい。

既に俺が過去担当した全てのウマ娘が、数か所の医療機関で偏執的  
なまでのチェックを受けている。後付けで不正が見つかったことに  
されなかったのは、学園が庇ってくれたからだろう。

「レギュレーション違反の行為をするのは、車で乗り付けてゲートイ  
ンするようなものだ。そんな無粋はしていない。全く、正義に酔った  
市民というのは厄介極まりない」

これに関しては本当に嫌そうだった。ここまで不快感をあらわに  
するタキオンも珍しい。

「……だが、誰よりも”スピードの向こう”に拘っていたのは、スズカ  
自身だった。それを知っている我々は、殴つてでも止めなければいけ  
なかつたんだ」

「だから、この批判はキミが受けるにふさわしいとでも？」

タキオンが、初めてこちらに向き直る。

深い隈に縁どられた目で、こちらをギロリと睨みつけた。

「そうだ」

だが、俺は認めた。

「……ふざけるな」

タキオンは静かに、しかしかなりの力を込めて俺の胸倉を掴み、持  
ち上げた。

「いくらキミでも、言っていない事と悪いことがある」

「多分もう、俺が辞めるとどこかで聞いてるんだろうが。暴力に訴えても、俺の行動は変わらんぞ」

タキオンの手は、とつくに止まっていた。

長々とした懺悔に付き合ったのは、きつと彼女なりに俺を慰めてくれていたからなのだろう。

「……だめだ、トレーナー君。キミにはまだ、私のモルモットで居てもらわないといけない」

”果て”は、見たじゃないか

目がさらに鋭くなる。胸倉を掴んだ手を思いつき引き寄せられ、首がガクンとタキオンの方に動いた。

「半生を賭して、ブルボンとスズカを実験台にまでして求めた”果て”がッ、終わりが、こんなものであつてたまるかッ!!」

目に涙を溜めて、必死で叫ぶタキオンの顔が目の前にある。

「はーっ、はー……」

怒り慣れていないタキオンは、しばらく二の句を告げずに口をぱくぱくとさせ……一度落ち着いてから、淡々としゃべり出した。

「私は、認めない。これから新たな理論を立てて、実験を重ね、もつと先があるのだと証明してみせる。今止まってしまえば、果てはここだったと言うことになってしまふんだ」

「キミには、これからもモルモットとして役に立つてもらおう。これは決定事項だ」

彼女らしい、不遜な口調。けれど、その声と手は震えていた。

「……そうは行かないんだ。分かってくれ、タキオン」

「っ、いいや! 私が強引だからな! 無理矢理にでも付いてきてもらうぞ! ウマ娘の身体能力は、キミが抵抗可能なレベルをはるかに超えるんだからな!!」

トレーナーとして協力していただけの俺と違って、タキオンの頭脳は非常に専門性が高い。既に、ウマ娘の運動に関する分野なら権威を名乗っていいんじゃないか。

「それでは、駄目だ。駄目なんだよ」

「駄目なのはキミが消えた場合も同様だッ！ プランAにさえ、身近な者やファンの応援やライバルの存在があれば影響していたと言うのにつ！ 一番の、キミが消えてしまったら……私は……っ」

「……………すまんタキオン。こんな状態じゃなければ、研究の終わりが見たかった」

「謝るなよー！ 私を、スズカとトレーナーを潰して生き延びた汚い女にさせないでくれよお」

涙でぐしゃぐしゃにした顔を拭きもしないで、俺を求めるタキオン。

三人目だ。俺もなんとなく分かってきた。

自分で思っているより、俺は担当ウマ娘達に大きな影響を与えていたんだな。

……………けれど、だからこそ。この役は譲っちゃいけない。

あと彼女らに残してやれるのは、「迷惑を掛けない」というマイナスの功績でしかないのだから。

「……………よし」

決意を新たに行っているのは、俺だけではなかったようだ。

「——ああ、そうかい。キミはそういう奴だったんだな」

急に、タキオンが取り繕ったような口調になった。

「キミにはほとほと愛想が尽きた！ キミのような協力者など知らん！ どこへなりとも行ってしまえ!!」

ああ、芝居が下手だな、タキオンは。

「……………ありがとう」

「っ!! 放逐されようというのに礼を言う奴があるかつ！ 手切れ金代わりにこれをくれてやるから、さっさと出て行け！」

さきほど弄っていた機械——歩行補助具をこちらに投げてよこし（かなり重かった）、研究室をぐいぐいと押し出されてしまった。

そそくさとドアを閉められ、俺は一人、暗い廊下に立つ。

いや、なんとなく立っているのが辛くなって、ズルズルとその場に

座った。

ああ、あと4人もあるのか。明日……そう明日、ブルボンに話をしよう。今日はもう無理だ。

そのまま膝の上に手を載せ、額を付けていると、ドアの裏側から何かが聞こえてきた。

——反射的に、耳を澄ましたのを後悔した。

「ぐっ、ひうつ、えぐっ……とれえなあ……っ！」

……俺に、あと何が出来るのだろう。

せめて、祈らせてくれ。

どうか、君の研究が実を結んでくれますように。

## EX1 エリートトレーナー

XX年、菊花賞。

”不敗”を負かしたウマがいる。

ミホノブルボンの三冠を阻んだ、漆黒のステイヤー。

結果が語る。”最強”は、”無敵”じゃない。

そのウマ娘の名は――

そこで、思わずテレビを消した。

批判一色のワイドショーに嫌気が差し、録画していたドラマでも見るかと再生してみれば、これだ。

「と、トレーナー」

私、桐生院葵の座ったソファの後ろで、立ったままテレビを見ていたミークが怯えている。それでやっと、私が怒っているんだと自覚した。

こんなんじゃないとトレーナー失格だ。白書にも、「ウマ娘は感情に敏感なので、不用意に露わにしてはいけない」と書いておかないと。

「ごめんね、なんでもないの」

くしゃり、と頭を撫でて、ハンガーにかけていた上着を取る。

「ちよつと出かけて来るね」

こんな状態でミークと触れ合うべきじゃない。

行先は決めていないけれど、とりあえず頭を冷やそうと思った私を、ミークは何も言わずに見送ってくれた。初めての担当で、私は本当に良い子に巡り会えたと思う。

(……先輩)

何処に行くでもなく歩いている間、頭にあつたのは先輩のこと。

2年前にトレーナーとしてデビューした私は、担当のハッピーミークがサイレンススズカの同期だったことをきっかけに、何かと先輩によくして貰っていた。

先輩は、評判以上の天才だった。

『ストライド、あと3、いや5センチくらい広げられると化けそうだな……あ、すまん横から』

ミークの走りを一目見て、その時の課題だったフォーム改善に「一発で”正解”を出してしまった彼を見た時から、私はすっかり先輩の後ろについて回るようになってしまった。

『トレーニングメニュー？ 俺の放任ぶり知ってるだろ、聞く相手間違ってるのか？』

なんて茶化していたけれど、聞いたことには完璧に返してくれていたので思い出す。

名門・桐生院の出身だからと、それなりの自負はあったつもりだったけれど、先輩について行くうちに全部吹き飛んでしまった。

見る目があると人は言うが。それ以前に知識量が全然違う。

アメリカの最新の論文を当然のように検証したり（そもそも速読してみたペースで英語の論文を読み漁っている時点で何かおかしい）、海外含め数十年分のレース内容を全て暗記していたり、大昔に廃れた戦術を引っ張り出して改良したら使えるんじゃないかと議論したり。

ゴールドシップと組んで海外のクイズ大会を総なめにしたなどと言う都市伝説じみた話すら伝わっている。

一度訳あつて手料理を振舞われた時なんて、フレンチのレストランみたいなのが出て来て来たんだか負けた気分になった。本人は作つてやるより作つてもらおう方が好きだとか言っていたけれど、あれを見た後だととてもじゃないが無理だ。

……実家でそんな話をする、あなたじゃなくてあのトレーナーが桐生院を継いでくれれば、と言われるから口に出さないけれど。

それでもへし折られなかったのは、その先輩が『期待してるぞ』と言ってくれたから。

2年以上行って行っていれば、先輩の人となりもなんとなく分かってくる。

ああ見えて彼は不器用だ。気休めとか、社交辞令みたいな「思ってもいないこと」は言えないタイプ。

担当のウマ娘に絶対の自信を持っている、という評判も、単に客観

的な事実を言ってるだけ。勝てると思ったから勝つと言ってるんだ。そして予想通り勝つから、周りに傲慢だと思われてしまっている。

つまり、私への期待は本心からのもの。少なくとも、私はそう思う事で、頑張りの原動力にしている。

多分だが、私は先輩のことが好きなんだろう。トレーナーになるための勉強ばかりでそう言う事に無関心だったから、今も良く分かってないけれど。

盆の宴席で、「彼を桐生院の入り婿にするのはどうだろう」……つまり私と彼の見合いを組んではどうかという親戚たちの話を聞いて、一瞬で彼との結婚生活が脳裏をよぎって……それがとても素晴らしいもののように思えたから、多分そういうことだ。

(……って！ 何考えてるの私い!?)

我に返り、人目もはばからずにぶるぶると頭を振って恥ずかしすぎる思考を追い出す。幸いなことに、周囲に人の姿はなかった。

けれど、次に思考するのもやはり先輩のことだ。我ながら、大分重症じゃなかるうか。

……私は、先輩が”そこ”に至るまでにどれだけ努力したか知っている。彼の師匠である東条さんも、恐らくたづなさんや理事長もだ。

彼の競争バを見る目は、恐らく日本一だ。ほぼ100%の精度で、その世代トップになるウマ娘を見出し、スカウトする。

——つまり。彼に声を掛けられなかったという時点で、ウマ娘たちは「1番ではない」ことを突きつけられる。それを乗り越えられるかどうか、最初の関門となっていた。

中央トレセンに入学を許されるようなウマ娘は、ほとんどが名家の血統であったり、突然変異的な天才であったりする。大体の場合、トレセンに入るまでは周囲より飛び抜けて足が速い。

そんな子が「なぜ自分じゃないんだ」と、先輩に食ってかかる姿を何度も見た。見返してやる、と自らを追い込みリギルに入った者もいるが……ことごとく、大成しない。今やトレセンの、一種の洗礼みたいな扱いである。

先輩の所に逃げウマが多いのは、彼女らが”アンタレス”の重みを

知っているから。

リギルとアンタレスの頂上決戦、と銘打ってはいるが、アンタレスをどうやって倒すか、が近年の主題だ。

その名を冠するということは、世代最強の証であると同時に、出走する全てのウマ娘に徹底マークされるということ。

リギルが、スピカが、カノープスが、あらゆる手段でもって彼女らを追い落とそうとする。

それを振り切って勝つというのは――初めから先頭に立つ逃げウマでもないし難しい。

いや……ミホノブルボンの時なんて、2人出走させ1人が勝ちを捨ててブルボンより前に出て無理矢理ペースを乱しに行き、脚を温存したもう1人が後半で垂れてきた所を追い抜く、なんて作戦をとったトレーナーすらいた。確か皐月賞の時だ。

テレビゲームで言う所の、チーミング。流石に問題行為として処分されたが、それでもブルボンを差し切れなかったウマ娘の絶望に満ちた顔が効いたか、周囲はむしろ同情的だったことを思い出す。

まあ、そのトレーナーは後に暴行傷害で捕まったので、つまりそういうことなのだが。あれだけやって勝てないのに、恥ずかしいと思わないのだろうか。

そんな状態だから、学園内での先輩の立場は極めて微妙なもので、その扱いは大きく三つに分かれていた。

一番真つ当なのは、不敗たる彼のチームを打倒すべくトレーニングに燃える者。東条さんを筆頭に、トップクラスのトレーナーは大体ここに入り、理事長もこれを推奨していた。

次に、雲の上の存在として、なんとなく誉めそやしている者。中堅以下位のトレーナーやウマ娘の大半と、体感7割ほどのレースファンがここに属する。

そして最後に、彼を疎む者。

彼が現れてからレースがつまらなくなつた。誰が勝つか分かってしまい退屈。”元”最強になったリギルの凋落を見ていられない。あるいは単に、彼の実力が妬ましい。

理由は色々だが、先輩は色々な所に恨みを買っている。だからって、あんな報道の仕方はないだろう。

先輩は、誰よりもウマ娘のことを考えている。いつもよりよいトレーニングを模索して、寝る間も惜しんで何やら研究を続けていた。ウマ娘の潜在能力を引き出す。それを命題にしていた先輩が、ドーピングなんてする訳がないのに。

ただ、隔絶して強いというだけの選手たち。かけるべきは賞賛であって、疑念でも、批判でも、不当な検査でもない筈だ。

『どうしてそんなに頑張れるんですか？ もう十分強いのに……』

一度、本人に聞いてみたことがある。

『あー……頑張ってるってより、頑張らされてる、かな。俺は昔から要領が悪くてさ。目の前に”出来そうな仕事”を見つけちまうと、全部終わらせるまで落ち着かないんだ。後回し、つてのが出来ない質なんだよ』

『……すごい』

バツが悪そうに答える先輩を見て、素直にそう思った。

『んな訳あるか、お陰で何回徹夜する羽目になったかわかりやしない。やらなきゃ気が済まないってだけで、疲れない訳じゃないんだぞ。社会的に問題ないってだけで、一種の病気だ、こんなもん。……すげえ目輝いてつけどマネするなよ？ 冗談抜きで過労死するからな』

先輩は自虐的に言っていたけれど、それはつまり、人並み外れて責任感が強いということ。

先輩はミホノブルボンを「精神的怪物」と評していたけれど。きつとそれは、先輩自身にも当てはまる例えだろう。あれはきつと、類が友を呼んだんだ。

『このままの暮らししてたら40そこそこでぶっ倒れる気がするし、さつさと一生分稼いで過労生活ともおさらばしたいもんだ』

そんな言葉で締めくくっていたが、その顔は「仕方ないな」という、どこか満足げなもので。

きつと何だかんだ言いながら定年まで勤めあげてしまうんだろうな、なんて、憧れと、どこか微笑ましい気持ちと共にその横顔を見つ

めていた。

もし、その背中をずっと追いかけて続けることができたなら。そしていつか隣に並んで、同じ景色を見ることができたら。きつとそれは、とても幸せだろうと思ったのに。

「……あれ、……」

思考に浸りながら歩いていたら、いつの間にか理事長室前の廊下になっていた。

あまり長居が歓迎される場所でもない。さつさと引き返そうとして――

「退職を願い出にきました」

「慰留ッ！ 君はこんなところで終わっていい才能ではない！」

――先輩と理事長の話を、聞いてしまった。

「え、なん、で」

バツシングされているのは知っていたが、慰めに行った時も彼は飄々として、まるで堪えていない風に見えた。

それが、どうして。

思考が停止し、後の話はほとんど聞き取れなかった。

私のミークは、サイレンススズカに粉碎された。

アンタレスのいるレースで2着なら優勝みたいなものだ、という慰めを貰ったことが2回ある。

だからこそ、先輩に勝ちたかった。

勝って、先輩の期待に応えて、あの慰めをしてきた奴等を見返してやろうと思った。私のミークなら、秋の天皇賞はダメでも有マ記念、望みはあると思った。

もし駄目でも、次のウマ娘で。

それでも駄目なら、その次のウマ娘で。

今にして思えば、とつくに手段と目的が入れ替わっていたんだろう。

……最後のチャンスだなんて、思わなかった。

思考がまとまらずに、ただ茫然と話を聞いていた気がする。

居ても立っても居られずにその場を逃げ出した気もする。

前後の記憶があいまいで、次に気が付いた時には夜が明けていた。あたりに散らばっている缶ビールと酒瓶から見て、どうやってか寮まで帰って深酒して、酔いつぶれていたらしい。

「先輩」

二日酔いで頭が割れそうだ。だがその痛みのお陰で、どうにか現実から逃げずに済んだ。

残ったのは、喪失感と、妙な納得感。

トレーナーでなくなった彼は、一般家庭出身の只人に戻る。桐生院家がそんな相手との交際を認めるとはとも思えないし、駆け落ちして生きていける自信も能力も、私にはない。

「……ああ、はは。わたし、失恋しちゃった」

碌にアプローチもせず、告白もしないで、私の初恋……だったと思われる何かが終わってしまった。いや、昨日の取り乱しぶりであろうや確認できた。間違いなく私は先輩が好きだった。どうしてこういうものに限って終わってから気づくのか。

言葉にすると、急に現実感が伴ってきて、いよいよ私は泣き出しました。

ミークに連絡を取るのも忘れて、私は生まれて初めて迎え酒をした。

## #4 坂路の申し子

「……ミツシヨン、病室の訪問、達成。しかしサイレンススズカとの対話は未達成。面会時間終了につき、引継ぎを申請します」

”事故”以来、私とスペシャルウィークさんは、会長よりミツシヨンを受領するようになりました。

「苦労だった。既にスペシャルウィークが行っているので、心配無用だ」

内容は、スズカさんの病室の訪問と、対話。所謂”お見舞い”です。スペシャルウィークさんと交代で、互いの余暇時間を調整し、途切れなく面会を続けています。

しかし、このミツシヨンは史上最高難度と推測されます。

現状、スズカさんとの対話成功率、0%。あの日から……訂正。マスターが最後に”お見舞い”に訪れて以来、ステータス”虚無”と思われる状態が続いており、こちらの呼びかけに応答しません。

「……伝えねばならんとは思うのだが、な」

”いらぬ心配を掛けたくないから”と、会長の判断により、スズカさんの容態はマスターには伏せられています。

秘匿期限は、マスターが進退を決めるまで、と聞きました。あまり長い時間はかからないものと推測します。

「ああ、それから」

「何でしょう」

「……トレーナー君が、呼んでいたぞ」

私はマスターより、精密機械の所持禁止を言い渡されているので、こう言う連絡は周辺の人を伝えて渡されます。

ですから、これは普段通りの連絡なのですが……会長は何故か、何かを堪えているように見えました。

その表情と口ぶりから、マスターは既に、会長には私より先に”伝えた”のだろうと理解。

……ステータス”胸部の不快感”を検知。過去の蓄積データより、マスターと会う事で解消可能と判断。至急、マスターのもとに向かい

ます。

朝だ。といっても、そろそろ11時になる。

秋雨前線も過ぎた今、空は無駄によく晴れている。

当たり前の話だが、俺の気分や行動に応じて土砂降りになったりはしないらしい。

「タキオンの検証はハズレだな……」

昨日の話を思い出し、胃の痛みを無理矢理飲み込んでトレセン学園の廊下を歩く。

今日、あと4人だ。

「……ブルボン、いるか？」

「はい、マスター」

ミーティングルームのドアを開けると、既にブルボンが待機していた。まずは彼女だ。

「本日はどのようなご用件でしょうか」

……既に、普段より落ち着きがないように感じられる。無表情に見える彼女だが、よく見れば人並みに反応しているのは分かる。

「あー、まあ、なんだ。ちよつと話があつてな」

もう四度目だが、言い出すのは慣れない。

「推測。それは、スズカさんに関連することでしょうか」

「……お前の口から他人の話が出て来るとはなあ。成長したな」

前置きも何もなく、最短距離で核心を突きに行く。ブルボンらしいと思う反面、つい二の足を踏んでしまう。

「発汗と視線移動から”話を逸らしている”と断定。阻止を試みます」

「わかったわかった、悪かったよ」

ジト目をこちらに向けるブルボンに、観念したと態度で示す。

今日は特に急かしてくるよう感じる。多分だが、彼女を呼びに行ったのがルナ辺りだったんだろう。マルゼンはこういうの隠せる方だし、タキオンは自分が行くタイプじゃない。

「まあ、何だ。色々考えたんだが……トレーナーを、辞めることにした」

分かっていたことだが、こいつに下手なごまかしは効かない。

そう結論づけ、少ししり込みしてから、本題を切り出した。

「……………」

……1秒、2秒、3秒ほどたつても、何の反応も返ってこない。

無表情のまま、ブルボンはフリーズしていた。

かといって不用意に弄れるような空気でもなく、そのまま空気が凍り付いたような時間が過ぎていく。

「……………了解しました」

一秒ごとに胃に感じる重さが増し、ついに刺すような痛みを覚え始めたころ、ついにブルボンが再起動した。

「へ、あ、いいのか？」

俺の方が拍子抜けしたような声を出す番だ。

「それが、マスターの選択ならば。私はそれに従います」

……ああ、そうだった。こいつはこういう感じだった。

命令に従いますとそう言うって、どんなハードなトレーニングも平然と熟してしまうのが彼女の強みで……危うさでも、あつたんだ。

「私がこの成績を収めることができたのは、マスターのお導きがあったからと確信します」

彼女は本当に……本当に、命じれば、どんなことでも”した。実際、体よく実験にこき使おうとするタキオンを何度か折檻している。

一応断っておくが、いかがわしいことは一切していない。ただ、もし全然トレーニングに関係ないことを命じたとしても、適当に丸め込んだら実行してしまうんじゃないかというくらいの従順さだった。

「俺はただ道筋考えてやっただけだろ。あんなメニユーを完走したブルボンの手柄だよ」

『私の望みは、クラシック三冠のみです』

そう言ったブルボンの目には、およそ人間味というものがないがなかつた。

彼女の本来持ちうる素質——短距離レース主体でデビューさせようと言うトレーナーから引き取る前から、トレーナーの課していた練習に追加で坂道ダッシュするような……言いたかないが、狂った女だった。

『それではオーバーワークになるのも時間の問題だ。いいかい？一流のアスリートというのは、完璧な体調管理の下で致死量ギリギリの毒薬を躊躇いなく服用する、狂った精神の持ち主でなければなり得ない。キミは後者ができる才能を持っているが、前者をおろそかにしている。端的に言うのだね、それは自殺だよ』

タキオンが珍しく、怒りを露わにしてまくし立てていたのを思い出す。脚に抱えた爆弾のせいで幼少よりギリギリを攻めるトレーニングを強制されてきた彼女には、折角の頑丈な体を使い潰すブルボンの在り方が我慢ならなかったようだ。

タキオンと俺は、彼女のために虐待と言われたら言い逃れできないようなトレーニングメニューを考案した。それこそ、ブルボンのことはギリギリ壊れない程度にしか考慮していない、理論上の最高効率だけを追求するような代物を。

ほとんど全て、本人からのオーダーだった。

少しでも余分な——と言っても、常識的な範囲で見れば十分スパルタの域に入るレベルの——余暇を増やすと、それを見抜いて自主練に充ててしまうのだ。

ただでさえ、怪我ギリギリのトレーニングを強いている。見ていない所で追加トレーニングされたら本当に潰れかねなかったので、本人が納得できるくらいに限界の限界まで追い込んでやらねばならなかった。

「いいえ。マスターが居なければ、私はクラシックに出走することさえできなかったと推測。故に、マスターの存在と、私の成績には因果関係が認められます」

彼女はそれを、文句の一つも言わずに完遂した。

どころか、「辛い」「キツイ」「しんどい」のような、ちよつと座る時、スポーツドリンクの入った水筒から口を離れた時、早起きさせられて集合した時にポロっと出るような弱音すら、一言たりとも聞いたことがなかった。

——思えば、マスコミや同僚たちが俺を気味悪がり出したのはこの頃からだ。

「違うもんか。結局、やったのはブルボンで、走ったのもブルボンなんだから」

「いいえ。私一人では、夢に近づくことも、新たな夢を見ることもありませんでした」

二人でいると、大体こうやって手柄の押し付け合いになってしまふ。

意地っ張りは相変わらずだが、昔と比べて随分人間らしくなったものだ。というか——

「……新たな夢？」

初耳だった。

「私の父と会った時のことを覚えていますか」

「ああ」

URAFファイナルズを走り切った彼女に連れられ、彼女の実家で父親に引き合わされたことがある。

彼女がどれだけ頑張っていたか伝え、三冠を取らせてやれなかったことを詫びた。彼女が、ヒールとして扱われてしまったことも。

『君が至らなかつたのではなく、ライスちゃんと言ったかな、彼女がもつと頑張つたということだろう。娘の顔を見ればわかるさ』

そう言ってもらえて、俺は恥ずかしながら随分ほつとした。娘を預かっておいて夢を叶えてやれなかつたから、正直、嫌味の一つくらいは言われる覚悟だつたのだが。

彼女の父は、こんな俺を歓迎してくれた。

ブルボンもいい男を捕まえて来たじゃないか、なんて、微妙にずれているような正しいような評も得た。俺としては、教え子に手を出すほど落ちてはいないつもりなのだが。

「私がマスターに抱いている感情は、父に向けているものと似ていると考えていました」

「ああ、そう聞いたな」

帰りの電車で、彼女はそんな話をしていた。確かその続きは——  
「ですが、実際に父と比べて。私の抱くこれは、違った種類の感情であると確認しました。これの……解明は、現在すでに完了しています」  
そう語る彼女の頬は、ほんの少し上気している。いつの間にか、彼女も本当に人間らしくなった。

「そうか」

しかし、ブルボンの向ける感情か。『父』じゃないとして……いや、まさか。

「はい。ですが、この答えは、今のマスターにはお伝えできません」  
彼女に限ってそうはならんだろうと思っていた。……ひよつとして俺は、とんでもない物を見落としていたのかもしれない。

「ステータス”重荷”に、なると考えられるためです」

「……」

答えに詰まる。

「ですが、一つだけ”お願い”があります」

お願い。

覚えている限り、彼女がこんなことを言い出すのは、初めてだ。

「私に『マスターを待つ』という行動を、許可してください」

——なんてことだ。俺は、何を弄んだ。何に気づかなかった。

「私は、走り続けます。」

走って、いつまでもマスターの帰還を待っています。

いつか、マスターが戻ってきて下さったら。その時、答えを伝えようと思います。

ですから——いつか。戻ってきてください、マスター」

ブルボンの顔は、普段通りに見える。だが、明らかにこれは……トレーニングの終盤の、失神ストレスの負荷に耐えている時の顔だ。

人間らしくない彼女が、一番人間らしくなるところを、俺は見えていなかったというのか。

それで、久しぶりに二人きりで話して、こちらから別れを告げたのか。

「あ、あ……いや、駄目だ。それは許可できない」

「何故、ですか」

ブルボンの顔が、明確に曇った。初めて見る、表情らしい表情だ。「それは、自分の意志で決めることだ。一々俺の許可なんて、取らなくていいんだよ」

担当のことだけは、理解しているつもりだった。……何もわかってないじゃないか。

「だから、最後の命令だ。……俺の事は早めに忘れて、どれだけかかってもいい、自分の力で新しい進路を見つけてくれ」

「……………かしこまり、ました」

これでいい。

こんなの事は早く忘れて、前に進んでくれ。

「最後になるが……ごめん、ブルボン。気づいてやれなかった」

まだブルボンが何かを伝えようとしている気はしたが、それ以上は耐えられなかった。

だからそれだけ言い残して俺は、振り返らず、逃げるようにミーティングルームを後にした。

……最早戻れない。

テイオーとスズカは、恐らくもつとだ。

次は、ゴルシだろうか。

## #5 破天荒

「悪い！ お前の貯金、FXで全部溶かしちゃった!!」  
第一声がコレだ。ゴルシらしくもない。

「ゴルシが嘘つくとは、珍しいこともあるもんだな」

奇特、奇怪、破天荒。やることなすこと意味不明。

周囲の評判はそんな所だが……実のところ、彼女は誰よりも仲間想いで、何より賢い。9割の奇行の中に、1割の思慮深い行動が紛れ込んでいるウマ娘。頭が良すぎて逆にバカ。

それがゴルシだ。こいつは、人に不利益だけを与えるような悪ふざけはしない。

「……んだよノータイムかよお！ ちよつとくらいビビれよなー！」

「何年の付き合いだと思ってる。もう慣れた」

こいつがいつの間にかチームに居つくようになったのはいつだったか。

実を言うと、正確には覚えていない。記憶力には自信がある方だが、ある日を境に当たり前のようにチームミーティングに顔を出すようになったような気がする。

「なんだよつまんねえ顔しやがって！ ははあん、さては学食の冷やし中華に中ったか！」

「2か月前までの限定だったろアレ、あと俺はまだ昼飯食ってないぞ」  
「知らねえのか！ オセアニアでは冬に冷やし中華は常識なんだぜ!？」

あ、常識と言えばバミューダトライアングルの裏側から訴状来たんだけどさ、アレ読めなかったから紙飛行機にしてマックイーンに投げただけどよ、風に乗ってアタシの目ん玉に直撃しやがって」

ペラペラと意味の分からない言葉を喋るゴルシ。本気で解読すると実は意味のある文章だったりもするのだが、今日はそこまで頭を回す気力が出ない。

「どこから突っ込めばいいんだ、それ」

「どこからでも開けられますって書いてるパウチの開けられない方からだな」

「全方位ってことか……おい、どこ行くんだ？」

おもむろに歩き去っていくゴルシに声をかける。

「昼飯まだなんだろ？ 買って来てやるよ」

「……助かる。高菜な、おにぎり」

「ツナマヨもだろ。わーってるって！」

相変わらず、言動の意味不明さに比して気の利くやつだ。

財布から出した500円玉を投げてよこすと、ノールツクのままジャンプしてわざとらしく空中でポーズをとりながら確保。そのまま職員寮傍にあるコンビニへと走って行った。

生徒は立ち入り禁止だが、まあいつもの事だ。見つかって怒られるようなへまはするまい。

(……アイツなりに、心の準備の時間を用意してくれたってことかね) 思えば随分振り回されてきた。

急に無人島に放り出されたり、たこ焼きの屋台をやると言って材料調達のために蛸壺づくりをしたり、時代はクイズだと言いつ出したかと思えばアメリカを横断するクイズ大会破りに同行させられたり——  
(練習してた記憶がねえ……)

どうしてこいつがG1で4つも勝てたのかは、恐らく彼女自身にしか分からないだろう。勝利者インタビューで秘訣だのコツだの聞かれる度に、どうにかして言い訳をひねり出すべく頭を回した日々が懐かしい。

本人が楽しそうだったのでよしとしたが、本当に良く分からない奴だ。ある意味ブルボンの対極……なのだろうか。

しかしまあ、こいつの勢いに飲まれていると余計なことを考えずに済むので、

「ほらよ」

「おう、サンキューな……んだこれ」

物思いに浸っていると、ゴルシがペットボトルの緑茶を持って戻ってきた。

生の真鯛と一緒に。

「言ったら、昼飯！」

「ああ、おにぎりは別であんのな……どうしたんだこの鯛」

見ればまだ生きている。この一瞬でどこから持ってきたのやら。そう言えばバレンタインにも貰ったな、生の真鯛。

「んな細かいこと気にすんなって！ 田舎行ったらいくらでも食えるだろ？」

「……なんだ、知ってたのか」

どうやって言い出したものかと思ったが、取り越し苦労だったらしい。

「おうよ。トレピツピのことならこのゴルシちゃんが一番よく知ってっからな」

どこで知ったかは言いたくないということか。

「まあ、そういう訳でな。辞めることになった」

「ほーん、んで、どの辺に引つ込む予定なのか決めてんのか？」

意外にも、普通に引退後の話を聞かれた。

ああ、そういえば最初の方は全員こういう感じになるんじゃないかと予想していたつけ。今にして思えば何を甘いことをと言う話だが。

「あー、細かいことは決めてないんだけどな。直接行つた先で落ち着くとマスコミが辿つてきそうだから、実は三か所アパートを取つてある」

「……本気なんだな」

いつになく真剣な表情のゴルシ。

「ああ。ま、元々さっさと引退するために金稼いでたんだし、当初の目標通りと考えたらそう悪いもんでもないぞ」

「そうか。田舎かあ、いいじゃねえか。アタシも一遍くらいは無人島とか開発してみたかったんだよなあ」

……こいつ、付いて来る前提で語つてやがる。

「それともアレか？ 里山で手に入れたヘラクレスオオカブトとアトラスオオカブトの決戦が見れるかもな!？」

だが、まあ。

「——まあ、いいんじゃないか？」

「へ？ おいおいいつものツツコミはどうしたんだよワトソン君!？」

「誰がワトソンだ。ゴルシなら止めても来るだろうってだけだ。それに」

マルゼンと違って、メディアに捕捉されて云々とか考えるだけバカらしいのが、こいつだ。俺より先に潜伏先に居座って、玄関開いたら寝そべってゲームしてる、くらいは普通に想像できる。止めるだけ無駄だ。

何より――

「俺が本気で来てほしくない時は来ないだろ」

こいつは、そういう奴だから。

「っ――んだよもー！ 今日のおマエ遊びがいがねえなー!!」

「仕事辞めようってんだから一応マジメにしてんだよ!」

同時に、こいつにしんみりした空気が似合わないのも道理だ。

笑って、バカやって、すっぱり別れる。あるいは付いて来る。それでいい。

「あ、それと。今朝俺の私物だいたい全部にちっちゃく”金”って文字書いてたのゴルシだろ」

「お、知らなかったのか？ ゴルシちゃんは遍在するんだぜ」

……ひよつとして、ものすごく遠回しに「あれをアタシだと思って」と言おうとしてるんだろうか。

「お前なあ……」

いやいや、こいつに限ってそんな湿っぽいことはするまい。思考がブルボンに寄っている。きつとそうだ。

「別にいいだろ、アタシと何かあつた訳でもねえんだし。それともなんだ、うまびよいしたのか？ アタシ以外のヤツと……」

「隠語みたいに使ってんじゃないやねえよ!」

それからは、いつも通りの言い合いが続いた。

こいつなりに、去っていく俺のことを考えてくれているのだろう。気兼ねなく出て行けるようにしてくれている。

気のせいかもしれないが、気遣いの上手いゴルシなら、あるいは本当にそうかもしれない。

「――ま、辞めてからも元気にしてろよ」

話が途切れた後。急に、真面目な顔でそんなことを言い出すゴルシ。

それに答えようと、口を開こうとする直前。

「……トレーナー」

背後から、聞きなれた、特徴的な声とする。

トウカイテイオーだ。

「よ、よおテイオー、どした」

「今の。本当？」

ゴルシの顔が一瞬強張った直後、わざとらしく口笛でも吹きそうな顔になった。

台詞にして「やっべ」からの「しーらね」だろうか。

「んじやアタシはゴルゴル商事のTOBが忙しいから……じやあな!!」

一転、凄まじい勢いで逃げ出すゴルシ。あれを宝塚記念の時やっれば勝てたと思うんだが……まあ、あいつはやる気のあるなが極端に成績に出るタイプだった。考えても仕方ないか。

「トレーナー、辞めちゃうの？」

さて、現実逃避はやめにしよう。

目の前のテイオーは、明らかに眼の光が消えている。

チーム唯一の中等部のはずなのに、返答如何では命はないかもしれない。そう思わせる圧があった。

## EX2 変人記者十α

「掲載しないって、どういうことですか編集長!!」

月刊トウインクルの編集部に、女性の怒号がこだまする。あまりの剣幕に、オフィス全体が一瞬硬直した。私とて、取材で修羅場を潜った経験がなければたじろいだかもしれない。

例のトレーナーを担当していた……いわゆる番記者の、乙名史の声だ。

「記事に何か不備でもありましたか!?!」

そんなものはない。本人も分かっているはずだ。

私の手元には、“ボツ”となった——編集長である私がそうした——彼女の原稿がある。彼女の全身全霊で書き綴られた、「チーム・アンタレス」の活動記録。次号の月刊トウインクルに掲載される予定のものだ。

トレーナーの彼がどんな思いで、どうやってウマ娘達を育成してきたか。担当ウマ娘たちが、どれほど彼のことを想っていたか。彼女が密着し出してもう何年になるんだったか。そうして積み上げられた情報の……いや、“思い出”の全てが、確かにここにある。

記事の最後は、彼の担当ウマ娘……シンボリルドルフへのインタビューで締めくくられる。

『ターフには夢があると信じて走ってきた。現実はどうだ。疎まれ、悪役に仕立て上げられ、あらぬ疑いを掛けられるのみだ。我々は、ズルをしていると後ろ指をさされるために必死でトレーニングしてきたのか』

ややお涙頂戴感はあるが、これくらい露骨な方が大衆には効く。

これを発信すれば、世論が動く。

そう思えるほどの熱が、この記事からは感じられた。

——だから、止めた。

「いや、ない。完璧に仕上がっているよ」

「だったらどうして!!」

あの記事に込められた熱量を見れば、納得いかないのも理解でき

る。

なおも私に食ってかかる乙名史。本当に彼女は、この仕事に向いている。

だからこそ――

「完璧すぎるんだ」

こんな、汚いものを見せたくはなかった。

「一連の流れ。バッシングからドーピング疑惑までがスムーズすぎることを、君も勘づいていると思う」

「ええ、だからこそ私は!!」

「流れには、”逆らわなければいけないもの”と、”逆らってはいけないもの”がある。前者は、衆愚によって自然発生したもの。後者は、意図的に作られたものだ」

ぴしやり、と強い口調で言い切る。乙名史の表情が、怒りから失望に変わった。

「……っ！　あなた、まさか」

「私にもプライドはある。この件で私は一切の利益を得ていないし、これから得る気もない。だが、君のそれが世に出たら、『逆』がないとは言えない」

そう言つて、乙名史の目を見つめる。

「世の中には、人の命すら軽くするほどの重さを持った情報がある。君のそれは、今そうだ」

分かつてくれとは言わないし、言えない。人間としても、ジャーナリストとしても、君が正しい。きっと私が君くらいの歳だったら、間違ひなく同じことを言つたさ。

私とて、有望なウマ娘トレーナーが過剰な誹謗中傷の嵐の中に居たら、肩入れくらいしたくなる。

「私は、命なんてっ」

「君はそうかもしれない。私もそうだ。命知らずでなければジャーナリストなどやっていない」

皆が白だと言つていても、それが黒ければ黒だと声を上げる。確かにそれが、ジャーナリストの姿だ。

「なら、どうして止めるんですか!!」

「2人では済まないからだよ」

だがね。今の私には妻と、2人の息子と、数十人の部下がいるんだ。私は、ジャーナリストでいるには、守るものを増やしすぎた。

民放各社を抱き込めるような相手。中堅レベルのスポーツ雑誌の編集部の抵抗なんていうのは、抵抗とは呼ばない。自殺と言う。

どうか恨め。私は卑怯者だ。

「分かってくれ乙名史。この業界にいるんだから、君だって知ってるはずだ」

——レースは血筋のスポーツだ。

ウマ娘と同じように、トレーナーにも名家があつて。彼の才覚は、その存在意義を破壊してしまつたんだよ。

これはその「報復」か……いや、もつとレベルの低い、「負け惜しみ」あるいは「最後っ屁」だろうね。



ウマ娘レースとは、ブラッドスポーツである。

ここで言うブラッドスポーツとは、「血生臭いスポーツ」という意味ではなく、「血統のスポーツ」という意味だ。名門に生まれたウマ娘が、かなりの確率で普通のウマ娘より優れた”さいのう魂”を宿すことによる。

そして、血統重視の傾向は、トレーナーの側にも存在する。

ことウマ娘レース界では、未だに事実上の貴族と呼んで差し支えない「ウマ娘の名門」がいくつも存在する。血統の良さが実際に強さに繋がるので、自然と富や名声が集まることによる。

そうやって名声を得た彼女等が誰を伴侶とするかと言えば、それは大抵の場合トレーナーである。ウマ娘というのは、本能的に速く走ることを求め、それが高じて「自分を速くしてくれる者」に好意を抱き

がちだからだ。

すると、どうなるか。

名門ウマ娘の格式に見合うトレーナーの需要が生まれる。すなわち、「トレーナーの名門」の誕生だ。

今でこそトレセン学園による免許制が浸透しているものの、業界内には「名バには名トレーナーを」という不文律が根強く残っている。ここで言う名トレーナーとは、勿論名家のトレーナーという意味だ。

今まではそれが問題なくまかり通っていた。知識面での独占が取り払われたとは言え、直接ウマ娘に触れあう機会が多く、父母の仕事ぶりを見て育つ名門出身者は、何だかんだ一般家庭出身者より優秀だったからだ。

だが、その常識は「あのトレーナー」の登場によって崩れ去る。

何も知らぬ一般人は、血統に寄らず結果を出す彼を「革命児」と呼んで誉めそやした。

——だが、革命が起きると言うことは、元いた強者たちが都落ちするということなのだ。

「『ゴルゴル商事』を名乗る企業が、我が家の管理する企業のひとつに敵対的TOBを仕掛けてきた」

ふざけた企業名を大真面目に読み上げた男は、会議場である豪華な洋館に見合う上等なスーツを着ている。

「商事？ 聞いたことがないが……海外ベンチャーか何かか？」

「いや、経営実態そのものが存在してない。上場はしているから事実上のSPAC、買収目的のペーパーカンパニーだろう。問題は資金の出所だ」

別の男が補足する。情報は行き届いているようだ。

「新興ベンチャーへの投資という名目で、メジロ家からかなりの資金が流入した形跡が見つかりました。その上企業の設立自体がつい先日。露骨さから見て隠す気がなく、威圧か、警告が目的と見るのが妥当かと」

出席者たちに動揺が広がる。

「メジロ家はあのトレーナーの肩を持つと？」

「タイミングから見て、そう考えるのが自然でしょいうな」

「突然変異の個人を取ったか……忌まわしい。だが予想された事態だ」

メジロ家が直接出て来た場合、業界を真つ二つに割つての戦争ということになってしまう。

故に、間にペーパーカンパニーを挟んで名目上の距離を取ったのだろう。男達の見解は一致していた。

「元より我等は敗残兵。味方などおらんさ」

ざわつく者達を纏めるように、また別の壮年の男が声を上げた。

「全ては娘の失態。こんな愚物に付いてきてくれた皆には感謝の言葉もない」

集まった身なりのいい者達の中でも特に風格のあるこの男こそ、トレーナーの名門一族を取り仕切る家長。

「娘が勝てれば、問題はなかった。いや、そうでなくともG1で2、3勝していれば面目は保てた」

滔々と語る男は、しかし恥じ入るような、罪を告白するような沈痛な表情。

——彼らは、あの天才トレーナーに対抗すべく、名家としての全てを注ぎ込んだ”最高傑作”をトレセン学園に送り込んだ。

担当のウマ娘も、サイレンススズカほどではないが極めて高い適性を持つ者が宛がわれた。

名声を上げ続けるアンタレスのトレーナーにより、ファンの中で「名家不要論」とでも言うべき論調が持ち上がっていたからだ。

——結果は、G1未勝利。(G1だけで)6戦6敗、全て2着、どれも1着はアンタレスのスズカ。

2着にはなっているから本気ではなかったという言い訳は通用せず、スズカにだけは負けているからアンタレスには勝てないことが証明された。考え得る限り最悪の負け方であった。

スズカのいないレースを選べばよかったものを、とは、家の全員が思う所。

勝ちに固執し「次こそは必ず勝つてみせます」と言い続ける娘の懇願を、信じてしまった親心が招いた悲劇であった。

「かのトレーナーの活躍により、名家の存在意義に疑問を呈する動きが強まった。事実我等は敗北している。最早この流れは止まらないだろう」

斜陽になっても名家は名家。古い伝手を辿ってマスコミ各社に忖度を強制したり、事故映像を全国に流して世論を誘導する位は容易にできた。

それで十分。彼らはそう確信している。

「これは、生存競争である」

男は会場に集まった者達を見渡すと、毅然と宣言した。

「道は三つ。抱き込む、潰す、潰される」

かのトレーナーに、家が潰されようとしている。少なくとも、彼らは全員がそう理解している。

”計画”が成功すれば良し。さもなければ消えるのみ。——不転の覚悟にて、桐生院150年の伝統を守ってみせよッ!!」

——滅びゆく彼らには、しかし抵抗する力が残されている。

少なくとも、今はまだ。

## #6 帝王

ボク——トウカイテイオーの夢は、無敗の三冠ウマ娘、だった。でも、それはもう叶った。

叶えてもらったんだ、誰よりボクのことを考えてくれて、ボクの夢と一緒に追いかけてくれる……大好きな、トレーナーに。

カイチョーに憧れてトレセンに入った時……二日目にはもう、ボクの前に今のトレーナーがいた。

入学の後、一番最初の選抜レースすらまだの時だった。フシンシャ扱いしなかったのは、その人がカイチョーのトレーナーだと知っていたから。

『ルドルフが、君のことを話してくれてな。以前からマークしていたんだ』

嬉しかった。

カイチョーが無敗の二冠を達成した時、ボクはインタビューを受けている所に割って入って、話を聞いてもらったんだ。

——そのことを覚えてくれたばかりか、自分のトレーナーに推薦までしてくれてた。もう嬉しすぎてどうにかなっちゃいそうだった。

一緒に、自信もついた。

まあ、元々ボクってば天才だったけど？ そのウラツケが得られたからね。なんせボクのトレーナーは、ボクにふさわしい……ううん、ボクよりよっぽどすごい天才だった。

マルゼンスキー。シンボリルドルフ。アグネスタキオン。ミホノブルボン。あとゴルシ。

皆強かったし、皆トレーナーがスカウトして来たんだって聞いてた。ってことは、スカウトされたボクにもカイチョー達と同じくらいの才能があるって、トレーナーが認めてくれたってことになる。

ボクもその一員になれるんだって、そりゃあもう喜んだっけ。

……好きになったきっかけは、多分トレーニングの方針で喧嘩した時だ。

いつまでも基礎トレとか身体づくりばかりさせようとするから、

ボクが我慢できなくなつて走りまくつてたんだよね。

そしたらトレーナーにバレて、普段ヘラヘラしてるのがウソみたいに怒られた。後で聞いた話だけど、ミホノブルボンがボク以上の練習バカだったから見張るのが上手くなつてたみたいだ。

後はもう言い合いで、トレーナーが熱くなつた拍子にポロつと、ボクの脚に怪我のリスクがあることを言っちゃった。

才能がありすぎて、思いっきり走つたら体が耐えられない。しかも、走るフォームが独特で着地の時足にかかる衝撃が大きい。今まで壊れてないのは、関節の柔らかさで無理矢理ゴマカしてるだけで、いつ吸収できる衝撃の限界を超えて折れるか分からないって。

……実は、心当たりはあつたんだ。思いっきり走つた日は、なんかこう、足の関節がもやもやする時があつた。

だから自然と、本気で走る……コンディションが最高の時はぴよこぴよこ動いて”準備”するようになった。『テイオーステップだー』とか言われてすっかり持ちネタだったけど、あれは多分そういうことだつたんだよね。

トレーナーは、ボクよりボクの体のことに詳しくかつた。……それが嬉しかったんだ。自分で思つててなんだけど、ちよつとヘンな意味に聞こえるね。

まあ、その時のボクはバカだったから、結局トレーナーの言うこと聞かずにこつそり走つて——菊花賞の後にガタが来た。

いざ骨折を診断された時不思議だった。「走れなくなるかも」よりも、「今度の有《font:ul40》馬《font》記念どうしよう」よりも、これからトレーナーに怒られるのが……ううん、トレーナーに見放されるのが怖かつた。

だつてもう、ボクが目標にしてた無敗のクラシック三冠は達成してたから。そのまま引退になつてもまあ、ちよつと残念だつたねくらいの感じで収まっちゃうんだ。

ボクが言うのもなんだけど、言う事聞かずに壊れちゃつたボクなんかほつといて、次の子を育成したほうが効率いいもん。

それに気づいて、ボクは、ボクが「用済み」になるのが……トレー

ナーに捨てられるのが怖くて怖くてたまらなかった。

それで、多分酷い顔してたんだと思う、トレーナーのほうを恐る恐る向いてみたら。

『そんなにビビることないぞ。リハビリすればまた走れるさ』

いつもと違う、自信たつぷりの笑顔で頭を撫でてくれて。

『まあ？ テイオーが満足だつて言うならそれでも——』

『……走る』

『そうか。じゃありハビリ頑張らないとだな』

そうやって発破をかけてくれた。

きつとトレーナーは、ボクが走れなくなるのを怖がってると思ったんだ。

違うんだけど……でも、トレーナーが何かと気を使ってくれるのが嬉しくて、すぐどうでもよくなっちゃった。

ボクはカイチョーの無敗三冠をなぞることばかり考えてたから、いざ骨折して暫く休んだのは、次の目標を決めるのにはいい機会だったのかもね。……いや、やっぱり悔しいから今のナシ。

それから、なんとなくリハビリを始めた。今更走る以外の事を始める気にもならなかったし。

——言われた通りにトレーニングするようにしたら、ビックリするくらい調子が良くなって行った。骨折自体が軽めだったから、お医者さんの「半年」つていう見立てより早い5か月ちよつと後、大阪杯にギリギリ間に合った。

一度レースを離れたからかな。目標に突っ走らなくなったからかも。その頃にはなんとなく、周りが見えるようになって。

初めの方は「アンタレスにいるなら勝つて当然」みたいな、期待の高さだと思ってた。

周りのボクを見る目は、強いウマ娘を尊敬するつていうのも確かにあったけど。

怪我から帰ってきた時に分かっちゃった。大体三分の一位の同期の子たちが、目でボクに言うんだ。

《何で帰ってきたんだ》

《これ以上何を望むんだ》

ボクの勝ちには、周りにはあんまり歓迎されてないんだなって。

ボクが落ち込んでるのを気にしたトレーナーが「新しい目標を持つてみたらどうだ」と提案してきた。

ちよつと考えてみて——ボクは、やつと気づいたんだ。

『ねえトレーナー。ボクが勝ったら、トレーナーはよろこんでくれる？』

『おうとも。そんで好きなだけ褒めてやるよ』

いるじゃん。ボクの勝ちを、ボクを、誰より見ていてくれる人。

——ボクは、カイチョーの七冠を超えたいって言った。確かに、勝ちたかったのは本当だけど。

本当の本当は、トレーナーに喜んで欲しかっただけなんだ。

無敗のままカイチョーを超えるっていう新しい夢の頭には、「トレーナーのために」っていう言葉がついてた。

まあ結局、2回失敗して7冠止まりだったんだけどさ。

トレーナーは「惜しかったな」って言うってくれて、残念会だーってあちこち連れ回してくれたけど。

ボクはずーっと、楽しかったんだ。

だってボクの夢は、とつくに叶ってたんだもん。

「トレーナー」

だから、ダメだよトレーナー。

「今の。本当？」

トレーナーが居なくなっちゃったら、ボクはこれから何のために走いって行けばいいのさ。

「テイオー、どうして、ニッコ」

「答えてよッ!!」

全部全部、トレーナーのためだったのに。

トレーナーが褒めてくれるから頑張れたんだよ。

なんだかんだ言っつて、いつもはちみつドリンク買って来てくれるから。

居て欲しい時は一緒にいてくれるから。

研究明けの時、無精ひげをさわって遊んでも怒らないから。

……いつも他の女という所だけは、イヤだけど。

「嘘だよ、ね。はやくそう言っつてよ。トレーナー」

でもボク………すっごいイヤだけど我慢できるよ。トレーナーがボクの傍にいてくれるなら。

「いいか、テイオー。落ち着いて聞くん」

だからやめてよ。そんなマジメそうな顔しないでよ。

ゴルシと一緒に「ウソです!!」つて言っつてよ。

それで、怒った……フリをしてるボクがポカポカ殴って、トレーナーが笑いながら悪かったつて言っつてき、ボクが賠償を要求する……とか言っつてはちみつドリンクねだつて、それで終わり。それでいいじゃん。ねえ。

「俺は、トレーナーを」

「聞きたくないツ!!」

今ボク、どんな顔してるんだろう。

「嘘つて言っつてよ!! 残るつて!! それ以外聞かない!!」

「テイオー……」

トレーナーが悲しそうにこつちを見てる。

「やだ、やだよお………なんでいなくなつちやうのさあ……」

「……すまん。もう、決めたことなんだ」

答えになつてない。

「やだ……やだ! やだやだやだ!! 行かないでよトレーナー!!」

首を振つて、叫ぶ。

「ボク、頑張るから!! トレーナーのためにもっと、ちゃんとするから」

そうだ、トレーナーのバッシングを何とかすれば。

どうしたらいい。

ボクには何ができる。

「トレーナーが困つてることにも、きつと何か手伝うから! きつと役にたつからあ」

「ボクを捨てないでよお……何でもするからあ……うう、ぐすつ、行つちややだあ……」

なんで。

なんで。

なんで。

頭の中がぐちゃぐちゃになって、何も考えがまとまらない。

ただ、胸のあたりがぎゅつとして、痛くて、吐き気がする。

「……分かってくれとは言わない。恨んでくれていい。これが最善なんだよ」

トレーナーはボクを抱きしめて、頭を撫でながら諭すように言う。

「……ああ、あったかいなあ、えぐつ、うう……」

”これ”が、もうもらえなくなっちゃう。

イヤだ。

イヤだ。

じゃあ、どうしたらいい。

スツ、と。思考が冷えていくような感覚が。いや、熱すぎるものに触ると逆に冷たいような気もする、あの感じがして――

――気づいたら、トレーナーを突き飛ばしていた。

多分、力加減が出来てない。トレーナーはすごい勢いで倒れて、背中がコンクリの床に叩きつけられて、口から空気が吐き出される音がした。

ボクはウマ乗りの体勢になっている。

「がっ……は、て、いおー……」

眼下に、トレーナーがいる。抵抗はない。

いや、できないんだ。

「……男の人って、こんなに弱いんだ。そっか」

ボクは何を言ってるんだろう。でも、ウマ娘のボクじゃなくて、生き物のボクが、こうしろと言ってる気がするんだ。

――トレーナーを、ボクのものにしろって。

「ボクは、ただトレーナーと一緒に居てくれれば、それでいいのに」  
ボクは何をやってるんだろう。

このまま、ボクのものにすればいい。  
だってボクは、強いんだから。

「ボクはトレーナーが好きだった。ううん、今も大好き」

首に手を掛ける。トレーナーの黒目が、少し縮んだ。

「ねえ。ボクと一緒に居よう」

これは、脅迫だ。

何でもいい。トレーナーさえ居てくれれば。

「別に、トレセンじゃなくてもいいんだ。二人でき、何処かに行ってもいいよ」

ほんのちよつとだけ、手に力を込める。

面白いくらいビクンと体が震えた。

「あは、いいアイデアじゃない、これ？ 大丈夫だよ、ボクなんでもするから。トレーナーはただ、居てくれればいいんだよ」

ああ、何やってんだろ、ボク。

「ねえ、だから……ウンって言ってよ、居なくならないでよお……一緒にいてよお」

どうせ、これ以上力を入れることなんてできやしないのに。

「……ティオー」

頭に、いつもの手の感触。

涙で良く見えないけど……撫でてくれてる。こんな、ボクを。

「ありがとうな、こんなに、想ってくれて」

そんなこと、言わないでよ。

また、力が緩んじやう。

そしたらトレーナーが、抜け出して行っちゃう……。

「そんで、ごめんな。ティオーの気持ちには、応えられない」

「やだ、やだあ……」

しばらく、そのまま抱き合って……トレーナーの、携帯が鳴った。

あれ、トレーナーっていつもマナーモード——

「はい、もしもし——っ!? スズカが!？」

トレーナーがすごい勢いで携帯を取って、みるみる顔が青くなつて  
る。

「トレー、ナー?」

「すまんテイオー、話はあとだ! スズカが病室から」

携帯もしまわずに立ち上がり、ボクを押しつけて走って行こうとする  
トレーナーを見て。

なんとなく、もう二度と会えなくなるように思っ  
て、咄嗟に腕を掴  
んだ。

「待って!」

「っ、離してくれ、緊急事態なんだ」

「でも、だって——」

「このままじゃ、結局トレーナーはボクの前から——

「いい加減にしろ!!」

「ひっ!」

今までにないくらい、切羽詰まった、苛立った声。

多分、ボクがこつそりトレーニングしてた時よりも、ずっと。

「あ、うあ……」

「っ、……すまん!」

離れた手を近づけたり遠ざけたりしているボクに一言だけ声をか  
けて、トレーナーは走って行つた。

分かつてる。スズカに何かあったんだ。

トレーナー優しいもん。でもさ……

「っ……ぐしゅっ、えぐ、ひうつ……うええっ」

これじゃあ、ボクが拒絶されて……スズカが優先されたみたいにし  
か、思えないよ。

「いやだよお……とれえなあ……っ!」

こんなのが、最後の思い出なんて嫌だ。

でも、今のボクは結局、騒ぎを聞きつけたカイチョーとエアグルー  
ヴさんに介抱されるまで、ただ泣いている事しかできなかった。

……こんなんだから、トレーナーに捨てられちゃうんだよね。

本当にどうしようもないなあ、ボクは。

「先輩を……？」

実家に呼び出され、失意の体をひきずって本邸に顔を出してみれば。

お父様——桐生院家・現当主の第一声は、「あのトレーナーをどう思っている？」だった。

「今の彼に敵が多いことは承知しているが、あの才は惜しいと思わな  
いか」

父は相変わらず厳格で、なんでもかんでも理屈で推し量ろうとする人だが……私は、珍しく父に期待を持った。

「それは……もし、彼と交際することになったら、認めていただけると  
？」

「無論だとも。むしろ、こちらから支援したいくらいだ。恐らく今が  
最後のチャンスだろうから、直接呼ばせてもらったよ」

そう言つて、父は説明を始めた。

桐生院家には、葬と結婚を前提に交際するのであれば、という条件付きで、身内として彼を匿う用意があること。

数年がかりになるだろうが、マスコミへの火消しと世論操作を行い、その後は彼がトレセンに戻ることも可能なこと。

故にその間、彼を当家の顧問として招聘してはどうか、と。

「その、お父様。よろしいのでしょうか。彼はもうトレーナーを辞す  
上、家格的にも……その」

「何を言う。我々が求めているのは、彼の才覚であつて、肩書ではない  
ぞ」

嘘を言っているようには見えなかった。

「第一、彼はいわゆる突然変異。名門なればこそそれを取り込み、血の  
力を強固にするのも名門の務めの一つだ。これは情からの提案では

なく、利害の一致による、当主としての提案である」

その笑顔の下で、今度はどんなことを企んでいるのだろう。父はそういう人だ。

だが、失意にあった私には、お父様のスタンスが”希望”に見えた。つまり、私の初恋は終わっておらず、どこるか実家の後押しまで得られたと。

——そう見えて、しまったのだ。

「勿論、今は自由恋愛の時代だ。最終的な判断はお前と、彼に任せる。だが、母さんの受け売りになるが、”お見合い相手が初恋の人だった”というのは、中々ロマンチックなものじゃないかね？」

”才能を見込んで肩入れした名家”という評判が欲しくないとは言わんがね、と父は笑う。

「え、ええ、まあ」

関心のないような態度を見せているが……白状しよう。私はそういうのに弱い。

「彼が出て行く直前がチャンスだ。お前も、成否にかかわらず、想いは伝えておいた方があとくされがないと思うぞ」

これはおまえより長生きしている者としてのアドバイスだ、と笑う父を、私は深く考えずに信じてしまったのだ。

都合のいい、”先輩と結婚できるかも”という餌につられて。

## #7 異次元の逃亡者（前編）

「伊○園のニンジンジュース、好きだったろ」

背後から、トレーナーの声がする。

それだけで、足の震えが止まった。

ああ、駄目だ。ここが分かってくれて嬉しいと思っちゃって構ってもらいたくて病院を抜け出したんじゃないのに。

「ここ、眺めいいもんな！ スズカなら来てると思っただ！ でもなあ、ここは夕焼けの方がいいじゃんか、前連れてきた時は時間計算して、ちやうど綺麗に見えるタイミングに合わせてたんだぜ？」

知っている。トレーナーさんは、意外とそういう所に気が回る人だ。

だから、思い出の場所になった。トレーナーさんとはじめてお出かけた時の最後に見せてくれたこの景色が、わたしにとって唯一、ターフ以外で大好きな場所。

「まあ折角来たんだし、とりあえずおやつでも食いながら日暮れを待たないか？ 前使ったベンチも近くにあるしな」

がさ、という音。多分、コンビニの袋か何かだ。

答えられないし、振り向くこともしない。トレーナーさんに、今更どの面下げて会えばいいと言うのか。

それでも、心の中で問いかけずにはいられない。

……どうして、普通に声をかけられるんですか。

わたし今、崖際ギリギリに立ってるんですよ。

——ただ、速く走ればそれでいい、と思っていた。

走るのは楽しいけれど。わたしは、”サイレンススズカ”は、レー

スがしたい、というよりは……ただ、思いっきり走りたかった。それには、レースに出るのが一番効率が良かったというだけ。ただ、スピードの向こう側へ。

『つまり、速く走りたいってだけ？』

『……はい』

アンタレスへの移籍話が来た時は、何の冗談かと思った。

一度、戦術とか何も考えずに2000mくらい走って見せてくれ、というオーダーにも驚いた。

周りの評判から、あそこはもつと貪欲な……絶対の勝利が義務付けられているチームだと思っていたから。

そして、大逃げとラストスパートで並走したウマ娘を圧倒したわたしは、アンタレスのトレーナーさんから正式なスカウトを受けた。その走り突き詰めれば、君は少なくとも世代最速くらいにはなれると。

だから、トレーナーさんに直接、わたしの望みを伝えた。

ただ、速さだけが欲しいと。

リギルの時は、「勝つ方法」を教えられていたが。わたしが欲しいのはそういうのじゃなかった。

『……マルゼンスキーとミホノブルボンのあいの子って感じか』

『えっ？』

返ってきたのは、予想外の言葉。

『あーいや、君の先輩にも、割と似たようなのがいたってことだ。つまりウチに向いてる……つてことじゃないか？』

今ならわかる。好きこそものの上手なれを地で行っていたマルゼン先輩と、目標のために全てを注ぎ込むブルボン先輩。

好きなことを、走りを極めることだけが生きがいなのわたしは……確かに、そのあいの子だ。

『最初に、ウチの方針を教える。たった一つだ』

——走りたいように走れ。

それを聞いた時。わたしには何か、直感があった。

きつとここなら、スピードの向こう側が見られる。

同室のスペちゃんには「運命つてやつですね!!」と囁し立てられたけれど、この時はピンと来ていなかった。

ウマ娘は本能的に、速く走りたがる。

わたしほどそれが強く出ている子は珍しい、とトレーナーさんは笑っていたけど、皆多かれ少なかれ、走りたい気持ちを持っている。「走るために生まれてきた」という言い草は、決して嘘ではないのだ。

だからこそウマ娘達は、「速さ」を与えてくれる——つまり、自分を鍛えて速くしてくれる自分のトレーナーを、つい好きになっってしまうものなのだ。

これは理屈であると同時に「だから仕方ない」という言い訳でもあると、赤い顔をした会長が教えてくれた。実際、男性トレーナーは大抵、(元)教え子と結婚するものだ。世間はトレーナーが手を出していると思っっているが、実は逆らしい。

……何が言いたいかというと。

速さを求める本能が並外れて強かったわたしは、それを与えてくれるトレーナーさんのことも……まあ、その、そういうことだ。

わたしがチームに加入した時、トレーナーさんは「君をアンタレスというチームの集大成にする」と言った。

詳しい理論はよく理解できなかつたけれど、これまで担当してきた6人分の研究データを「因子」という形に抽出して、わたしにフィードバックする? ということだった。えらく難しい言い方だったけれど、多分そういう概要だった……はずだ。

まだ粗削りの理論で、わたしが初の被験者だと興奮気味に言うタキオんさんはちよつと怖かつたけれど……

『もつと速くなれますか?』

『なれる。そのためだけの調整を施した。スピードだけを狙って抽出できるはずだ』

そう答えてくれたトレーナーさんを信じることにした。

それからわたしは、みるみるうちに速くなった。

トレーニングはリギルに居た時より厳しくなったが、それ以上に楽しかった。一日ごとに、明らかに足が速くなるのが自覚できたから。

とにかく、速く走りたい。

ターフの一番前を、誰もいない、何の足跡もついていないそこを思うままに駆け回りたい。それが叶い続けて、わたしはこれ以上なく充実していた。

スピードに取りつかれている、という周りの評判は、多分正しい。本能的に速さを求めるウマ娘をしてそう言わしめるのだ。きっとわたしのは……異常、なんだと思う。

『気にすんな。スズカがどうしたいかだろ』

……同期たちに引かれる中で一人だけ、いつもの調子でサポートしてくれるのが嬉しくて、走ることに1色だった私の頭の中に、トレーナーさんに関することが半分くらい混ざるようになった。

先輩方も、走ることが楽しすぎて人付き合いをおろそかにしてきたわたしによくしてくれた。……タキオンさんやゴルシさんを筆頭にわたし以上に濃い人もいて、トレーナーさんが『ウチに向いている』と言った意味が分かった気がした。

会長と行った謎のTシャツ屋でやたらオススメされて買ったという「I♡三日月」Tシャツを着ないでくれと説得したり、タキオンさんと二人して不摂生な生活をしようとするのを止めたり、何かと理由を付けてトレーニングを見に来てはトレーナーさんと喋ってばかりいる理事長をそれとなく妨害したり。

……どうやら、わたしと同じ想いを秘めている人が大半だったみたいで、ライバルの多さに少し大変だなと思ったのも事実だけれど。

思い出が増えれば、見える景色も増えていく。

その中に、今はトレーナーさんの姿もある。

……いいえ、今は、トレーナーさんの姿が、いちばん鮮明に映っている。

私の目指した『スピードの向こう側』。

そこにたどり着いた時、きつとその先にトレーナーさんが待っていてくれて、わたしと一緒に喜んでくれる。

——そう、思っていた。

GIレースにも勝ち続けた。速度に自分の体すら追いつかない、破

滅的な速度とさえ言われた。脚への負荷を最小限にするため調整期間は長めになったが、出たレースでは何者も寄せ付けなかった。

いや、1人だけ食らい付いて来るウマ娘がいた。無表情でおとなしい、綺麗な白毛の子だった。

走り終え、私の意識がゾーンから戻ってくると、だいたい着順表示で私のすぐ下にいた。いつも3着と5、6バ身は離して……そして、わたしとはもっと離れていたの、特に対戦相手として意識したことはない。

ただ、走りを終えた時はいつも死んでしまいそうなくらい疲れ果てていて、いつも悔し泣きしていたのが印象に残っていた。

何度か、走り終えた途端に崩れ落ち、少し不安になるような濁った呼吸音と一緒に、血の混じった痰を吐き出しているのも見た。勝った身で慰めるわけにもいかず、思えば何もしてあげられなかったけれど。

それに、そんなことより速さの追求の方が、自分を超えることの方がよっぽど楽しく、大事だった。

トレーナーさんとタキオンさんがメニューを考え、会長が時々走りを見せてくれて、ふらりと現れるマルゼンさんがアドバイスをくれる。最高の環境だった。

訓練もした。後押しもしてもらった。出来得る限りの強化を施したと言ってくれた。

「……………」

だからわたしは、あの領域に届いた。

秋の天皇賞当日、ある種の確信があった。

今日のコンディションなら、スピードの向こう側に行ける。

その日はトレーナーさんも、事実上のサブトレーナーのようになっていたタキオンさんも、なんとなくそわそわしていた。

きっと私のコンディションに何かを感じとっているんだ。そう思った。

これ以上ないと思った。速度の出しすぎによる脚への負荷などから、年末の有《font:ul40》馬《font》は回避してこ

れが引退レースになるのが内々で決まっていたから、まさに有終の美を飾れる、最高の結末だと。

あの日のことは、もう忘れられそうにない。

いつも通り、ただ思うままに走った。前に誰もいないターフを思いつきり、ただ自己ベストタイムとだけ戦った。

第三コーナーの前で、何か壁のようなものにぶつかった感触があった。

物理的なものじゃない。だが、何か押しとどめられているかのよううに、余力はあつたのにいくら力んでも加速しなくなった。

後で分かったことだが、押しとどめていたものの名は、「本能」だった。

あれ以上加速したら体が耐えられなくなると、体は分かっていたのだ。

速く走りたいという本能と体に危険が迫っているという本能が互角のせめぎ合いをして、だから判断はわたしの意志に委ねられた。

愚問だった。即決だった。この先こそが”向こう側”だと、わたしは確信していたから。

——— 那样的えば、昔国語の教科書か何かで読んだことがある。ロウで作った羽根で懸命に空を飛び、太陽を目指す男の話。

太陽に近づきすぎた彼は、その熱で翼を溶かされ、堕ちた。

コーナーの終わり、直線を控えてわたしは思いつきり踏み込んで——— その瞬間、自分の脚から出たはいけない音がした。

わたしは「スピードの向こう側」にたどり着いた。

そこは、ウマ娘という種族の限界の先だった。

そしてそこには、何もなかった。

わたしが勝手に期待していた嬉しさも、達成感も、すがすがしさも、もちろんトレーナーさんもなくて。

ただ、分不相応の領域に手を掛けた報いがあるだけだった。

その直後から、ほとんど記憶がない。痛みで意識を飛ばされていた

ようだ。「いざという時のために」と練習していた受け身が、無意識にでも使えていたお陰で、わたしは命を永らえてしまった。

病院で目を覚ましてからも、現実が受け止められなかった。

左足の感覚がない。1年で歩けるようになるかも、と言われたけれど、とてもそんな感じはしない。とりあえずくつついているだけの、肉の塊だ。

——でも、それだけならまだよかった。

きつと、それこそ1年くらいかけて、この脚が動くようになるころには何とか、折り合いをつけて先に進むことが出来たような気がする。

トレーナーさんに支えてもらいながら、なんとか。

けれど、そうはならなかった。

わたしが知らずに、のうのうと病院のベッドで寝ている間、トレーナーさんの身に何が起こっていたか。

それを知った時わたしは、わた、し、は——

## #8 異次元の逃亡者（後編）

あの事故からわたしは、ただ無為に日々を過ごした。何をすればいいのか分からなかった。

あれほど焦がれた「スピードの向こう側」は、届いてみればただの地獄だった。それを垣間見た代償に、わたしはもう二度と、ターフを走ることとはできない。

皆気を使っているのか、そこには触れなかったけれど、誰にでも分かる。歩けるようになるかどうかを気にしているのに、以前のように走るだなんてとてもじゃないが無理だろう。

……何より。

呆然とするわたしに、トレーナーさんは「治る」とか、「走る」という言葉を一切言わなかった。ただ、命が助かって良かった、脚が繋がっててよかったと言って……他のメンバーが帰ってからは、ひたすら謝っていた。

誤解されがちだが、トレーナーさんが自信たっぷりのように見られているのは、単にできると思っているから、そう言っているだけ。彼は嘘のつけない人だ。

だから態度で分かってしまった。

わたしはもう、一生走れるようにはならないんだと。

——けれど。トレーナーさんは悪くない。わたしは加減して勝つこともできた。

あの壁を超えずに、ほどほどの速度で走っているだけで、先頭のまま秋の天皇賞を制すことができた。そうしなかったのは、わたしの我儘でしかないのだから。

だからこれは、自業自得だ。トレーナーさんは、こんな大馬鹿の背中を押してくれたじゃないか。

走ることに人生を捧げてきたから、きつと走れなくなった時が死ぬ時だろうと、漠然と考えていた。その時はきつと、体が死なずにすんでも、心が死んでしまうだろうと。

きつと、トレーナーさん以外のところで走っていたら、走り足りない

いうちに脚を壊して……わたしは発狂していただろう。そうならず  
に済んだのは、トレーナーさんが思いつき後押ししてくれたから  
だ。

シニアの秋まで走り抜いて、求めた果てを見届けたわたしは、心  
どこかで満足していた。何と言うか……そう、燃え尽きたんだと思  
う。

だから、空っぽになった。そうなるだけで済んだ。

頭の中が走ること一色だったのが、トレーナーさんの事を半分くら  
い考えていたからだろう。いつの間にかわたしは、走ることが全てで  
はなくなっていたみたいだ。

悲しかったし、今も胸に穴が空いたような、酷い喪失感に苛まれて  
いる。

思いつきり走っていた頃の夢を見て、起きた時には顔がべしゃべ  
しゃになっていいることもある。

けれど、思ったほどではなかった。

ああ、そうだ。

わたしにはまだ、トレーナーさんがいる。

だから心までは、なんとか壊れなかったんだ。

そう思うと、ほんの少しだけ、世界に現実感が戻ってきた気がした。  
今のこの脚を受け止め……るのはまだ無理でも、きつといつか前に  
進めると思った。

トレーナーさんと一緒の景色が見られるなら、わたしは歩くような  
速さでも——

『聞いた？ アンタレスのトレーナー、辞めるらしいわよ』

——え。

『まあ、これだけ大ごとになったらねえ。ネットとか凄いでしょ？

炎上ってやつ？』

そんな。だって、ぼーっと聞いていたけれど、お見舞いに来た皆  
は、一言も……

『担当を潰すほどのスパルタ練習だの、ドーピング疑惑だの、凄いもの  
ねえ』

だって、トレーナーさんが居なくなったら、わたしは、これから……  
ひとりで……

『あんな映像流れちゃったらねえ……ネットの方だと、事故の時の生  
放送を録画してた人が何度も映像上げてるんでしょ?』  
事故。

じゃあ、トレーナーさんが叩かれているのは。

トレーナーさんが、辞めなきゃいけないようになったのは。

トレーナーさんを――

『うえー! きつつう!! あんなグロい的一般人に見せちゃダメで  
しょー』

――わたしが、つぶした?

「あ、そうだ。今日の金ロー、前スズカが見たいって言ってた映画らし  
いぞ。帰ったら一緒に見ないか?」

平常心を保っているだろうか。

刺激してはいけない。デリケートな話題に触れてもいけない。

気にしていない風な日常会話から入って、何でもいい、後の予定を  
取り付ける。

「……………」

スズカは答えず、振り返らない。だが俺は、最初に声をかけた時、耳  
がこっちに向いたのを見ている。

俺の問いかけはまだ、無駄ではないはずだ。

「……………どうして、きたんですか」

時間にしたら、恐らく1分程度。

人生でも一番長いんじゃないかという1分が過ぎた後、スズカが絞  
り出すように喋り出した。

「聞きました。トレーナーさん、辞めるんですよね」

衝撃が走った。

今彼女がここに居る理由は……もう走れないことを知ってしまったから、だと思っていた。

「ス、ズカ。どこでそれを」

嘘はつけない。後でまた、こうなるだけだ。そしてその時、俺はもういない。

「わたしの病室、となりに看護師さんたちのさぼりスポットがあるんです」

それで、大体察した。ウマ娘は人間より耳がいい。どこが源流になったかは知らないが、昨日の今日でもう、一般レベルに情報が漏れ始めているらしい。

「だとしても、それはスズカのせいじゃ」

ない、と言おうとして、スズカが何かを言おうとしているのに気付いた。

「……んで」

ギプスが付いたままの左脚を庇いながら、スズカがついにこちらを向いた。

「なんで！ そんなこと言うんですかっ!!」

泣いている。

「わたしのせいじゃないですか!! わたしが無理に加速したから！

わたしが壊れたからっ!! わたしがトレーナーさんのキャリアを、仕事を奪ってしまった!!」

「違う！ それは」

「違うじゃないツ!! 何も、何も違わないの!!」

首を振って、普段のスズカからは考えられないような大声でまくし立てる。

「トレーナーさんは、絶対に無茶はさせなかった!! わたしの脚が持たないレースは、わたしがいくら走りたかって言っても全部避けてくれた!! わたしの脚が壊れたのは、トレーニングとか因子のせいじゃない! わたしのせいなの!!」

ほとんど悲鳴のような、所々で声が裏返った慟哭を、俺は黙って聞

いていた。

「これ以上わたしに優しくしないで!! 許さないで……もう、嫌なの……自分が……」

ひどい顔だ。頬もこけて、この遠目からでも隈があるのが分かる。「何も知らずに、自分だけベッドの上でのうのうとして。スピードの向こう側が見られて……もう走れなくなったけれど、この結果に満足してもいたわたしが、わたしは許せない」

やがて語気が静かになったスズカだが、そこに込められた憎悪は寧ろ悪化している。しかも、その対象は……

「……スズカ。脚がもうダメなの、知ってたんだな」

俺の返答が予想外だったのか、スズカは一瞬目をぱちくりさせてから、小さく頷いた。

スズカの脚は、完治の見込みは皆無と言われている。

医者 の 提示 したり ハビリ プラン が 理想的 に 推移 した 場合、 松葉杖 に 頼ら ずとも 片足 を ひき ずる ような 恰好 で 歩ける くらい になる。 それ ですら、 十分 奇跡 の 領域 に 踏み 込んだ 話 だと。

「なあスズカ。俺はさ。止めに来たんじゃないやなくて、聞きに来たんだ」

スズカの耳が、ぴくりと動いた。

「おまえが、もう走れないことに耐えられないって言うなら、俺はそれでもいいと思う。本気で考えて出した答えだろうから」

スズカが自分で選んだ道なら、俺は止めない気でいた。だが。

「でもそれが、自分のためじゃなく……スズカのいう通り、俺のことを考えてやってるんだとしたら。絶対にやめろ」

そんなものは、認めない。

「俺は、スズカを死なせるためにトレーナーを辞めるんじゃない。逆だ。スズカ達に責任が行かないように、俺が肩代わりするんだ」

スズカに、担当に、これ以上の絶望を見せるためにこうしたんじゃない。

そのはず、だったんだ。

「ごめんスズカ。俺が辞めることは、間違った行動だったかもしれない。でもスズカと同じように、俺も皆を想ったからこうしたんだ。

……もし、スズカが俺のことを考えてくれるなら。俺のこの行動を、無駄なものにはしないでくれ」

スズカは動かない。けれど、纏っている雰囲気、ほんの少しずつ和らいでいくのを感じる。

「……これはエゴだ。呪いをかけると承知で言う。それでも……俺は、スズカに生きていて欲しい」

「っ!!」

スズカが、キツとこちらを睨みつけた。それでいい。

「別に、何でもいいんだ。勉強して大学に行ってもいい。どこかに就職するのもいい。なんなら養ってくれる旦那さん見つけて、家でぐうたらしてもいい。……俺は価値観が古臭いからこの辺しか思い浮かばないけど……ともかく、そんな顔したまんま、死んで行つて欲しくないんだ」

とにかく、思いの丈をぶつけた。

……それから、何分経つただろう。

「ずるいです」

スズカは消え入るような声で、確かに生氣を取り戻した目で、そう言った。

「まあ、自覚はあるよ」

「もう」

呆れたように笑って、病院から盗んできたらしい松葉杖を使ってこちらに歩いて来る。後で謝りに行かないと。

「自分は居なくなっちゃうのに、人を引き留めるなんて……わるいひとです」

「ああ、そうだな」

目の前まで来た。

そつと、抱きしめる。

「でも、わたしもバ鹿だったので、お互い様です」

「そうか」

肩に顔を埋めたまま、スズカの独白は続いた。

「……トレーナーさんは、わたしと違って、死のうとしての訳じゃない

「んですよね」

「ああ、もちろん」

耳がピンと起きて、すぐ戻った。

「そうですか。……だったら、いいです」

「そうか？ 自分で言うのもなんだけど、今の俺、結構クスだぞ？」

俺の言葉に、スズカは

「わたしのやりたいこと。見つかった気がしたので」

ほんの少し、顔を赤らめてそう言った。まあ、お互いあれだけ恥ずかしいことを口走った手前、気持ちには分かる。

やりたいことか。どんなものか分からないが……

「全力で応援するよ」

「ふふ、覚悟してくださいね」

覚悟か。一体何をやる気だろうか。

まあ、何でもいいさ。俺は彼女に余計な苦勞をさせてしまった。償いという訳じゃないが、出来ることなら何でもしてやるつもりだ。さしあたり、傍にいてやるのができないのはかなり心苦しいが。

「じゃあ……とりあえず、トレセン戻るか。車付けてるぞ」

マルゼンの外車じゃなくて、遠征用の社用車だけだ。

「え？ にんじんジュースは……」

しまった、勢いで流せるかと思っただが。

「あー、あれな。すまん、出まかせなんだ」

「えっ」

「スズカが病院から居なくなっただって聞いて、そのまま直行して来たもんだから……流石にそこまで準備してる場合じゃなかった」

見ての通り袋はカラだ、とひっくり返して見せる俺を見て、スズカがぷっ、と噴き出した。

「ふふ……もう、折角かつこよかったのに」

「悪かったよ。飲みたかったんなら、これから買いにいこうぜ」

「はい、そうしましょう」

俺に寄り掛かったままふにやりと笑う彼女を見て、俺はなんとなく、問題が解決したかのような錯覚に陥っていた。

それに気づかされるのは、その日の夜のことだ。

## #9 選択

「わたしは、先輩が好きです」

視線の先の後輩が、ガチガチに緊張したままそう言い切った。

ことの始まりは、スズカを病院まで送つての帰りだ。関係各所に謝って回り、一段落したところでトレセンに戻ったところ、ちようどすれ違った桐生院に呼び止められた。

『先輩。あの、この後時間いいですか?』

始まりは、そんなありきたりな台詞だった。考えてみれば夕方である。ちようど仕事が終わった所だったんだろう。

辞めようとしてるのがバレたかな、と思った程度。

思えばこの時、俺は気が緩んでいたんだと思う。

連れて行かれた高そうな料亭で、妙にソワソワしている後輩を見たときから何か変だぞと思ひ始めたが、後の祭り。

いわゆる和洋折衷というやつなのか、金は持っていても17まで団地暮らししていた貧乏人には高級ということしかわからない料理の数々が運ばれてくる。テーブルマナーはなぜかゴルシに叩き込まれたことがあるので、まあ破綻はしていないだろう。多分。

さて、多分うまいのだろう高級料理の数々だが、雰囲気呑まれて味もよく分からない俺と、ガチガチに緊張して挙動不審の桐生院。有体に言ってもものすごく気まずい。

そんな中での告白である。正直、好かれているとは思っていないかった。何かと突っかかって来ていたし、彼女の実家は俺と違って超名門。かわいい後輩ではあっても、普通に住んでる世界が違うと思っていたのでそれ以上ではなかった。

本人が言うには、始めは対抗心だったものが、執着心を経て恋心になったのだと。

「だ、だから、その……先輩を、助けたいんです」

余計なお世話なのを承知で、実家に助けを求めた。

しばらくの間、実家に仕事と立場を用意してもらったので、匿うことができる。数年後、ほとぼりが冷めればトレセンに復帰することも

できる。

だが、対価として俺は、桐生院家に囲い込まれることになる。何度か言葉に詰まりながら懸命に語る桐生院の話を要約すると、そういうことらしい。

自分で思っているより、俺の経歴は名家から魅力的に映っているようだ。

彼女曰く、俺の育成技術もそうだが……一番は、俺の「目」らしい。世代で最も才能あるウマ娘を見抜く目を、彼女（というか、桐生院の面々）は「魔法の水晶玉」と評した。

褒められるのは、慣れてないが好きだ。必要とされるのも。

ただ……

「なあそれ……俺が言うのも変な話だけど、匿うってところだけ話して、俺そつちに引き入れてからなし崩しで結婚話持ってきた方がよかったんじゃないか？」

そうなのだ。

裏のあるうまい話を、裏含めて全部話してしまっている。この後輩がちよつと天然なのは今に始まった話じゃないが、その手の駆け引きが全くできない訳じゃなかったはずだ。

「はい。そのほうが、先輩は領いてくれる可能性は高かったかもしれない」

そして、それをあっさり認める後輩。

「じゃあ、なんで」

読めない。彼女は何がしたいんだ……？

「家が、あなたの才能に目を付けたのは本当です。けれど、私があなたを好きになったのも、本当です」

嘘をついている感じはしない。

「私、エスカレーターで大学まで出て、中学から全部女子校だったので……こういうことに、全然経験がないんです」

まあ、それは見ればわかる。彼女にはこう、俺たち庶民が持っている「穢れ」……は言い過ぎでも、そう、「雑味」みたいなものがない。

俺のように放つとかれて自然と育つたのではなく、完成形から逆算

して必要なものだけを詰め込まれて育っている。言ってみれば、育ち方に計画性があるのだ。

そのせいで、知っているところと知らないところの明暗がとてもはつきりする。意外と家事はできる割に、駅で切符の買い方を知らなかったり、マツクのハンバーガーをナイフとフォークで食おうとしたり。

恋愛事がまるでダメそうなのは……見合いで結婚する前提で育てた、ということだろう。おそらく最初から、誰かしらに宛がう前提で……今の今まで、それが俺だとは微塵も思わなかったから、ただの後輩として目をかけていた。

「でも、あなたを裏切るようなことはしたくありませんでした。だから、決めたんです。私が知っていること、家が言ってきたこと。そして……私が、あなたを慕っていること」

頬を赤らめて、続ける。

「私の全部を、あなたに伝えます。……じゃないと、フェアじゃない、と思うから」

「だが、それは」

実質、家を裏切ってるようなものじゃないのか。

「お父様は、最後の判断は私と、あなたに任せると言ってくれました。これが、私の判断です。好きだから、他ならぬあなたにズルをして一緒になったら、きっと後悔すると思ったので。……ふっ、桐生院家のモットーは、”鋼の意志”なんですよ?」

「ははっ。そりゃあ、また」

……本当に。この人は、不器用だなあ。

「明日。あなたの判断を教えてください」

そう締めくくって、俺たちは店を後にした。ちなみに恰好つけて奢ろうとしたが、実は事前に支払い済みだったらしく少しスベったことは秘密だ。

「……結婚か」

そういう終わりを、予想しなかった訳じゃない。

このまま桐生院に取り込まれ、後輩と一緒に過ごす。その選択は、

まったくナシとも、思えなかった。

理屈の面では。

「……でも、この取り込みはなんか、変だ」

この告白。桐生院には悪いが……はつきり言って、怪しいと思った。

いや、この不器用さ加減は確かに桐生院だし、本人がウソをついているという感じはしない。

ただなんというか……そう、タイミングが良すぎる。

俺が辞めると決意してから、理事長に話を持っていくまで。いや、そもそも事故から退職が決まるまで……そんな短い時間で、娘の将来を動かす話を進められるか？

「……わからん」

俺は、派閥だとか政治だとか、そういう世界から限りなく縁遠いところで生きてきた。頭はいいかもしれないが、それだけだ。

『あんたはできる子だから。これくらい当然よね』

俺が好成績をとると、母親はいつもそう言って、次の目標きたいを持ってきた。

目の前にある仕事をやらずにいられないのは、この頃ついた癖。

褒められても実感がわかないのは、「やって当然」だから。

『母さんには、金も、コネもないの。でも勉強は今からできる。だからいっぱい勉強していい大学に行って、いい仕事について親孝行するのよ』

『あんたは、母さんの最後に残った希望なんだから』

……母は、少なくとも俺が期待に込めている間だけは、異常なほど俺を可愛がった。

なんとなくそれに疲れた時期と反抗期が重なって、自分だけ楽しんで暮らしてやろうと考えだしたのが中二の時だ。

トレーナー試験に受かって高校を辞めて以来、親とは連絡を取っていない。母と同じく、高校を中退して働きだしたとだけ最後に言って、それきりだ。

父親は顔も知らない。親戚付き合いもロクにない。トレーナーを始めてから分かったことだが、身近にまともな社会人がいないというのは、子供の教育に尋常じゃない悪影響を与える。

なにせ、学校を出たある日から”まったく知らないもの”になれと言われるのだ。普通は無理だし、俺もそうだった。師匠にはずいぶん迷惑をかけたと思う。

独立してからも俺は「頭でっかち」の自覚があったから、なるべくそういうのには関わらないよう、裏方に徹してきた。

俺はちよつとウマ娘レースで一発当てただけの、貧乏育ちの一般人に過ぎない……と思っていた。

「桐生院が今になって来た理由……家柄で敬遠してたが、辞めると知ってなりふり構わなくなつたとか？」

思考の海に沈むが、答えは出ない。

目標に向かってトレーニングを組む能力と、人の動向を利益や欲望と結び付けて推量する能力は違う。

俺にそつちは向いてない。だが――

「あの時の、ゴルシの言動」

担当を信じることはできる。

あの時は、まじめに考察する元気がなかったが。あんな状況のゴルシが、ただ意味のないことを喋りまくるとは考えられない。

バミューダトライアングルでは、船や飛行機が消えると言われる。

黄金の不沈艦は物理的に消えてはいないが、つまり、隠れて行動している。

訴状が来た。恐らく、戦いを挑まれた、あるいは攻撃を受けた。

読めなかったから、紙飛行機にしてマックイーンに投げた。自分では対処できず、マックイーン……いや、メジロ家の力を借りた。

風に乗って目ん玉直撃。勢い付かれて、手痛い反撃を食らつた……つてところか。

「――ありがとう、ゴルシ」

証拠はない。ただの深読みかもしれない。本当はゴルシは何も対処しておらず、ただ警告をしただけかもしれない。

だが俺は、ゴルシの頭脳を知っている。

そして、俺が理解できない暗号も、誤解するような暗号も使わないと知っている。

だから俺は、あの時の「バミューダトライアングルの裏側」の存在が、桐生院家じゃないかと疑念を持つことができる。

……桐生院には悪いが、俺は後輩より、担当ウマ娘を信じる。どちらが信じられないとかじゃない。外から見たら理解できないかもしれない。それでも、これが俺の判断だ。

「だから……すまん、桐生院」

俺は、その誘いに乗れないよ。

---

すっかり夜になった道を、職員寮に向かって歩く。

最後の仕事も終わった。あとは、荷物をまとめて引き上げるだけだ。

その道中も、俺は引き続き思考の渦の中にいた。

すべては推測だ。俺に今から全貌を調べ上げるすべはない。

だが、俺が思っていたより、話が大きくなっている感じがする。

いや、大きくなったんじゃない、初めから大きかったんだ。ただ俺に見えていなかっただけで。

「俺はひよつとして……とんでもなくデカい事を、ほっぽり出そうとしてるんじゃないか？」

仕事を放りだすことに、責任は感じていた。

担当の面倒を最後まで見てやれないこともだ。

しかし、それよりもっと、大きなものを俺は、見落として――

「……俺は、何がしたいんだ？」

その時ふと。

初めて、そう考えてみた。

思えば今の今まで、受け身で行動を決めてきた。

親から逃げてトレーナーになり、担当の望みに合わせて仕事をし、それで事故が起こったから、俺は身を引こうと考えた。

当初の目標は達成されるし、晴れて俺は、「やって当然」に追いかけられ続ける暮らしから解放される。

……だがそれは、「他人のために」という言い訳に隠れているだけで、根っこのところで自分の利益しか衡量していない。

なんだか俺は、この生き方は、ものすごく無責任なんじゃないか。

「……こんな土壇場で、気づくとはなあ」

流れは止まらないし、あの時辞めると決めたのは、間違いだ。が最善だったと確信している。そこに後悔はない。

でも。最後の最後まで、自分の意志で決めよう。

自分の意志で、この先どこに行くかを、誰と行くかを決めよう。

これは俺が始めた話なんだから、俺が、終わり方を決めないといけない。それが「責任を取る」ということだと、俺は思う。

「終わり方、か……」

いざ考えてみると難しい。

俺は結局、一番何がしたいのか。

そう考えた時、最初に思い浮かんだのは――

#10 GOOD END ⑦

「ごめん、桐生院」

「いいんです。ウソをつけて結ばれたって、きつと、不幸になるはずだからっ……」

翌朝。俺は桐生院に電話で、断りの連絡を入れた。返事を聞くのもそこそこに電話を切ったのは……後輩を泣かせた罪悪感から逃げようとした結果だ。電話口から聞こえてくる、嗚咽混じりの気丈な声に耐えられなかった。

卑怯だと罵ってくれていい。ゴルシの話を警告と受け取った俺は、何が待っているかも分からない桐生院の目の前には姿を晒せない。

ただでさえ俺は、今日付けで正式にトレーナーの身分を失う。考えたくもないが……桐生院が本気で動いていると仮定した場合、門を出た瞬間に拉致という危険性すら、今の俺は想定しなければならぬのだ。

トレーナーとしてそれなりには鍛えているつもりだが、元来俺の本領は首から上にしかない。テイオー相手に普通に押し倒されたのがいい例だ。ウマ娘を荒事に持ち出された時、俺が抵抗できるとは考えにくい。

「……これで全部か」

来た時と同じように、備え付けのもの以外が全てなくなった寮の自室を見渡す。

自分の荷物は、手元にある大きめのスーツケースだけ。来た時と同じだ。

家具や家電の類は安物ばかりだったから、下手に業者雇うより引越し先で買い直した方が安いと思って昨日のうちに処分した。

高い服も今着ているスーツくらいしか持っていないから、これも同様。ミーティングルームに置いていた備品や資料は全てタキオンに譲渡した。俺にはもう必要ない。

「確認。準備は整ったか？」

「……理事長」

俺が感慨に浸っていると、背後に聞きなれた、幼いながらもよく通る声。まさか、向こうから来てくれるとは思いもしなかった。

「問題ありません。すぐにでも出られます」

「忠告。これが最後になる、本当に、心残りはないのだな？」

心残り。そんなもの――

「山ほどありますよ。でも、これ以上は、大丈夫です」

俺の、トレーナーとしての終わり方は、もう決まった。

「了承。では、ついて来たまえ」

そう言つて歩き出す理事長について行く。

学園の地下に続く階段を降り、カードキーで数枚のドアを開けた先にあつたのは、先の見通せないほど長い地下道だった。

「坑道。元は下水道でな、万一の時に備え避難経路として改造していった」

長距離レース並の距離がある、と付け加える理事長。この方向にそれだけの距離を移動するとなると、行先は。

「駅の、真下」

「正解。相変わらず君の土地勘は素晴らしいな。向こうに話は通してあるから、そのままホームに入って構わん」

流石に、人の多い駅で何かする気はないだろう、ということか。態々ここまでするということは、いよいよ俺の危惧が現実味のある脅威と思えてきた。

「ありがとうございます。何から何まで」

「不要。これくらいしかできなかつたのだ。さあ、いきたまえよ  
いよいよだ。」

「……。そのまま、聞いてくれ」

覚悟を決め、一步を踏み出すと、背中から再び声がかかった。

入口に片足が入った状態のまま、足が止まる。

「……中央のトレーナーに名門出身者が多いのはな。」血筋の力“か”  
”地方での実績”が無ければ、面接での印象が悪くなるからだ”

知っている。今日日、給料の高い職種や大きな権力に関わる職種の  
免許は、その大半に何かしらの”忖度”がある。

「中央トレセンのそれは、名家だけで合格者の100%を埋められぬよう、先代が定員を調整していた。……そんな時、面接の減点込みで総合1位になった者が、君が現れた」

筆記の合格ラインは6割ほど、面接はD評価以下は足切りと言われている。それぞれではなく、合計点の上位者順で採用するシステムを取っている弊害か。

「目標。私は、血統に凝り固まったURAに新たな風を吹き込みたかった。君が……君こそが、それを体現できると思ったのだ」

俺はずつと、薄暗い地下道の先を見つめたままだ。理事長の顔は……見えないが、わかる。

「……桐生院の宗家だ」

ぼそり、呟かれた家名は予想通りのもので、同時に当たってほしくなかったものでもあり。

その言葉には、形容しがたいほどの呪詛が籠っていた。

「暗闘。メジロ家からリークがあつてな。私とシンボリ家はこれから彼らと一戦交える。……業界を二つに割つてのお家騒動。勝つても負けても、待っているのは客離れと、業界の衰退」

シンボリ。ルナまで動いたのか。

だが、それでも。俺は。

「それでも私は、このURAを見捨てられない。見捨てたくないのだ。故に」

理事長はそこで一度、言葉を区切ると――

「宣誓ッ!!」

帽子に隠した耳が示す『■■■■■■■■■■』のウマソウルを震わせるかのように、いつもの大声が戻ってきた。

「私は必ずッ!! このURAを存続させてみせる!! ただ生き残らせるのではない! 業界の膿を出し切り、より健全な、ウマ娘たちの輝ける舞台として生まれ変わらせてみせるッ!!」

だから――どうか。わた<sup>ウ</sup>ま<sup>マ</sup>娘<sup>娘</sup>たちを見限らないでくれ。

君の行くその先でも、わた<sup>ウ</sup>た<sup>R</sup>し<sup>A</sup>たちを見ていてくれ。

ところどころ裏返った声で、これ以上なく懸命に。理事長最後の演

説は、俺に確かな約束を取り付けた。

「……………恩人にそこまで言われたら、断れませんよ」

振り返らず、コンクリートの継ぎ目の先へと、一步進む。

そのまま、2歩、3歩。

「さようなら、やよいちゃん」

スーツケースの車輪の音が地下道に反響し、理事長がその後何を言ったかは聞こえなかった。

あの日。秋の天皇賞からの1年は、日本のウマ娘レース業界にとって激動の時代となった。

チーム・アンタレスのトレーナー、電撃引退。

本人不在の上、事後報告という異例の記者会見は、しかし同席した人物にばかり話題が集まることとなった。

チーム・アンタレス代表、シンボリドルフ。

中央トレセン学園理事長、秋川やよい。

同秘書、駿川たづな。

そしてなんと、メジロ家筆頭および、シンボリ家当主。

記者会見は荒れに荒れた。途中、記者の一人が凶ったように乱入し、報道規制の事実を暴露すると共に、その場でアンタレスを擁護する記事を発表。全体を通して、トレセン側のアンタレス擁護の姿勢を明確に打ち出したのである。

翌日発売された月刊トウインクル特別号は、過去類を見ない勢いで売れ——そこに記された熱と、アンタレスのトレーナーという個人と、それを慕うウマ娘たちの姿が、間違いなく世論を変えた。

さらにその後、この内容を民放のキツカリ半分だけが放映したことで、その不自然さが話題になった。

つまり、残りの半分には桐生院家の息が掛かっているのだ。

これがネットで陰謀論へと燃え上がり……アンタレスへの憎悪は、感情（擁護記事）と理性（陰謀論）の両面から操作され、そっくりそのまま裏返ったのである。

後に3ヶ月戦争と呼ばれる、メジローシンボリー秋川連合による桐生院家の解体と、それに伴う大規模抗争は、どういう力が働いたか警察沙汰にこそならなかったが……メジロ家側が悪行の証拠を提示するたび、世論は手のひらを返すようになびいて行った。

余談だが、現在も根強く、騒動で桐生院家に自殺者が出たとの情報が出回っている。だが少なくとも公式記録上では、この騒動と因果関係のある死は起こっていない。

”ウマ娘の名門とトレーナーの名門による対立”という、素人目に見ても業界が分裂しているのが分かる構図。それまでチーム・アンタレスを叩き続けてきたマスコミにとって、垂涎ものの次なる餌であった。

国内最大のレース事業の醜聞。その影響は、業界全体へと波及することになる。

嫌気が差してレースを去る者。失望し、「まともなレース」を求めて海外へ飛び立つ者。彼らの多くは、「常勝」アンタレスを倒すため鍛錬を続けていたトレセン上位陣だった。

「日本のレースは終わった」

そう言われるほどに人気の低迷したURAは、しかし今も細々と命脈を保っている。

シンボリルドルフと秋川理事長、そして存在の噂される正体不明のフィクサー。彼女等の尽力によって、URAはその権威と実力を辛うじて保っている。

また、俗に”宿題”と称される、アンタレスが残した十数個のレコードタイムを「全て塗り替える」と宣言した東条ハナの奮起などもあり、少しずつ、ほんの少しずつ、瓦礫と化したURAは今、復活の兆しを見せつつある。

「……凄いな、皆」

逃げた俺と違って。

——豪華ではないが、それなりに高級感のあるLDK（の、リビング部分）に置かれた、革のソファ。

そこに座る俺は、机に放りだされた数誌の新聞を読み比べながら、自嘲気味に唸っていた。

「また、難しい顔をしてますね」

ダイニングテーブルから、吐息混じりの色っぽい声がする。

うつすらと機械の駆動音を響かせながら隣にやってきた、栗毛のウマ娘。

サイレンススズカだ。

「悪い。ちよつと考え事をな」

見ていてくれ。あの日の約束は、まだ守っている。

彼女等の頑張りを見るたびに、さつさと逃げ出した自分の情けなさを恥じ入る所ではあるが……今更出来ることはもうない。これも一種の罰だろうと、甘んじて受け入れることにする。

「もう。しつかりしなきや、ですよ？」

あの時。

俺は何がしたいか、と自分に問いかけた時、頭に浮かんだのはスズカの事だった。

それが、「心配」や「罪悪感」から来る、いわば義務感ではなかったと、言い切ることは出来ないだろう。

けれど俺は、誰よりスズカが気がりだったのだ。

だから、所在地を気取られないよう細心の注意を払いながら、病院に手紙を送った。最初の一通に、「必ずまた様子を見に来る」という約束を添えて。

リハビリのこと。食事のこと。近況報告。最近始めたこと。様々な話題と、彼女を心配する文章を載せ、そして。

『明日、退院なんです。……もしよかったら。迎えに、来てください』スズカの直球なのかなんなのかよくわからない逆プロポーズを受けて、俺はそれに応じた。

『なあ。あの時言った……養ってくれる旦那さんってやつ。あれ、俺じゃ駄目か？』

なんのことはない。俺はとつくに、スズカに惹かれていたのだ。タキオンの歩行具はあくまで補助なので、リハビリ中に使うと寧ろそれなしでは歩けなくなる恐れがあったから、渡したのはこの時だ。今、スズカは以前話をした通り、色々なことにチャレンジしようとしている。

俺の始めた料理や土いじりを一緒にやったり、俺の後ろで見ていたテレビゲームに興味を示したり、そういう意味では、いい方向にスズカらしさが減っているのかもしれない。

「……あなたが、わたしのバ鹿なことを止める時に言ってくれたこと。覚えてますか？」

「大学か就職か、ってやつか」

はい、と短く肯定するスズカ。

「あのとき、養ってくれる旦那さん、つて言われて……一番に、あなたの顔が浮かんでたんです。だから、退院の時の言葉が、凄くうれしかった」

「なんだ、何ならもつとぐうたらしてていいんだぞ」  
「もう」

スズカのムっとした声を、頭を撫でて誤魔化す。

「んっ……その手には乗りませんからね……はふ……」

ふにやりと表情を蕩けさせる彼女は、いつ見ても綺麗で、愛おしい。「はあ、ともかく、あの時のわたしは……まだ、あなたに尽くすことはできる。そう考えたから、踏みとどまったんです」

「……我ながら、危ない橋渡つたんだな」

正直、冷や汗ものである。

「ええ。わたしはとつくに、あなたなしじゃ生きていけなくなっちゃいました」

何の躊躇もなく、ただ当たり前前であることを確認するように、スズカはそう言った。

「だって、走りもない、学もない、家事もまだまだおぼつかない、そんなわたしを、あんなに引き留めてくれたのは、欲しいと言ってくれたのは、変わらず接してくれたのは。わたしも含めて、あなただけなん

ですよ」

止めたが、スズカは結局トレセンを中退してしまった。本人曰く、自分なりの覚悟の証だそうだ。

俺のもと以外には、行くべきところなどないのだと。

「ふふ。捨てられないように精一杯尽くしますね、あなた」

甘えるように、こちらにしなだれ掛かってくるスズカを受け止めて、抱きしめる。

恐らく、常識的な関係ではない。爛れている。だが俺は……俺が作ったこの場所を、心地よいと感じている。

俺は立派なトレーナーにはなれず、逃げた。ルナたちの苦労は、想像するに余りある。

親孝行もしていない。今頃実家はどうなってるんだか。

俺は、自分の築き上げたキャリアと名声と、沢山の仲間を捨てた。

代わりに俺は、俺の望んだ”スズカと共に歩む未来”を、これから一生、何不自由なく見ることが出来るだろう。所有しているマンションの配当収入だけでも、俺達二人を養うには十分なのだから。

屍と、沢山の悲しみと、別離と、絶望の上に築いた、俺達二人だけのための自分勝手な幸福。それが俺には、何よりも尊いものに思えるのだ。

俺はやっぱリクスだけれど、それでもこれからの未来には、沢山の楽しみが待っている。

## #11 BITTER END

「だから——どうか。わたし<sup>ウ</sup>たち<sup>マ</sup>娘<sup>娘</sup>を見限らないでくれ。

君の行くその先でも、わたし<sup>ウ</sup>たち<sup>マ</sup>を見<sup>A</sup>ていてくれ……っ!!」

——ごめん、やよいちゃん。

俺には出来ないよ。

目覚まし時計のアラーム音が鳴る寸前に、目が覚めた。

止めてみると2分前である。悪くない体内時計だ。少し気分がいい。  
い。

それに……随分懐かしい夢を見ていた気がする。

「朝か」

店の仕込みがあるので、起きる時間は以前と大して変わらない。

というか、慣れてしまつて自然と5時には目覚めてしまう。一種の職業病……の後遺症、といった所か。

「今日はこれと、これと……」

手早く仕込みを済ませて行く。慣れたものだし、メニューも数種類のみ。その上昼時だけの趣味開店だ。大した手間じゃない。

「よし、こんなもんだな」

本日分、100食＋αを用意し終え、今度は店の準備。窓とテーブルを拭き、床を掃除していく。

——あれから、そろそろ1年になる。

あれつきりトレセン関係者との連絡を一切絶つた(番号が入っていたスマホ等を全て処分した)ので、業界の動向はほとんど分からない。辛うじて分かるのは、URAという組織そのものの屋台骨が揺らぎだしている、ということくらいか。

風の噂でも、今のURAが壮絶な内ゲバの最中にあることは理解できる。ワイドショーやら何やらで、延々と話題にされているからだ。誰がどの派閥かまでは分からないが、泥沼の総力戦の様相を呈している……と言われていたのが半年前だ。

——暗闘が高じて両陣営から死人が出ており、そのせいで止まれな

くなっているのではという噂話を聞いて、俺はそれ以上情報を集めるのをやめた。怖かったんだ、不意に担当の名前が出る可能性が。

当の俺はと言えば、あの日差し伸べられていた全ての手を振り切り、地元でもない岐阜の片田舎へと引っ込んだ。

所有しているマンシヨンの収入などにより、よほどのことがなければ中流上位レベルの生活をして資金が目減りしない。当初の計画通り手に入れた、これ以上頑張らなくてもいい生活だ。

人生賭けて手に入れたそれを、最初は全力で謳歌していた。

身バレを警戒して長時間留まれないのいいことに、1か月かけて世界旅行をしたり、ホテルを泊まり歩いて日本中の美味しい物を食べて回ったり。反対に1週間分くらいの食糧を買い込んで、部屋に籠って耐久ゲームしたり（100時間かけてゼノ○レイドDEを全クリした）。

そうやって3ヶ月が過ぎたころ……やりたいと思っていたことを粗方やり尽くしてしまったのだ。

思えばあの妙なやる気は、あらゆる責任から逃げ出したことに対する現実逃避だったのかもしれない。

とは言えそれも、3ヶ月もする頃には記憶から消え始めたということだろう。

そして残ったのは、ひたすらヒマを持て余す生活。

それはそれで悪くはなかったが、永遠にこれが続くのも精神衛生上よろしくない気がしたので、趣味を増やそうと色々試してみるうちに

——料理好きが高じて定食屋を開いてしまったのである。

接客はバイトで雇っている近所の子に任せているし、昔と違ってコンタクトをやめてメガネになったし、髪も短くなった。まあ、バレたらまたどこかに引っ越せばいいだろう。

——或いは。

バレることで退屈が打破されることを、彼女たちに見つけてもらえらることを、心のどこかでは望んでいるのかもしれない。だがそれは、俺に許されるべきことではない。自分から逃げ出しておいて、あの場所に戻りたいたいなどと。

そんな矛盾した心境が、俺にこんなことをさせているのか、なんて。我ながら随分女々しくなったものだ。

「よし」

物思いに浸りながらも、手はとまっていけない。子供の頃から叩きこまれた習慣は、そう簡単になくなったりしないということか。

「おはようございます」

「おう、今日も早いな」

バイトに来ている近所の大学生（人間の女性）がちょうど出勤してきた。背は高めだが同時にちよつと丸めな印象で、真中で分けた長めの髪が特徴の表情豊かな子だ。

本人曰く「昼時に授業を受けると絶対に寝るから」とそこをぼっかり空けて授業を組んだところ、そこにピツタリ埋まるバイト募集（うちの店）を見つけて運命とばかりに申し込んだそうだ。

「そうですかあ？ えへへ、店長……まかないください」

「そう来ると思った。ほれ」

「わはあく！ ありがとうございます!!」

こいつが早く来る時は、大体出勤時間前にメシを食うためだ。何なら休日にも、900円の時給と共に賄いを二食まで出してもいい（持ち帰り可）という条件で雇っている。どうせ今日も朝飯を食べ損ねたのだろう。

「相変わらず美味そうに食うなあ」

「ほうへふは？」

「食べながら喋るな、ああほらこぼれるこぼれる」

いつもの間の抜けた笑顔で、賄い（昨日残った天ぷらを片っ端からご飯の上のつけたかき揚げ丼もどき）を掻っ込むバイトちゃん。俺の店最大の常連客として美味そうに食うだけでなく、食い意地分はきっちり働くし性格もいい。中々逸材だ。

『客も増えたし、バイトもう一人くらい増やそうか？』

『えっ!? いいいやーわたし一人で十分ですよお!! ちゃんと回りますし！ 二人いれば十分ですよ！ ね、ね!』

という以前の会話により（賄いが独占できなくなると困るのだろう

か)、いまだに店は2人体制で回しているが……男一人のところに入って身の危険を感じないのだろうか？ まあ、見るからに食い気優先ということなのだろうが。

「じゃ、いつも通りホールとレジは頼んだぞ」

全部で15席ほどしかない小さな店だが、俺が厨房にかかりきりになる程度には客が入るため、彼女の協力が不可欠だ。

うちは11時から14時までしか開けてない典型的な趣味の店(しかも日曜定休)。メニューは3種類の定食と季節限定品だけ。500円、600円、700円、800円なので計算も楽(しかも現金のみ受け付け)。客の回転がとても速いのだ。

やろうと思えばフレンチのフルコースじみたものだって作れるが、俺自身が高級料理を1回食うより行きつけの店で1品増やして何回も通った方が満足度が高いタイプなので、店のメニューもコスパ特化。大衆食堂というやつだ。お陰で近所の学生やサラリーマンなどには大好評である。

そうこうしているうちに開店時間だ。店を開け、早めの昼休みに入ったらしい人がワッと押し寄せる。

「ああ、今日からキャンペーンあるから忘れるなよー」

「はーいー」

厨房から指示を飛ばすと、元気のいい返事が返ってくる。うんうん、この子が看板娘をやってくくれるお陰で、随分客が増えていると思う。今度ボーナスと称して焼肉にでも連れて行ってやるか。お洒落な所より喜びそうだし。

キャンペーンとはズバリ、開店から先着10名限定で特盛無料。さらなる大食い野郎を呼び出して客にしようという訳だ。

数日前からのぼりとチラシで広告は万全、見ればさっそく何人か客が入り始めている。

店も軌道にのった。やりがいもあるし、看板娘もいる。

このまま過去の記憶を風化させながら、店を経営してのんびりするのも悪くない。

そう、思い始めていた。

その時だった。

店に向かつて猛烈な勢いで走って来る、何かを見た。

最寄りの信号を経て、最終直線でさらに加速。

超前傾姿勢のトップスピードのまま俺の店の前に到着し……とんでもない膝のバネを見せつけながら、止まった。

「すまない。特盛無料と聞いて来たんだが、まだやっているだろうか」

「ごめんね、お客さんが12人目なんだあ」

「そんな……」

なんてこった。

全てを捨ててこんなところまで来ても、こんな仕事をして、URAが壊滅状態になってなお……俺は、あの頃から解放されないのか。

「お客さん、トレセンの子か？」

「ああ、そうだが」

思わず、時計を見る。11時3分、55秒。

11時のチャイムと同時に駆け付けたとして。

笠松のトレセンからここまで、およそ3キロを3分そこそこで……。

「ああ……そうか。そう、なんだな」

「あれ、店長？」

バイトちゃんが訝しむのも構わず、俺は驚愕に目を見開いていた。

過去は消えない。

きつと、俺だけが気づいている。俺だけが、過去の自分がどれだけの損失を齎したのか理解している。してしまった。

ヨレヨレのジャージと、ボロボロの運動靴に身を包んだ、無口な葦毛のウマ娘。

——この世代は、この子だ。

だが、どうやって引き出す。誰が引き出す。

URAも、トウインクルも、中央トレセンも。

全部、俺が潰して、だからここまで逃げて来たというのに。

## #12 BAD END

7時にセットされた目覚ましは鳴るより、1時間は早く目を覚ます。昔から体内時計の正確さには自信がある方だ。

隣で寝ている妻子を起こさないようにそつと寝室から抜け出し、髭を剃るついでに軽くシャワーを浴びる。

俺は朝食を食べないタイプだったが、バレると葵が煩いのできちんと作ることにする（コーンフレークも不許可だった）。本人は自分が作ると言っていたが、まあ趣味みたいなものだ。今日は和食が食べた気分なので、鮭でも焼くか。

アイランド型の無駄に豪華なキッチンで、手際よく調理を進めていく。流し台とコンロ以外の良く分からない機能の数々は未だに理解できていないので、俺にとっては普通のキッチンと変わらない。

紅鮭だけでは物足りないかと冷蔵庫から卵を取り出し、目玉焼きに。

家が変わってもぶつぶつと卵が焼ける音が食欲をそそるのは変わらない。あとはジップ○ツクに入れて冷凍している豆腐とえのきの味噌汁を雪平鍋に入れて温め、パックスの納豆と刻んだネギを冷蔵庫から出せば朝食の完成だ。

息子用のうどんの用意も済ませた（また同じのがいいとか言い出さないといいが）頃、目覚ましの音と共に寝室から人の気配。

「おはよう」

——俺が「行方不明」になってから、そろそろ3年。

俺が桐生院家に婿入り……つまり、葵と結婚してから、2年半になる。

今の俺の住所は、桐生院家本邸……ではなく、一族の所有する分譲マンションの一室だ。ここ数年のごたごたで一気に資産が目減りし、あの大邸宅は手放さざるを得なくなったらしい。

3年前。葵に告白された俺は、違和感を覚えながらもその提案に乗ることにした。

それは、匿ってくれるという申し出が有難かったのもあるが……誠

心誠意告白して来た葵を、邪険にできなかつたからというのもある。

「ごはんたべる」

「そうだな。一人で食べられるか？」

「うん」

「よし。じゃあ見てやる」

2歳にしては随分知恵づいている息子。俺と葵の子な訳だから、そりゃあどちら似だとしても頭が良いだろう。

……事前の契約通り桐生院家に匿われた俺は、本家の全面バックアップのもと、何故か葵と共に本邸の離れ（ワンルーム）に軟禁され、在宅で桐生院家の顧問業をすることになった。後はまあ、お察しの通りである。

それから数か月経つうちに、本家の人々の動きで臆気ながら状況が把握できてきた。

——俺はやはり、政治など何も知らない小童に過ぎなかつた。

彼らこそ、世間の風評を操作して俺を辞職に追い込んだ元凶だつた。

俺が、スズカが歯牙にもかけなかつたハッピーミークは……桐生院家のノウハウ全てを注ぎ込んだ最高傑作であつたようだ。

ジュニア級の頃は「白毛の勇者」とメディアがこぞつて持ち上げていたのを思い出す。スズカを、アンタレスを倒し得る最有力候補だと。

確かに彼女は強かつた。

世代では明らかに突出していた。スズカが居なければ彼女がレコードタイムを持っていたはずのレースがいくつもある。俺が覚えている限り、スズカを相手に「勝負」が出来ていたのは彼女だけだ。

だが、結果は結果。

彼女に与えられたのは、”スズカが怪我で居なくなつて初めて有  
《font:ul40》馬《font》記念に勝てた”という、敗北  
者の証だけだつた。

多分だが彼女は……例えばトウカイテイオーやミホノブルボンに  
なら、4割くらいの勝率を持てたんじゃなからうか。スズカは、あれ

は一種のイレギュラーだ。恐らく再現は不可能だろう。

だが、それは俺しか知らないことだ。今ここにあるのは、現代のレース界が投入可能な技術とリソースを全て注ぎ込んでも俺に勝てなかったという結果だけ。

それを受けて桐生院家は……つまり、敗北宣言を出したのだ。

俺がいる限り、URAはアンタレスの天下であり続けると。

そして名家は……否、URAは。これから必ず訪れる「アンタレスなら出来たぞ」に耐えられないと結論付けられたのだろう。

その時点で、URAの将来的な衰退は約束された。

何せスズカは、レコードを6つ持っている。出走したG1レースの数と同じだ。常に脚部不安状態だったので海外遠征はできなかったが、出走さえできれば凱旋門賞さえ余裕で勝てたのではと言われる別格の存在だった。

俺が死ぬまで現役を続けたとしても、スズカの出したレコードを更新できるかは怪しい……いや、多分無理だろう。

”あれ”以上になるといえるのは、そのまま種族の限界を超えるという意味だ。目指すのなら運動生理学ではなく遺伝子工学の領域になるだろう。1世代や2世代で何とかなる話ではない。「スピードの向こう側」というのは、そういう場所だ。

……俺はただ、彼女の望みに応えてより早く走れるようにと尽力したが。

スズカは、ウマ娘レースに「答え」を出してしまったのだろう。

天井が見えることは、底が知れるのと同じだ。

技術力が「限界」に到達した後待っているのは、緩やかで、しかし確かに逃れえぬ滅びだけ。

だから、それに気づいた彼らは、自分たちが没落するのを承知の上で俺を、業界ごと潰しにかかったようだ。

余人が気づかないように、問題を「ウマ娘という種族の限界」から「政治的内ゲバ」にすり替えた。

URAの人気は衰退する。だが、それは「困難だが、再生可能な」衰退の仕方だ。所詮は醜聞なのだから、十数年、あるいは数十年かけて

地道に信用を回復すればいい。既に彼らは、今代を「捨てる」覚悟を決めている。

そして俺と、俺が残したノウハウと、俺の血を引く桐生院の子供がいれば。

再生後のレース界で再び覇権を取るのには、確実に「桐生院」である。そんな予測に賭け、今の自分たちの全てを投げ捨ててこの計画を実行に移したのだ。

ふと、俺の作った食事を美味そうに食べる息子を見る。無邪気にごどんを嚙っている。汚い大人に、どれだけの運命を背負わされたかも知らずに。

——俺がそれに気づいた時、葵は臨月だった。向こうの勝ちだ。

こんなのは、「騙された」なんて言える程度のものじゃない。ただ、俺がバカだったというだけのことだ。恨まないとは言わないが、そう折り合いが付く程度には、俺は自罰的だった。

方々にこれを報告した時、理事長が、ゴルシが、ルナが、悲しそう顔で何かを言いかけたのは、そういうことだったのだろう。

息子が生まれた頃には、水面下で行われていた業界を真つ二つに割つての暗闘には決着が付いていた。恐らく痛み分け……というか、URAが衰退しすぎて争っている場合ではなくなった、という形で。

桐生院家は名門としての権威や地位を大きく失い、今や業界トップの名家からただの一般家庭になった。当主は騒動の責任を取って隠居。行われていた報道統制も即時解除され、最後に残った権力を全て使って事態の隠蔽工作が行われた。

桐生院だけではない。騒動に関わった名家の大半が、多かれ少なかれダメージを受け、家ごと没落した者もいる。

アンタレスなき今、レースのレベルは落ちた。

潰したただの政治工作で追い出したのという言い合いのせいでトレーナーとウマ娘の信頼関係にはヒビが入り、まともな活動拠点を探して海外に行った者も多々いる。

日本のレースは終わった。そういう風評も少なくない。

ウマ娘レース業界は、今や瓦礫の山である。

桐生院は「進化の袋小路」より、「焦土からの再興」を選んだのだ。その役目を、俺と葵と、まだ2歳の息子に全て押し付けて。とつくに賽は投げられた。振ったのは上の連中だが、振らせたのは俺だ。

ならば俺には。知らなかったとは言え桐生院家の策に乗った俺には、この瓦礫と化したウマ娘レース界を再興させる権利と義務がある。

「あ、あなた。どうかしましたか？」

葵がおおずと問いかけて来る。顔に出ていたらしい。

3年も経つのに、あなた呼びには慣れていないようだ。

「いや、ちよつとトレーニングを考えてた」

「家では切り替えるって言っていましたよね……？」

ジト目。

こういう反応が増えてきたのは俺の影響だろう。いい意味で、お嬢様らしくなくなってきた。

「すまんすまん。今度の休みにケーキでも焼いてやるから、勘弁してくれ」

「うっ……も、モノで釣ってもダメですからね！」

——この家庭は、彼らの謀略によって作り出された、歪な虚像だ。

だが、息子は可愛いし、葵は愛しい。

3年一緒に居て、子供までこさえて……愛情がないなどと、口が裂けても俺は言えない。

虚構の中にしかないのなら、それでもいい。この「幸せな家庭」を、俺は守り続けよう。

それが、「行動に責任を取る」ということだと思うから。

---

---

鍵付きの引き出しから出て来た、メモ用紙の束。日記のようなもの

と思われるが、全て殴り書きで何枚かはくしゃくしゃに丸めた形跡があり、所々判別不能箇所がある。

「どうしても、書かないと、吐き出さないと我慢できない。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

私は、バカで、無知で、政治なんて何も知らない、ただの小娘だったんです。

すべてを話したつもりだったんです。

先輩の未来を潰したのが、辞めさせたのが、全部お父様だったなんて知らなかったんです。

私がそれを知った時には、もうお腹にあの人の子供がいて。

どうしてあんなに子供を急かされたのか、初めて知ったんです。後戻りできなくするためだったんだって。

償わせて

どうやって？

罪悪感で狂いそうになるのを必死にこらえて、私は笑顔で毎日をごして

だってあの人はきつと知らないから。

知ったら、どうするのか

私を罵る？ 殴る？ ■■？ 殺す？

何でもいい、何でも受け入れる。だからもうゆるして。

おねがいもういやなの誰にも罰してもらえないのがこんなに辛いなんてしらなかったの死なせてももらえない私が死んだらあの子がいやいやいやいや

(ここから数十行に渡って判別不能)

こ<sup>た</sup>  
ろ<sup>す</sup>  
し<sup>け</sup>  
て<sup>て</sup>

#13 GOOD END ⑤

バミューダトライアングルの裏からの訴状。  
紙飛行機にしてマックイーンに投げた。

風に乗って、目玉に直撃した。

そうか。

そういうことなんだな。

証拠はない。ただの深読みかもしれない。本当はゴルシは何も対処しておらず、ただ警告をしただけかもしれない。

だが俺は、ゴルシの頭脳を知っている。

そして、俺が理解できない暗号も、誤解するような暗号も使わないと知っている。

だから俺は、あの時の「バミューダトライアングルの裏側」の存在が、桐生院家じゃないかと疑念を持つことができる。

……桐生院には悪いが、俺は後輩より、担当ウマ娘を信じる。どちらが信じられないとかじゃない。外から見たら理解できないかもしれない。それでも、これが俺の判断だ。

「だから……すまん、桐生院」

なんとなく……自分なりのけじめ、ということだろうか。  
そう口に出しながら、受話器を取り、10円玉を入れる。

番号は――

「……もしもし。ゴルシ、今ちよつといいか？」

ゴルシの言葉に思い至った時から、俺は咄嗟に連絡を取ろうと動き始めていた。携帯ではなく、最寄り駅前の電話ボックスから。

「お、トレーナーじゃーん！ いいぜ、どした？」

「今、縁談が来たんだ。バミューダの裏側から」

それを口に出した瞬間。電話越しで分かるほどに、ゴルシの纏う空気が変わった。

「今どこだ。自由に動けるか？ 周りに連中は？」

「ふ、府中駅前の電話ボックス。拘束はない、自由だ。周囲に人影もない」

あまりの剣幕に気圧されながらも、聞かれたことに端的に答えていく。

「迎えをよこす。その場から動くな」

あれほど真剣な、いつものギャグや遊びの一切が排されたゴルシを見るのは初めてだった。

こうなると流石の俺にも分かる。事態は俺が思っている以上に深刻で、そしてゴルシはそれに気づいていたのだ。

ゴルシのよこした迎え（なんとメジロマックイーンの爺やさんだった）が到着するまでの十数分の間で、俺は完全に認識を改めた。

結論から言えば、俺の危惧は……「ゴルシの発言は遠回しな警告で、今の自分は桐生院家の陰謀に巻き込まれている」という、ちよつと危ない人じみた想像は、ありがたくないことに当たっていた。

彼らの計画は、最後に俺を婿に迎えることで完成する。

そういう手筈で、計画の概要を掴んでいたゴルシですら俺から「縁談が来た」と言われた瞬間までそこは理解できていなかったらしい。そう。ゴルシは、秘密裏に桐生院家と戦っていたのだ。秋天の直後から動き出した彼らを察知して、報道規制や方々への圧力と戦い……遂に1人では対処しきれなくなってメジロ家を頼ったのだと、引き合わされたメジロ家の大奥様が教えてくれた。

ゴルシは……（本人が一切教えてくれないので）どういう家系図か知らないが、少なくともメジロ家とどこかで血が繋がっているようだ。

とは言え、表向きに無関係とされる程度の繋がりが。

では何故協力したのかと、思わず俺は問うた。

「驚きました。あなた、伝えていないのですか」

厳格でどこか超然としてさえいる彼女だが、この時だけは「孫を見守るお婆ちゃん」だった。

「……打算でやったみたいになるだろ」

顔を逸らしてボソボソと答えるゴルシ。このところらしくない姿ばかり見ている気がする。「ウマ娘たるものもつと積極的に……」と

いうお説教も含め、ここだけ切り取ったら親戚の集まりのようだった。

俺が辞めるの辞めないのと、自分一人の去就を気にしている間に、彼女はこんなにも話を大きくして……俺のために頑張っていたのだ。

それを見てなお「協力しません引退します」などとのたまうほど、俺もバカじゃない。

かくして俺は、ゴルシが裏で主導していた反抗作戦に、正式に加わることになったのだった。

――  
――

メジロ家の所有するトレーニング施設。

トレセン入学前の幼いウマ娘達がここで訓練を積み、巣立って行く。

「無理い〜！」

広い敷地に用意された芝のコースを、今日もメジロ家のウマ娘たちが走る。

「無理じゃない無理じゃない。ほれ、あと一周」

「ひーん!!」

それを監督するのは……俺だ。

ゴールドシップに連れられて、桐生院家への反攻作戦に加わってからおよそ1年。ようやく暗闘が一段落した俺は、世話になったメジロ家へ恩を返すべく、お抱えのトレーナーとして年少者を中心に指導している。

表向きの俺はアンタレスの解散当時から未だに「行方不明」。メジロ家の敷地から出るのは最小限という取り決めだ。まあ、桐生院家の残党処理も終われば、大手を振って外を歩けるようになるのだろうが、もう暫く「引きこもり教官」の暮らしが続きそうだ。

「よし、今日はハハもびー」

「あ、ありがとうございますごさいますたあ〜」

「はー、はーっ、ぜえ……」

彼女たちも、最初と比べると随分体力が付いた。

こうして早いうちからトレーニングさせて、トレセンに入ってからスタートダッシュのための土台作りをするのが俺の役目。もちろん、本格化が遅そうな子にはそれ用のメニューを組んで調整するのは欠かしていない。

個人的にはこういう規格化された教育はあまり好きじゃないんだが……まあ、雇い主の意向に文句を言っても始まらない。枠の中で出来ることをするのが、今の仕事だ。

まあ、彼女らに愛着が湧いていないかと言えば、当然湧いている。俺は何だかんだ、この仕事に向いていたのだろう。

「おーい、トレーナーー！ 深海行こうぜ!!」

物思いに浸っていると、突然現れたゴルシが背後から抱き着いて来る。俺の補佐という形で同じくメジロ家に雇われている彼女は、相変わらずの破天荒ぶりを維持したまま、サブトレーナーとしての職務を軽々こなしている。

173センチの俺と大して身長変わらない彼女は、その豊満な肉体を隠そうともせずべたべたとくっついて来るようになった。

「出られるようになったらなー」

こうしていると、「悪友」あるいは「共犯者」として接して来た彼女だが、やはり女性なのだど強制的に意識させられる。

「言質とつたかんなく！ 直ぐにでも深海艇ゴルシちゃん号に乗せてやっから覚悟しとけよ」

俺の葛藤を知ってか知らずか、その姿勢のまま会話を続行するゴルシ。

「た、楽しみにしてるよ」

背中に押し付けられた巨大質量を意識しないようにしつつ、手元のバインダーに意識を集中し直す。

トレセンと関わりなくなつて以来、世代を獲るような才能を見る機会はなくなつたが、流石に名門、俺が指導を任されている子たちも皆

中々の逸材だ。

俺が赴任してから基礎能力が劇的に強化されていると、アサ……大奥様からお褒めの言葉を頂いている。タキオンがないので昔ほど特定個人にフィットするトレーニングができる訳ではないが、それでも十分以上に貢献できているらしい。

「んくなあ、それもうちつとかかりそうか？」

背中でもぞもぞしていたゴルシが、不意に声をかけてきた。どうも今日は構って欲しいらしい。

「いや、別に今じゃなくてもいいか……」

手早く書類を片付けて、ゴルシの方に向き直る。

「あれから、一年か」

「ああ」

ゴルシ……というか、メジロ家と合流した俺の最初で最後の「表」での仕事は、記者会見だった。

タキオンの協力を取り付けた俺は、メジロ系の研究所にほとんど全ての研究データを提供。俺、アグネスタキオン、秋川理事長、シンボリルドルフの連名による会見を開き……因子継承に関する技術を日本中に公開した。

今まで育ててきたウマ娘達の育成データを「因子」という形で抽出し、次のウマ娘へとつなげていく。

後から分かったことだが……それは、桐生院家が秘匿して来た一子相伝の秘儀と、アプローチは違えど同じ結果を齎していた。ハッピーミークが芝ダート全距離対応という現実離れした多芸ぶりだったのは、つまりそういうことだ。

後天的な距離・バ場適性の強化。能力そのものの底上げ。俺とタキオンが臆気ながら形にしていた「プランC」は、凶らずも桐生院家が150年かけて築いてきたノウハウに追いついていたのである。

優位性の根幹をバラ撒かれた桐生院家は、潔いと言っていいくらの速度で瓦解。葵とハッピーミークは一般人に戻ったと聞いたが、それ以降は音信不通。

向こうからしたら俺は仇だ。こちらから接触することは、もうでき

ないだろう。……どうしても避けられないことだったとは言え、今も少し心が痛む。

……そうして離散した桐生院家の代わりに中堅く上位の、これまでアンタレスを倒すために鍛錬を積んでいた層が急成長を遂げた。

経験豊富なトレーナー達が次々に因子継承理論を導入していき、既に何人かはレースで結果を出しつつある。

それまで10何番人気だったものが一気に強くなり下剋上。そんな事態も頻発し、業界は誰が勝つのか分からない群雄割拠状態。それまで（自分で言うのもなんだが）俺のチーム一強体制だったこともあり、レース人気は急速に回復していった。

今や日本のウマ娘レースは戦国時代。既に騒動があったことすら忘れられ始めている。現金な話だが、要するに大多数の一般人にとつては、面白いものが見られるなら醜聞でも熱いレースでも何でもいいのである。

こうするために俺は、「日本中のトレーナーに因子継承理論を公開し、俺自身はメジロ家に仕えること」というメジロ家の要求した対価を飲んで、その力を借りたのだ。

世話になったURAに、これ以上の迷惑を掛けないために。そして俺のためにここまでしてくれたゴルシに報いるために。

「なあ。お前に1個だけ聞かなきゃならねーことがあるんだ」

ゴルシが、今までになくしおらしい。

「何だ？ 改まって」

「……………えっと、その」

言い淀む彼女は、ひよつとしたら初めて見たかもしれない。

「ゆっくりでいい。今更何言われたって怒りやしないよ」

「トレーナー…………」

迷惑じゃ、なかったか？

絞り出すように、彼女はそう言った。

「何が？」

思わず素で聞き返した。この雰囲気は、冷蔵庫に入れてたモンブランを勝手に食ったとかそんなレベルではなさそう。だとしたら、何

に對して？

「何って、だってお前、さっさと引退しようとしてたじゃねえか」

「ああ、まあそれは」

そうするしかない、勝手に思ってたただけだ。

そう言い切る前に、ゴルシの台詞が続いた。一度口に出したら流れが付いたのか、堰を切ったように言葉を続ける。

「ほらアタシ、何も聞かねえでお前をここに連れて来ちまったし、いやその前に勝手にゴルゴル商事なんか建てて」

それは、つまり不安の吐露だった。

「ひよっとしてアタシ、余計なことしたんじゃねえかなって、はは、何訳のわかんねえこと言ってるんだろ。ちよつと待てよ、すぐ元のゴルシちゃんに戻って——」

俺はバカだ。こいつが豪放磊落に見えて繊細で、雑に振舞っているように見えて実はものすごく気を使う上に、それを全く表に出さない女だと、俺は知っているはずだ。

この1年。忙殺されたが、ずっとゴルシと仕事をしてきたのだ。その間俺は、一度でも彼女に面と向かって礼を言ったか？

「……悪かったゴルシ。俺は、まともにお礼も言えてなかったな」  
「は」

「余計なものか。ゴルシがこれだけ頑張ってくれたから、俺に引退以外の選択肢が出来たんだ。お前の努力を無駄にしちゃいけないと思ったからやってこれたんだ。一人で逃げるってのがどれだけのものを無にするか、気づかせてくれたんだ」

自分でも何を言っているのか良く分からない。ともかく、思いの丈を喋るしかない。

「だから、ありがとう、ゴルシ。お前のお陰で、俺はまだトレーナーでいられてる」

そして、お前と一緒に居られてる。

少なくとも俺は、今のこの状況は「奇跡」だと思っている。

俺は辛うじて業界に残り、今もウマ娘を指導している。もう数年してほとぼりが冷めたら、他のアンタレスメンバーと連絡を取ることも

出来るだろう。

UR Aは健在。既に収入面では騒動以前を上回っているらしく、今も急速な成長の途上にある。

そして何より、ゴルシがどれだけのことをやってくれたか知ることも、感謝することも、こうして一緒にいることもできた。

「これからも一緒にバカやろうな、ゴルシ」

メジロ家の見えないフィクサーと、その一番の相棒。そのうち恋人になっても、家庭を築くことになっても、俺達はずっとそうあり続けるだろう。

「——っ、おう!!」

元気よく答えたゴルシの顔は涙にまみれていて、そして今までで一番美しかった。

## #14 GOOD END ②

中央トレセン学園は日本最高峰である。当然、その倍率は凄まじいものだ。

入ってくるウマ娘達は皆、地元で負け知らずの天才だったり、名門出身だったり、幼少の頃から厳しいトレーニングを積んできた者だったりする。そういう者達が必死に努力して、ようやく入学を許され――

――入学がスタートラインでしかなかったことに絶望するウマ娘は、例年多くいる。

入学しても、トレーナーが付かなければデビューできない。自分をアピールするため、選抜レースで良い成績を残してトレーナーにスカウトしてもらったり、チームの選抜試験を受けて合格を勝ち取ったりしなければならぬのだ。

練習中のケガや病気で引退を余儀なくされる者。厳しすぎるトレーニングから逃げ出す者。周囲とのレベルの違いに自信を無くす者。

トレーナーが付き、デビュー戦や未勝利戦で勝ち、オープン戦にも勝てるウマ娘は例年、せいぜい50人。名門エリート天才揃いの入学者の中で、40分の1。

彼女らは皆、入学前から輝かしい経歴をひっさげ、大それた夢を目標にかえられるだけの才能を努力で磨き上げ、未来の栄光を夢見て過酷なトレーニングに耐えるのだ。

――だが、マルゼンスキーは違った。

ただ楽しいから走っていただけ。ウマ娘が走る理由なんてそれでもいいとさえ思っていた。

後輩に、自分の活躍する姿がもつと見たいと言ってもらったから、ここに来た。彼女はそれだけだったから、トレーナー達のやる気と熱意は、寧ろ重荷だったのだ。

それでも彼女は、勝ち続けた。

『楽しく走る』を最優先したその戦歴は、時に無軌道とも言われる。縦

横無尽に重賞レースを食い荒らし、あまり向いていなかったはずの長距離、有《font:ul40》馬《font》記念にさえ勝つてみせた。

デビューから8戦合計61バ身差という常軌を逸した記録を打ち立て、G1を6勝。現役生活に1度の負けも残さなかった、文字通りの「怪物」。

シンボリルドルフすら達成できなかった「常勝ウマ娘」、それがマルゼンスキーだった。

故に彼女には、ライバルがない。

押しも押されもせぬダービーウマ娘であり、菊花賞バも有《font:ul40》馬《font》で破った彼女の前に、拮抗した実力の持ち主はついに現れなかった。

彼女の走りに魅せられて、それを追いかけた者は多くいる。サイレンスズカとも仲の良いスペシャルウィークや、リギルの一員としてキャリアを積んだグラスワンダーがそうだ。

だが彼女らとは年代が違い、めぐり合わせもあつて直接対決は実現しなかった。

マルゼンスキーの脚質は逃げ。それは駆け引きとしての逃げでなく、彼女のペースに追いつける者がいなかったから結果的に逃げ。

レースの彼女はいつだって先頭で、孤高で――

――孤独だった。

ただ一人、同じ視座に立ってくれる自分のトレーナーを除いて。

「……っ」

昔のことを思い出した。

これ以上なく楽しかったあの日々。

トレーナー君と二人三脚で練習を積む。時々トレーナー君に家事

を監督してもらって、お礼に手料理を振舞う。一人暮らしだとやる気が起こらなかつた家事も、トレーナー君のためと思えばいくらでも楽しくやれた。

休みになればトレーナー君とお出かけだ。流行りだというイタ飯と一緒に食べたり、助手席にトレーナー君を乗せ知らない土地までドライブに行ったり、紅茶キノコに不味いと文句を言ったり、暑い日には瓶のカルピスで乾杯したり。

トレーナーと。

トレーナーと。

トレーナーと。

所々に差し挟まれる後輩との記憶を除けば、マルゼンスキーの”楽しい思い出”は……そのすべてが、トレーナーとのものだ。

二人だけのあの空気が、マルゼンスキーは好きだった。

「ふふ、あはは……おつかしい」

自嘲気味に笑う。

「待つ」と決めたのは……いいや、何もできなかったのは自分だ。こんなことなら無理にいい女ぶっていないで、素直に気持ちをぶつけておけばよかつたのに。

初めのうちはそれなり以上にアピールしたつもりだったけれど、ある日シンボルドルフと引き合わされてから、出しやばることは控えるようになった。

彼には彼のやりたいことがある。私には、彼の一番だったという覆せないアドバンテージがある。そう自分を納得させて。

チームの後輩には、時々顔を出してアドバイスする程度にとどめた。嫉妬している所を見せたくなかつたから。

独りよがりな所はあっても決して鈍感ではないトレーナーのことだ。薄々でも、気づいていたに違いない。

(それくらい分かるわ。……トレーナー君のことは、私が一番知っているもの)

何を隠そう、アンタレスのトレーナーと一番付き合いが長いのはマルゼンスキーである。彼の最初の専属として、お互いのことは知り尽

くしているつもりだ。

今の飄々とした態度は経験を積むうちに作られたものだ。彼の本質はもつと生意気で、勝手な男。

(釣っておいて餌もくれないんだもの)

何年の付き合いだと思っっているのか。

何年、待ったと思っっているのか。

「ほんつと……困った人だわ」

彼女——マルゼンスキーは、朝からずっと愛車の横で立っている。憎らしいほどの秋晴れの中を、ずっと。

日課になったトレーニングもせず、気分じゃなかったので昼食を抜いた。自分でも情けないと思っっている。

数時間ではない。トレーナーと一緒にG1で暴れたあの時から、ずっと彼女は待っている。

彼女がタツちゃんと呼んでいる、真っ赤なランボルギーニ・カウンタック。二人乗りの助手席に座るべき待ち人は、まだ来ない。

(なーんて、ね)

薄々分かつているのだ。「まだ」ではないと。

トレーナーは、来ない。

「……っ、はあ」

「それ」を認識しようとするたび、胸が痛む。思わず顔をしかめて、それでも抑えきれずにため息が零れた。今日何度目だろうか。

気づいたら空が雲に覆われている。そう言えば、夕方からは雨だと天気予報で言っっていた。

いつもの場所。トレセン学園にいくつかある裏口のなかでも特に人通りの少ないここは、かつて担当がマルゼンスキーだけだった頃から、二人で出かける時に使っっていた待ち合わせ場所だった。

『タツちゃん、いつもの所に付けて待ってるわ』

お姉さんぶってこそいるが。自分とて、走ることと後輩の面倒を見ることしかしてこなかった一端の乙女。

あの場で言えたのは、結局あれだけだった。どうしてもトレーナーの方から言っただけだったのだ。

いや、今の関係が壊れるのが怖かったのかもしれない。どちらにせよ、彼女にできるのは、やはり待つことだけだ。

「っ!!」

ふと気配を感じ、思わず身体ごと振り返って視線をそちらに向ける。人より鋭敏な感覚を持つウマ娘だが、流石に車内からでは誰かまでは分からない。

視線の先に居たのは、ベテランの男性トレーナーだった。大方サボりだろう。

「はあ……」

タツちゃんの前フロントガラスに、ポツポツと水滴が落ち始める。雨が降ってきた。

それでも車内に入る気が起きず、立ったまま。門限が近い。

そろそろ、認めなければいけないのかもしれない。

—— マルゼンスキー 私 は、選ばれなかった。

「まあ、そうよね。分かった」

言い訳がましい自分の言葉は、強くなってきた雨がかき消してくれた。

このままタツちゃんに乗って、何処か知らない所へ行こう。

トレーナーのいないターフは、きつとつまらないだろうから。

耳をへたりと伏せ、俯いた顔でそう考えていた。

(……でも、あとちょっとだけ待ってみましょう)

待っている限り、彼が来てくれる可能性は、ゼロにならないから。

「ひよっとしたら」というか細かい可能性が残っているうちは……それがどれほど絶望的なものでも、自分を騙していられるから。

時間が経つごとに少しずつ、少しずつ、万力のような力で迫って来る現実から必死に目をそらして、「自分は待っているんだ」と無意識に心を慰めていた。

そうやって、「あとちょっと」を何回繰り返しただろう。

大雨の中、真つ暗で良く見えないどこかから、あるはずのない足音が聞こえた。

「——どう、して」

マルゼンスキーが負の思考の渦から浮上する。

雨の中でも伝わってくるほど急いだ足音。聞き間違いじゃない。都合のいい捏造でもない。

それはどンドン近づいてきて、マルゼンスキーが意を決して顔を上げた時——

目の前に、上半身をずぶ濡れにしたトレーナーがいた。

頭を真っ白にしたまま、目を見開いて、反射的に手を口元に当てる。

「悪い、マルゼン。遅くなった」

息を切らしている。走ってきたのだろう。それこそ傘もささぎずに。

マルゼンスキーは目を見開いて、トレーナーに抱き寄せられるままに、雨の中抱擁する。

「……本当に、もう。待たせすぎよ」

涙で震える声で、辛うじてそう言った。

「色々考えたけど、やっぱりお前以外は考えられなかった」

そこで一拍置いて。抱き合ったまま、トレーナーが意を決したように言葉を紡ぐ。

「好きだ、マルゼンスキー。……おれと、ついてきてくれないか」

「……はい。私で良ければ、喜んで」

抱き合うのを少し緩め、二人の影が改めて重なった。

「おかえりなさい♪」

俺が中部地方某所の片田舎に引っこんでから、そろそろ3年になる。

今は俺の所有しているマンションで、妻になったマルゼンスキーと……2歳になる娘と一緒に暮らしている。

「ああ、ただいま」

トレーナーを引退してから1年ほどあちこちを転々としていた俺達は（妻は婚前旅行も乙でいいわね、と言ってくれた）、ほとぼりが冷めてきたタイミングで入籍。

そのすぐ後に妻の妊娠が発覚し、腰を落ち着けることになった訳だ。

蓄えをマンションなどの不動産に変換していた俺は、その中の一棟に移住して、住み込みの管理人として働くことにしたのである。

「ふふ、ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、わ・た・し？」

別に、俺が働かなくても十分食べていけるだけの蓄えは用意してある。ただ、無職でいるのも体面的にどうかと思ったから申し訳程度に働いているというだけだ。

「まず飯かな」

妻は、すっかり腑抜けた俺に良くついてきてくれている。いやむしろ、何人も担当を抱えていた頃より随分楽しそうになった。

「んもう、イジワルなんだから」

あの頃は、誰かにトレーナー君が取られるんじゃないかと気が気じゃなかった。結婚してから、そんなことを聞かされた。

思えばあの頃の俺は、目の前の才能を次から次に鍛えることばかりで、鍛え終わったウマ娘のことはないがしろだったのかもしれない。

「次に風呂、最後にお前。それでどうだ」

どちらにせよ、もう終わったことだ。俺は彼女らの中からマルゼンスキーを選び、この暮らしを選び、U.R.A.を選ばないことを選んだ。

「……っ♡ ね、お風呂、久しぶりに一緒に入ってもいいかしら？」

気がかりはあるが、後悔はない。

トレーナーを辞めた時、マルゼンスキーの薦めでお揃いの携帯電話を買い、前のデータは引き継がなかった。

U.R.A.の事を調べようとすると彼女が辛そうな顔をするので、情報を集めるのも止めた。

きっと彼女なりに、オーバーワークになりがちな俺を気遣ってくれているのだろう。あるいは、今の暮らしに集中して欲しいという事かもしれない。

どちらにせよ、確かに未練たらたらでは娘にも示しが見つからないだろう。俺はもう、一家の大黒柱なのだ。

「もちろん。長風呂になりそうだけど、のぼせない程度に気を付けな  
いな」

どうせ彼女<sup>U R A</sup>を心配する権利は、逃げ出した俺にはない。

俺は、U R A から完全に脱落したのだ。

「……えっち♡」

それでも俺には愛する妻がいて、娘がいて、守るべき家庭がある。

俺は、今の幸せだけを守ろう。きっとそれでいいはずだ。

——ごめんね、私ってば結構重たかったみたい。

あなたが告白してくれて、私もう、駄目になっちゃった。

もう二度と、あの子たちに、あの場所に、あの業界に、あなたを送り出したくないの。

疲れて傷ついたあなたに、何もしてあげられなかったあの頃に戻りたくないの。

……あなたはもう、頑張らなくていいのよ。幸せになっ  
ていい。だから昔のことを思い出せなくなるまで、私に染めてあげるわ。  
代わりに私は、あなたに精一杯染まるから。

あなたが望むなら、私はどこにだってついて行く。何だってしてあげる。

してあげられるの。今の私なら。  
だからどうか、ずっとずっとよろしくね、私のトレーナー君♡

## #15 GOOD END ③

「モルモット君、23番のファイルを持って来てくれるかい？」

「そう来ると思ってもう用意していたぞ」

「ふうん、やるじゃないか」

アグネスタキオンの研究室。怪しげな製薬機器が並んでいるような印象を持たれるだろうが、実際には紙の資料や参考書、実験レポートの類の方が多くある。

来た時は広々としていたはずの研究室も、今では山と積み上がった資料やら何やらで辛うじて足の踏み場を確保するのが精いっぱいだ。

俺の主な役目は、ワークステーションにかじりついているタキオンの世話と、適切な資料を書架から引っ張り出すことと、後は実験等の補佐。要するに研究助手だ。

俺も浅学なりに勉強を続けているが、高等部以前から専門の研究を続けていたタキオンと、トレーナー資格のために浅く広い知識を付けていた俺ではどうしても知識量に差が出る。まだまだ研究の最先端に触れられるほどの能力は得られていない。

「次の学会、どれを提出するんだ？ 正直発表した論文が多すぎてしつちやかめつちやかだぞ」

「クククいいことじゃないか。ウマ娘のさらなる発展には、必要な混乱だよ」

視線をモニターに固定したまま、タキオンは不敵に笑っている。彼女なりに、あの業界への意趣返しも兼ねているのだろう。俺自身、次から次に新技術を叩き込まれて悲鳴を上げる業界を見て、胸がすくような気持ちなのは誤魔化せない。

「レースの平均速度が劇的に上がったのは否定しないが……」

「事故率は反比例するかのよう減少しているのだから？ ならいいじゃないか」

まあ、そういうことだ。

少なくともタキオンの齎す理論も、発見も、技術も、全ては、ウマ娘の健康を第一に考えてのもの。

”果て”を踏破するという彼女の夢は、まず”果て”に耐えられる身体づくりを、全員にいきわたらせるところからということになった。

いつだったか、師匠が言った通り。夢は形を変えていく。

「勿論全部で行くとも。粹取りは任せたまよ」

「また徹夜だなこりや……」

言いながら、それが苦ではない自分を自覚する。

我等が研究所のシニアフェロー様は、横暴だがそれに見合う以上の成果を齎してくれるのだ。

——あの日、トレーナー寮から出た俺の前に立っていたのは、黒服の集団を引き連れたタキオンだった。

『お話は伺っています、Mr. トレーナー。さあ、こちらへ』  
『え？』

達者な日本語で語りかけるMIBじみた白人男性に連れられ、有無を言わず車に乗せられ、気づいた時には飛行機の中。

約13時間の長旅を経て、送迎の車に乗り換えさらに暫く。

『……アメリカへようこそ、トレーナー君』  
『え？』

到着後、タキオンの第一声がこれだ。聞けば単身アメリカの研究機関に売り込みをかけ、自分ごとこちらに引き抜かせるよう交渉したとのこと。米国に繋ぎを取れるタキオンの行動力も相当なら、二つ返事でOKして即刻人を送って来る研究機関も大概だ。

住所どころか偽の戸籍まで用立ててくれるという準備の良さにうすら寒いものを感じたが……どうやらタキオンの研究と俺の実績は、太平洋の向こう側でも通用するどころか、こんな亡命じみたことを許してしまうほどのものだったそうだ。

その場で聞いた話だが、俺をここまで連れて来るためだけに、タキオンは米国のウマ娘協会に因子継承理論の雛型を売り渡したらしい。文字通り、自分のキャリアを全て賭けての「身売り」だ。

『タキオン女史の理論もそうだが……あなたはそれを、サイレンスス

ズカという形で結実させた。我々のようなプラグマティストと呼ばれる人種は、実現可能な夢をこそ尊ぶ』

『実現可能な夢っていうのは、俺も共感します。出来ないことをうだうだ言ってる間に、出来ることを積み上げる方が有意義だ』

そこで口を挟んだのは、単なる気まぐれみたいなものだ。

『分かって頂けますか！　これが中々日本人には通用しない概念で』  
『……でしよっね』

ただ、スズカのことを”最新の研究成果”として扱う態度に腹が立って、カツコつけて反論しようとして……その評が、これ以上なく当てはまっていることに気づいて拳を下ろしたというだけ。

ウマ娘の意思を最優先。俺の理念はそうだったかもしれないが、そこに「集大成」を求める俺のエゴが混ざっていないとは言えない。一面では、彼女は確かに研究成果だった。

そういう意味では、タキオンの連れてきたこの場所は、俺に合っていたのかもしれないな。

俺とタキオンをここまで護送したサングラスのナイスガイ（所属を明かしてはくれなかったが、相当高位の……下手したら政府の作業員じゃなからうか）に聞いたところ、これまで他国からの引き抜き工作は、全てトレセン側がブロックしていたらしい。

内側（生徒側）から売り込みをかける例は流石に初めてだったらしく、トレセン側がマスコミへの対応に忙殺される隙を突いてまんまと俺を引き抜いてしまったという訳だ。

俺の意志が全く介在しない所で、俺はすっかりアメリカの研究所で助手の仕事をするのが内定していた。

『……さて。突拍子もない行動をとってきた自覚はあるが、ここまでの大ごとは人生……ウマ生でも初めてだ。正直、今にも手が震え出しそうだよ』

その日の晩。俺はここで初めて、何故だか同室にされたタキオンを問い詰めた。

と言っても、怒りはなかった。

……女々しい話だと自分でも思うが、この時の追い込まれた俺に

とって、タキオンの強引な行動には悪い気がしなかった。むしろ、俺が心のどこかでやりたがっていたことを、代わりにやってくれたような気さえしていた。

『いかなる言い訳も意味を成さないだろう。これは……言ってしまったら、無理心中だ』

一方でタキオンは、こちらを真つすぐ見つめて、そう宣言した。

ああ、あの目だ。ただ、自分の見据えたものを手に入れるため。それだけのために全てを捨てて進む、あの狂った目。

長い付き合いだ、俺には分かる。タキオンは悪びれていない訳ではない。ただ、罪悪感も倫理観も道徳も全て、目的のために黙殺できるというだけだ。

『言っただろう。私は強引だからな、無理矢理にでも付いてきてもらうぞ、と』

——私には、君が必要なんだ。

『私は意思を示したぞ。君はどうなんだ』

何もかもをぶち壊して、自分のやりたいことを求めて突っ走る。

色々なしがらみに雁字搦めにされていた俺にとって、それは確かに、救いだつた。

あれから数年経つ。タキオンと二人での研究所暮らしにも、すっかり慣れてきた。相変わらず生活力の無いタキオンだが、昔と比べると少しずつ家庭にも気をつかうようになって……気がする。

”アグネスタキオン”も、そのトレーナーだった”俺”も、既に公式には存在しない。表向きは、あの日からずっと行方不明のまま。彼女の正体を知り、彼女をタキオンと呼ぶのは、最早俺だけだ。

あるのは、アメリカのとあるスポーツ医学研究機関。数年前に新設された研究チームの功績として、タキオンの成果はロンドンリングされている。

俺もタキオンも英語は話せるし、タキオンの齎す成果があるから給料の心配もない。

ただ、俺達は二度と、表社会に出ることはない。そういう契約だ。「なあ、モルモット君」

あれから、俺は再びモルモットと呼ばれるようになった。今では俺で試さなくとも、合法違法を問わず実験台には事欠かないので、タキオンなりの特別な呼び方と言うくらいの意味しかなさそうだが。

「何だ？」

研究所に泊まり込んで、タキオンと一緒に研究をして、タキオンと同じ夢を見る。これが今の俺の仕事で、生きがいで、全てになった。彼女は相変わらず、ウマ娘の”果て”を、あるいはその先を見ようと研究に勤しんでいる。その過程で得られた発見によって、ウマ娘レース業界は飛躍的な進歩を遂げた。

アメリカで新技術が導入され、それまでのレコードが過去のものになり、それが国際基準となって、ジャパンカップなどを通して日本にももたらされる。そんな流れが常態化して、今やアメリカは世界のウマ娘レースを牽引する技術大国だ。

サイレンススズカが打ち立てた6つのレコードも、「完全踏破」を掲げた元師匠——東条ハナの手によって肉薄されつつあり、塗り替えられるのも時間の問題だと聞いている。

あの後日本のトレセンがどうなったか、俺は知らない。逃げ出して、姿を眩ませた手前、もう戻ることも、謝ることも、永久に出来ないだろう。

「君は、後悔しているかい？」

時折、タキオンはそんなことを聞いてくる。

この時だけは、彼女の、あの輝く狂気の瞳が揺らぐ。ひたすら進み続ける彼女に、一点の迷いが生じる。

俺にタキオンしか残らなかつたように、タキオンには俺しか残って

いないのだろう。だからきつと、俺が居なくなってしまうのを、彼女なりに恐れているんだ。自惚れかもしれないが、そうだと嬉しい。

「そんな訳ないだろ」

だから俺は、いつもの答えを返す。もう慣れたものだ。

「俺はタキオンのもので、タキオンは俺のものだ。今じゃ、俺達の正体を知ってるのはもう、お互いだけなんだから」

一蓮托生、運命共同体、共犯者。

だからタキオンは、迷っちゃいけない。

「俺は、タキオンといられて幸せだよ」

あの日決まったんだ。

タキオンの目指すところにしか、俺の行くべき場所はないのだから。

「……その目。つくづく私達は、似た者同士だよ」

タキオンは俺の目を見つめると、ほう、と息を吐いて顔をそむけた。その頬は上気していて、しかし不安そのものは取り切れていないように見える。今日は寝かせてもらえなさそうだ。

俺とタキオンはその後もずっと、「果ての先」を目指すための研究を続けた。

その過程でもたらされた数々の発見により、ウマ娘レースは驚異的なペースで発展を遂げ、後にアメリカウマ娘レース界は長い長い黄金時代を迎える。

それが”Age of Tachyon”——日本語では「超光速時代」と称されたのは、タキオンの尽力なしには語るができない。

今も俺たちは、遠くアメリカで研究を続けている。

今はダメでも、いつか。

俺達がダメでも、誰か。

あの日見た「スピードの向こう側」を超えられると信じて。

URAから逃げ出した今でも、俺達は夢を見続けている。

遠くでカーテンが開く音がする。どうやら朝が来たようだ。

のそのそと起き上がり部屋の電気を点けると、シーリングライトの白色光が寝室を照らす。

相変わらず殺風景な、そして住み慣れたフローリングの5畳。部屋にあるのは大きな目のベッドと着替えの入ったタンスに本棚1つ、エアコン。窓はない。広めのサービスルームというやつだ。

枕元に置かれた時計が、午前7時を示している。日付はわからないし、もはや知る気もない。

ベッドに腰掛けて何をするでもなくぼーっとしていると、隣の部屋に気配を感じた。

最初の頃は一日中しがみつく勢いだった(本当に24時間以上肌が離れなかったことも何度かある)彼女も、最近では俺が寝ている間に隣の部屋へ行ける……手どころか目を離せるくらいになったらしい。きつと大きな進歩だ。

「おはよ、トレーナー」

開いたドアの先には、昔より成長した気がするトウカイテイオー。吸い込まれそうな青い瞳が、こちらを捉える。そこに光はなく、目の奥にどこまでも深淵が続いているようにさえ見えた。

あそこに、「俺」は映っているのだろうか。

「おはよう」

俺は最近、口数が減った。

外の事を話題に出せば表情が曇り、レースのことを話題に出せば表情を失くし、未来の事を話せば口をつぐむ。

テイオーがどんどん悪い方に解釈して、不安定になってしまうのだ。自然と、迂闊な発言が減っていった。

「えっと、今日も一日することないから、く、くつついても……いい、かな? へへ……」

「もちろん。ほら、おいで」

「う、うん」

控え目なおねだりに、一も二もなく即答する。まさか洩る訳にはいかない。少なくとも今、俺の生殺与奪権は全てテイオーにあるし、そうでなくとも……あんなテイオーを見たくはない。

あれから何ヶ月……いや、ひよつとしたら何年かも知れない。テイオーは、前にも増して、極端なほど甘えたがりになった。同時に、どこかこちらの様子をうかがうような、擦り寄るような態度をとることも多くなった。

日がな一日、文字通りずっと俺の傍か、遠くても隣の部屋にいる。仕事や学校に行く様子はなく、買い物は全て置き配の通販を使っているらしい。財源は……多分自分の獲得賞金だろうな。

あれは未成年のうちにはトレセン預かりだが、引退後は成人するまで毎月、生活に困らない程度の額を振り込んでくれる。それでも残っていた分は、20歳の誕生日に通帳ごと渡してくれるシステムだ。因みに希望すれば最長で大学院卒業まで預かっていてもらえる。

かつて親に賞金を巻き上げられる生徒が散見されたことから生まれた仕組みらしいが、競走しかしてこなかったウマ娘が新たな人生（ウマ生？）を歩み出すための支援として、特に条件戦くオープン級のウマ娘達にとって大いに役立っていると聞いている。テイオーの使い方が正しいかは、俺にはわからないけれど。

ある日はどろどろに甘えて蕩け、またある日は健全（？）に二人で料理やゲームなんかをして過ごす。表面上、俺達の暮らしはこれ以上なく穏やかだ。

まるで、社会的な役割を全てやり切つて、後は穏やかな死に場所でお迎え」を待つばかりになった老夫婦のような。

「えへへえ……トレーナー、あったかいなあ」

一日中暖房が動いているのを考えると、多分今は冬なのだろう。ベッドの上、俺の隣に座ったテイオーは、そんなことを言つて俺にしなだれかかって来る。

「あつ……へへへ」

優しく頭を撫でてやると、一層幸せそうな声を漏らした。お互い前を向いているから顔は見えないが、きつとふにやふにやに蕩けている

のだろう。

ゆつたりと時間が過ぎていく。何かをしなければいけないということはない。と言うより、何もさせてもらえない。

肉体的には自由だ。拘束されてはいない。

『と、トレナー、ナー……？ 行っちゃうの……？』

ただ、少し買い物に行こうとするだけで、捨てられた子犬のような目を向けて来る。

少しでもテイオーから離れるような素振りを見せれば、すぐに不安定モードに逆戻りだ。

つまり俺は、テイオーに軟禁されていた。

『ご、ごめん……！ ごめんね……ボク、そんな、つもりじゃ……つうう、えぐつ……ごめん……嫌いにならないで……』

これは確か……貫ったPCで転職サイトを眺めていたのを見られた時のテイオーだ。

急に情緒不安定になったかと思ったら思いっきりひっぱたかれて、その直後に出てきた台詞だった。

外に出ようとすると、昔を思い出そうとする、他のウマ娘の話題を口にする、桐生院の話をする。

地雷はそこら中にあって、最初の……何ヶ月くらいだったろうか、度々踏み抜いては、テイオーの顔から表情をなくし、ある時は青ざめさせ、ある時は逆上させてから泣き崩れさせた。

その度、俺は<sup>トレナー</sup>テイオーのものだと強硬にアピールして、「離れない」と何度も言葉で誓わされ、そして行動で示すことになった。

テイオーは縋るようで、貪るようで、あるいは、媚びるようで、不安から逃げるようでもあった。お互い何の身分も持たない身。一度押し倒されてしまえば、あとはズルズル爛れていった。

分かっていた。つまり彼女は、俺が離れていくことを、極端に恐れているのだ。だからあらゆる手段で、つながりを保とうとしている。

誰より彼女自身が俺の行動を信じられなくて、そうしてしまったのは俺の行動なのだ。

そんな具合だったから、段々喋れる話題が減っていき、安牌は彼女

を褒めることと、彼女を氣遣うことくらいしか残っていない有り様。精一杯彼女を喜ばせるような……媚びるような言動をして、彼女も恐らくそうしている。

俺達の関係は……共依存に見えて、多分初めから破綻していた。

トレーナー業を廃業すると方々に伝えて回り、いよいよ退職当日となったあの日。トレーナー寮から出た直後、何者かに足払いをかけられ、体勢を崩したところに後頭部を殴られ昏倒。

次に目覚めた時にはこの部屋にいて、以来俺は風呂とトイレ以外では一度も部屋から出ていない。

初日こそ、危険な笑みで膝枕していたテイオーに食ってかかった。下手をすれば人が死んでいた。確かに俺は無責任だったかもしれないが、いくら何でもやり方に問題がある。

俺は考えが甘かったんだ。何年も一緒に居たのに、いや居たからか、初めに会った頃の、幼さと自信にあふれていたテイオーのイメージが、眼の前のテイオーを理解する邪魔をしていた。

始めこそ強硬な態度だったテイオーは（実際何発か殴られたし、その時折れた脚を病院にかからず治したせいとか歩くのに支障が出ている）、次第に泣きそうな、捨てられた子犬のような表情で懇願し始めたのを覚えている。

『やだ、いっちゃやだ……ボクはトレーナーだけで、トレーナーしかないのに……ボクを一人にしないでよお……ぐしゅっ、えぐっ』

あの時は……「間違えるな」と、俺の中の何かが警鐘を鳴らしていた。虫の知らせ、第六感、そういうものが過去最高にフル稼働していた。

それほどまでにテイオーは危険な空気を纏っていて、きっと俺が少しでも突き放すようなことを言っていれば、今頃俺かテイオーか、も

しくは両方がこの世から居なくなっていただろう。

だが、拒めなかつたのは脅されたからじゃない。自慢じゃないが肝は据わっているほうだ。あそこからでも、口八丁で抜け出して警察に駆け込むことは可能だった。

だがこうしたのは俺だ。彼女の気持ちを分かってやれなかつたのは俺だ。彼女の中の、俺以外の全てを塗り潰してしまったのは俺だ。俺が居なくなつたって上手くやっていくだろうと、高を括っていたのは俺だ。

責任を取らねばならないのは、俺だ。そう腹を括つたことは、忘れない。

……俺はあの頃、テイオーの事をどう思っていたんだっただか。これは思い出せない。

テイオーと一緒にいると決めた時に、あまりにも色々なものを捨てすぎた。今ではもう、思い出せる物事が極端に少なくなった。テイオーがそれを望まないからだ。

ただ、テイオーと日々を過ごすだけでいい。確かに俺が求めた、頑張らなくてもいい生活だ。ひよつとして、辞めると言つた日の俺の台詞を覚えているのだろうか。

「はい、あーん♪」

食事を食べさせ合い、

「テイオー、随分大きくなつたな」

「そうかなあ、トレーナーがえつちだからじゃない？」

「いや、背の話だぞ」

「……いじわる」

一緒に風呂に入り、

「お休み、トレーナー」

「ああ、おやすみ」

一緒にベッドで寝る。テイオーが不安定な時には、お互いを食ることもある。

それだけ。それだけの暮らしを、もう何度繰り返しただろう。昔はお子様らしい出で立ちだったテイオーも、いつの間にか随分成長した

から、きつと結構な時間が経っていると思う。

歪な同棲生活は、表面上はうまく行っているように見える。

……お互い分かつてはいるのだ。これが正しい在り方ではないことくらいは。だからそこには触れず、上手く行っているようにふるまっている。

何せ、俺達の関係は俺達だけで完結してしまっている。関係が壊れた時何が起こるか、当の俺達にすら分からない。きつと破滅的な、恐らくは命に係わる何かが起こるといえるのは分かるが。

「んう……ずっと……いつしよ……」

同じベッドで密着しているテイオーが、幸せそうに寝言をこぼす。

彼女は今、幸せになれているのだろうか。それだけが気掛かりだ。それ以外のことは、とつくに全て捨ててしまった。

俺？ 俺はテイオーが幸せなら、それが一番幸せだ。

ただ、いつか来る「お迎え」は、きつとそんなに遠い未来の話じゃない。きつと破綻はすぐそこにあると確信している。

それでも俺達が改善しようとしなのは……この暮らしに心地よさを感じているからか、それとも、心のどこかでは「たすけて止めてくれ」と思っているからか。俺にはもう分からない。

……今テイオーに抱いているこの気持ちは、多分愛とか、そんな綺麗な代物じゃないと思う。

だが罪悪感や義務感や使命感がごちゃ混ぜになったそれは、テイオーに残りの一生を捧げるには十分なものだとも思う。

俺には、それで十分だ。

ある日ドアを蹴破って現れたかつての教え子に、俺は穏やかな顔でそう説明した。

トレーナー業復帰？ 新生URA？ 俺を助ける？

何言っただ、それじゃあ、テイオーおれたちが幸せになれないだろ？

## #17 GOOD END ④

——ドリームトロフィーリーグには鬼がいる。

その”鬼”は毎日決まった時間にグラウンドに現れ、決まったメニューのトレーニングをこなし、そして寮の自室へと引っ込んでいくと言う。

彼女にはトレーナーが付いていない。

正確には、書面上のトレーナーはいるが、実際にトレーニングの指導を受けることは一切ない。最初から、それを織り込み済みでの契約だった。

かれこれ3年間。彼女は前のトレーナーに残してもらったトレーニングメニューをこなし続け、そして勝ち続けた。

”鬼”がドリームトロフィーに現れて以来、「彼女VS. そのほか全員」の構図が崩れたことはない。

中世ごろの古文や能楽においては、「鬼」とは主に悪霊を指すと言われている。

サイレンスズカが消えた後に現れ、段々と荒廃していくURARレース界に君臨する絶対王者。「アンタレスの亡霊」あるいは「置き土産」。”鬼”という名はその恐るべき強さを称するほかに、そういう意味も含まれるのだろう。

何せ今のところ、彼女の進撃を止められた者は一人としていない。

かつて1度だけ彼女を破った「英雄」は、宝塚記念の怪我が元で既に現役を退いている。サイレンスズカと唯一勝負ができた「白毛の勇者」は、業界を二分して争う名門どもの暗闘の中に消えていた。

かつてのチームメイトたちは、ただ一人「トレーナー」を中核とする繋がりだった。それを失った彼女らは、すぐに各々違う道へと進むことを余儀なくされる。

ある1人は今のURAを「つまらない」と称し、ある日愛車に乗って姿を消した。

ある2人は学園を運営する側に回って前線から去り、代理を立てて裏に潜った理事長と共に、誰も知らない闇の中で戦い続けていると言

う。

ある1人はURAに見切りをつけて、国外の機関に渡って研究に没頭しているようだ。ただ速さを追求していた昔と違い、頑強な身体づくりや事故後の応急処置に関する論文が主になったと、TVのニュースで流れて来る新技術が教えてくれる。

残りの2人は、あの日を境にぱったりと連絡が取れなくなった。あれから3年。彼女はとつくに一人になって、それでも走り続けている。

彼女には——ミホノブルボンには、それしかなかったからだ。

「はあ、はあ……ミッシヨン、コンプリート」

眩きに応えるものは、もういない。

ほとんど真夜中と呼んでいいような時間になってようやく、彼女は自身の課したトレーニングメニューから解放された。

「つげほ、うゝえ……っー」

襲ってきた吐き気を気合いで抑え込んで、しかし産まれたての子鹿のようになつた脚では踏ん張りが効かずその場にへたり込む。

「水分、補給が、必、要……っ」

朦朧とする意識と身体に鞭打つて、近くに準備しているスポーツドリンクを取り、戻さないように注意しながら口に含む。

日に日に少しずつ、しかし確実に、トレーニングを完遂するのにかかる時間が増えている。結果として後ろ倒しになった睡眠時間では前日の疲れがとり切れなくなってきた。

そんな状態になつても彼女は、肅々とトレーニングをこなし、栄養管理の徹底された食事をして、そして最低限の睡眠をとる。

およそ人間味のある生活ではない。早晚彼女は壊れるだろうと、トレセンの全員が確信していた。当のブルボン本人さえも。

それでも彼女は、その緩やかな自殺のような生活を止めなかった。今ブルボンが行っているトレーニングメニューは、彼女が本格化してすぐの頃の……トレーナーが見ていた時点のブルボンに最適化されたものだ。

それも、当時の体力を基準に限界ギリギリまで詰め込まれた、超名

門の野球部が裸足で逃げ出すような坂道漬けのスパルタメニュー。

本来はその日のコンディションなどを加味しながら逐一微調整するもので、何年も同じものを続けるようには出来ていない。今の彼女は明確なオーバーワークだった。

名義貸しという契約の現トレーナーからも（ブルボン自身は彼をトレーナーとは認めていないが）、流石に見かねたか何度も指摘されている。それでも彼女は、頑として今のやり方を変えようとはしなかった。

このメニューは、元トレーナーが最後に残してくれたもので、それを変えてしまったら、彼とのつながりが全て失われてしまう気がした。恐らく本人は、単に言いつけを守っているだけのつもりだろうが。

『私に「マスターを待つ」という行動を、許可してください』

あの時からずっと、ブルボンは待ち続けている。

彼の最後の命令……トレーナーのことを忘れて、新しい進路を見つければ、という彼の願いを、ブルボンはどうしても達成することができなかった。

彼女は元来、情緒が幼い所のあるウマ娘だ。トレーナーが離れた時点で、まだまだ成長途中で、これから、周りに支えられながら大人になっていくはずだった。

だが彼女は一人になった。あれ以来、ブルボンの中の時間は止まってしまっている。

（身体への負荷、想定される稼働限界を突破。意識の途絶より早く、寮に戻、らなく、て、は——）

関節がギシギシと悲鳴を上げている。筋肉が痙攣し、何処が痛いかわく分らない痛みが全身を覆っている。それでもほとんど執念だけで立ち上がり、真っ暗になった宿舎への道を行こうとして——

そこに、あり得ない筈の姿を見た。

「……トレーナー？」

思わず声を上げる。

ついに幻覚が見えるようになったのか。

「ブルボン、迎えにきたぞ」

もう、見捨てられたと思っていた。

心のどこかでは、トレーナーは戻ってなど来ないと分かっていた。彼はもう現役を退いて、どこかに隠棲しているはずだから。

頬をつねる。痛みはもう、良く分らないけれど。ヒリヒリした感覚が肌を捕らえ、きつと夢ではないのだと理解できる。

自分でも気づかないうちに、トレーナーに抱き着いていた。感情がぐちゃぐちゃに入り乱れて、自分を制御できない。

「つぐ、うえ、トレ、ナ……」

思ったように声が出ない。この視界の霞みは、疲れではなかった。それでようやく、自分が泣いているのだと気づいた。

言いたいことはいくらでもあったのに、何一つ口について出ることはなく。

ただ、「トレーナーは自分を見捨てたわけではなかった」と、彼は無事だったのだと、それだけが頭を満たしていた。

「ごめん、ブルボン。……3年もかかっちゃった」

「ぐしゅ……何を、ですか？」

ようやく落ち着いて来た頃、トレーナーがポツポツと喋り出す。

トレーナーの腕に抱かれて、声をかけてもらえるだけで今のブルボンにはこれ以上ない幸福だったが、ともかく「マスター」が聞いてほしそうなので、彼女は聞くことにした。

この数年、UR Aを騒がせていた名門同士の抗争に参戦していたこと。

理事長や仲間たちの協力を得て、UR Aが潰れない形で騒動に決着を付け、そして最低限の復興を済ませるのに今までかかったこと。

その間、公に行方不明である彼は、表舞台に出ることができなかったこと。

「俺は……最低な奴だ。ブルボンを3年もほったらかして、他の奴等だってもう何をしているのか把握できない。桐生院だって」

「マスター」

つらつらと続くトレーナーの懺悔を、ブルボンは――

「つべこべ言わずに走らせてください。私は、それだけを望みます」  
かつてトレーナーに貰った檄で、切つて捨てた。

無粋にも見える。強引にも見える。それでも、

「俺を、またトレーナーにしてくれるのか……？」

それでもある意味でブルボンらしいその言葉は、間違いなくトレーナーにとって救いだつた。

「謝つて済むことじゃないのは分かつてる。でも……なあ、ブルボン」

——もう一度、俺を君のトレーナーにしてくれるか？

「マスターは、一つ勘違いをしています」

「つ、そう、だよな」

「私は、貴方との契約解除を了承していません」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、しかし得意げに宣言するブルボン。  
「最後のオーダーを放棄して、私は、あなたの帰還をずっと待っています。あなたに貰つたトレーニングメニューで、今まで無敗を貫きました」

した」

遺してくれたトレーニングメニューで勝ち続ける限り、トレーナーの正しさは証明され続ける。

それは彼女にとって、誇りであり、意地だつた。

「私は、悪い子」です、マスター。あなたのお導きが無ければ、更生は不可能でしょうね」

そう言つてほほ笑むブルボンは、この三年間でしつかりと成長していた。



俺がブルボンのトレーナーに復帰して、そろそろ1カ月。

あの後最初に出した命令は、病院での精密検査だつた。

聞けばブルボンは、現役当時のあのハードトレーニングをこの3年

欠かさず続けて、その合間に出たレースを総なめにしていたらしい。タキオンが聞いたら卒倒しそうだ。

いくら我慢強く頑丈な彼女とて、まだ壊れていなかったのは奇跡みたいなもんだ。日に30時間トレーニングしていいのは漫画の登場人物だけで、特にウマ娘は一度の怪我が命に関わることも珍しくない。

精密検査の結果、案の定あちこちに故障一歩手前の症状がみられ、両脚とも疲労骨折寸前の有り様だった。あと一週間止めるのが遅かったら二度と歩けなくなっていたとそれはもう怒られた。

それから検査入院を含めて3週間あまりの休養を命じ、今日が練習復帰一発目だ。

「おはようございます。マスター」

すっかりいつもの調子にもどったブルボンが、そして、トレーナーとして復帰した俺が、ついにトレセンのターフに戻ってきた。

「おう。しかし……改めてみると、成長したな」

ドリームリーグ三年目になったブルボンは、以前よりさらに髪が長くなり、身体が一回り大きくなったように感じられる。

「ええ。ですからマスター、退院してよい機会ですので、折り入って話があります」

「奇遇だな。実は俺もなんだ」

お互い、何を言うかは分かり切っている。

俺が裏に潜ってまで名門と事を構えたのは、あの日のブルボンがあまりにも痛々しかったからだ。

立つ鳥跡を濁さずと言う様に。自分が消えた後、あんな思いをするウマ娘が出るような状態を残したままにしたくはないと思った。

俺は政治なんか分からない寒門の出だが、幸いにして味方してくれるウマ娘と、名家と、有力者がいた。

そして俺が表に戻ってきたのは、戻ってこられたのは、ブルボンの名声が、活躍が、否応なしに世間に認知されるほどのものだったからに他ならない。

でなければURRの立て直しにはもっと時間がかかっただろうし、

上手く行ったとしても俺自身が戻ろうとは思わなかっただろう。

「戦友」あるいは「共犯者」となってくれた彼女等に別れを告げて、俺はのうのうと表に戻ってきた。

俺の手は、最早血まみれになってしまった。長い暗闘の間に、いたいどれだけを蹴落とし、どれだけの傷を負ってきたことか。

それでも、彼女に。

ブルボンにもう一度、会いたかったんだ。

俺が一番「トレーナー」をしていた、一番楽しかったあの頃を、ブルボンを通して見ているのかもしれない。

その走りで世論を味方に付け、「絶対王者は死なない」と、対立する名門がある意味で諦めさせたその脚に、恩を感じたからかもしれない。

とにかく俺は、いつしかやり直したくなかったんだ。

——頬を赤らめたブルボンが、意を決したようにこちらを向き直る。

午前5時30分。日の出が済んだばかりの、トレーニング前のちよつとした時間。

風情はないけれど、これが俺達には一番合っている。

「マスターに、あの日言えなかつた続きを、お伝えします」

ああ、俺は。

これを聞くために、応えるためにここに来たんだ。

それを思えば、血で血を洗う3年間も、そう悪いもんじゃなかったかも知れないな。

私、シンボリルドルフの半生は、期待と共にあった。

メジロに匹敵するとも言われる——自分で言うのは、少し気恥ずかしい所もあるが——名門シンボリの出身として、幼い頃から帝王学を仕込まれて育ったし、トレセン学園で結果を出し、やがてはウマ娘達の幸福のため、さらなる高みに至ることを当然と受け止めていた。

恵まれているという自覚はある。素晴らしい環境で育ってきた自負がある。

それについて嫉妬されたことも、能力を嫉まれたことも一度や二度ではない。それは「不敗」のアンタレスに属するウマ娘として、「皇帝」と呼ばれる競技者として、いわば強者の義務のようなものと受け止めてきた。

『勝利より、たった三度の敗北を語りたくなるウマ娘』。

二人目の担当にして史上初の無敗三冠バを輩出、マルゼンスキーの成績をまぐれではないと認めさせたトレーナー君は、この頃はまだ諸手を挙げて賞賛されていた。

長らくリギル一強体制だった業界は、「双壁」となった二つのチームに熱狂。我々アンタレスが「常勝」リギルにあやかつて「不敗」と呼ばれ出したのもこのころだ。

敗者からの賞賛とそれに倍する反感に、私は常に一番近くで触れていた。しかし同時に、あの頃の私はまた、勝利という栄光を他ならぬトレーナー君と無邪気に分かち合つていられた。

順風満帆。私の現役時代は、まさしく絶頂にあったと言えるだろう。「降り始めるまで、どこが頂上だったかは分からない」との言葉通り、すべては失ってから分かったことだ。

『“不敗”アンタレスの落日』

『牙城崩れる』

『“勝利至上主義”過酷なトレーニングの実態』

『新世代の王者は誰か』

『チーム・アンタレスにドーピング疑惑 捜査開始』

これは……何だ？

痛ましい事故だった。一人の競技人生を終わらせてしまうほどの、悲劇だった。

そう、悲劇の筈だ。

観客の目には、記者たちの目には、そうは映っていないのか。

何故彼らは、こんなにも楽しそうで、嬉しそうに報道する。鬼の首でも取ったように笑って我々を責め立てる。

サイレンススズカは、彼女はただ、強かっただけじゃないか。

勝つことは、正々堂々と戦うことは、悪事だとも言うつもりか。

かんをおかすのがい

「侵官之害……我々はただ、「いい勝負」を演じ続けることしか、許されていなかったのか。

「——ッ!!」

叫び出しそうになるのを堪えて、生徒会室で一人頭を抱える。

スポーツ新聞の号外。URAを取材する週刊誌。夕方のニュース。

学園に押し寄せる報道陣。それらの影響でまともにお見舞いにも行けない我々。日に日に追い込まれ、ついには引退を決めたトレーナー君。

私の夢は……結局、夢でしかなかった。

「訪問。シンボリドルフ君はいるかね」

「理事長……」

そうして悲嘆に暮れた私だが、秋川理事長の決意に満ちた顔を一目見て、背筋にゾクリと何かが走ったのを覚えている。

「こんな時に……否。こんな時だからこそ。君にしか頼めないことがある」

そう語る理事長からは、これまでになく気迫を感じた。普段の幼いながらに豪放磊落な所が鳴りを潜め、滔々と語る彼女からは、静かな、しかし底知れぬ怒りだけが感じられた。

「君たちのトレーナーが引退を決めた」

「存じております。こちらにも挨拶がありました」

別人のよう、という訳ではない。「全てのウマ娘を輝かせる舞台であり続ける」、在りし日にそう言った理事長は、今も確かに眼前にい

た。

「私は、止められなんだ」

「私もです」

臥薪嘗胆。文字通りのそれをやってみせようという、強靱な意志だけが、彼女を突き動かしているようだった。

「これから”戦争”をする」

だからこの発言に、驚きはなかった。

「という事は、相手方が分かっているんですね？」

私の視線に射抜かれて、理事長は「意を得たり」と寧猛に笑う。

「警告。聞けば、君もこの渦に飛び込むことになるぞ」

「何を今更。分かっている聞いて聞きに来たのでしよう？」

その誘いは、まさしく悪魔的なタイミングで。

「——私は、何をすればよろしいですか？」

降りるなどという選択肢は、ハナから存在しなかった。

そうだ、まだ終わっていない。いや少し違う。私と違って、この人はまだ終わらせないつもりなのだ。据わった眼がそう言っていた。ならばなぜ、私は勝手に折れようとしていたのか。

見ていなくてもいい、トレーナー君。これは私の自己満足だ。せめて私が、私に誇れるようにしたい。

そう、決意を固めようとした時だ。

理事長を挟んでドアの向こう。無人の筈の廊下から、あり得ない筈の声が出た。

「おいおい。俺は愛想を尽かしてなんかいないぞ」

息が止まるかと思った。いや、本当に止まっていたかもしれない。

彼は今頃、秘密裏にトレセン学園を去り、恐らく足がつかないよう新幹線で遠方まで移動するはず。そうでなくとも、つい先日挨拶をされたばかり。何故彼が——トレーナー君が、ここにいる？

「トレ——」

「ストップ。おれは一応、居ないことになってるからな」

がたん、と音を立てて机から立ち上がる。理事長の横に並んだ彼を見て、思わず声を上げそうになったのを制止される。

「まあ、なんだ。全部投げ出してはいサヨナラ、っていうのも、恰好付かないから……んぐ、肘はやめてくださいよ肘は、分かりました、分かりましたから」

——おれは自分が思ってたより、この仕事が、ルドルフ達が好きだったんだ。おれが起こした騒動なら、自分だけ逃げる前に、少なくともケジメを付けていきたい。

そう語るトレーナー君の目は、紛れもなく本気で。

「おれは幸い、ここに存在していない。もうトレーナーはしてやれないが、ギリギリまで幽霊として暴れてや」

気づいたら、トレーナー君の胸倉を掴んで引き寄せていた。

「何故ッ！ 何故出て行くと云った！ 私が、どれだけ……！」

「……ごめん」

額と額をぶつけ合うような距離感。自覚はなかったが、恐らく私は泣いていた。

理屈ではなかった。恨み言も文句も言い尽くすまで怒鳴り散らして、そして……そして、トレーナー君に縋りつき、泣いた。それしか出来なかった。結局、込める思いが大きいほど言葉にはならないものだ。

「君は、本当に、最後の最後まで……私の心をかき乱す……！」

「最後じゃなくしたくてこうしてるんだ」

「そういう所だ!! 本当に、うう、ぐっ……」

私の慟哭がひとしきり落ち着き、傍で想定外の激しい反応に固まった理事長に気づくまでおよそ10分。恥ずかしくてたまらなかったが、それ以上に嬉しかった。

私はまだ、一人ではない。



「本日は皆様に、残念なお知らせをしなければなりません」

UR Aの緑のロゴと協賛企業の白いロゴが格子状に並んだ壁を背に、私は滔々と語る。その眼前では、これまで嬉々としてあることな

いことを書きたててきた記者たちがメモを取ったり、撮影したりせわしなく動いている。

記者会見に出ること自体は初めてではないが、記者たちの視線とは、こんなにも鋭く、粘りつくように重たいものだっただろうか。あるいは、これから行うことに、私が今更臆しているのか。

「我々、チームアンタレスは、昨日付けで解散することとなりました」  
どよめく取材陣に構わず、同席しているトレーナー君が話を引き継ぐ。彼の”表舞台における”最後の仕事は、この会見ということになった。

「それと同時に、私は前日付けでトレーナー資格を返上。URAは依頼退職するという形になりました」  
「っ……」

ウマ娘は耳に感情が出る。今の私は、さぞ情けない顔をしているだろう。……何度聞いても、実際にはトレーナー君が離れていくことはないと分かっている。ただ聞くだけで心が張り裂けそうになる。

そんな私を理事長がチラリと見る。いけない、心配そうだ。この場には我が家の総帥は勿論、メジロの”大婆様”まで同席している大所帯。その威を借りた以上、せめて堂々としていなければ、これからの”計画”にも支障が出る。

それら二人の大御所は小動もしていない。流石はスピ……総帥と、メジロの実質的トップだ。ゴールドシップがいきなり彼女を連れて現れた時は何事かと思ったが、結果として我々は心強い味方を得た。彼女も彼女なりに動いていたのだ。

私が思考を飛ばして平静を装っている間、お決まりの詫びの言葉を後ろにつけて、深々と頭を下げるトレーナー君。それと同時に、シャッター音とフラッシュの嵐に晒される。

フラッシュの眩しさから目を背けると、重鎮たちも露骨に嫌そうな顔をしているのが見えた。ウマ娘は突然の大きな音や強い閃光に人間ほど強くないのだが、中々規制が難しいのが現状だった。

しかし、予想していたほど負の感情は感じられない。というより、「先手を打たれて謝られてしまったので戸惑っている」という感情が

ありありと見えた。

無理もない。彼らの掴んだ情報では、この場にトレーナー本人はいなかった筈なのだから。

「……解散する、アンタレスの元チームリーダーとして、最後に言わせてほしいことがある」

敬語を取り払い、マイクを手に立ち上がる。

これは決別の言葉だ。きつと彼が居てくれなかったら、私はこの騒動を収めようと奔走しただろう。そしてきつと……全てが終わってから、闇に潜つてこの業界を修正しようとしていた。何故だか、確信にも似た推測があった。

『……ターフには、夢があると信じて走ってきた。”それ”をつかみ取り、そして見ていた皆に、ウマ娘たちに、夢を与えるためだ』

この記者会見の目的は、トレーナー君の引退報告ではない。宣戦布告だ。

『それが、どうだ。勝って勝って、我々がその先で得たものは”悪”<sup>ヒール</sup>のレットルとバッシングの嵐だけだった！』

記者たちがどよめいている。最早賽は投げられ、止める訳にはいかない。口を挟む隙を与えてはいけない。既に私は、リアルタイムで全国に中継されているのだから。

『そこまではまだいい！　だが現在の、サイレンススズカとトレーナー君の扱いには我慢ならない!!　悲劇を悲しむのなら、それを防げなかったことに怒りを表すのなら当然だ！　それだけの事故だった！　だがお前たちの表したものはどちらでもない”喜び”だ!!』

私の杖を、私の影を、私の支えを……私のトレーナー君をこんなにも追い詰めたお前たちを、私は決して許さない。

『絶対王者という厄介者を叩ける口実を見つけたのがそんなにも嬉しいのか!?　虐待疑惑をでっち上げてまで、我々がトレーナーに不満があると言うことにしたかったのか……?』

『お願いだ……私から、トレーナーまで奪わないでくれ……っ』

——実を言うと、最後の方に私が何を言っていたか、最早記憶が定かではない。喋っているうちにぐちゃぐちゃになった感情が溢れて、

最早冷静さのかけらも残ってはいなかった。

「わ、私からも証言させてください!! フリージャーナリストの乙名史です!」

だがそれからのことは、きつと一生忘れないだろう。

「ここに音声データがあり、この内容はたつた今から全世界に公開されています! 我々、そう我々記者クラブは、この件に対してアンタレス側に有利な情報を報道しないよう、ある勢力の影響によって取り決められている!! このデータはその証拠です!!」

理事長の手引きにより大手テレビ局や新聞社の仲間を引き連れ記者団に潜伏していた彼女が、一斉に反旗を翻す。

「……ウマッターとウマスタでの世論操作を目的に、大手広告代理店を介してネット上での工作を専門とする企業へ大口の依頼があったそうですね」

メジロの”大婆様”が、ぴしやりと言い切る。

「どこぞの民放がやってた街頭アンケート、”アンタレスはよくやっていたと思う”が7割くらいだったから”プロデューサーの判断”で急遽放送取りやめになったそうだね」

女性にも拘わらず”老雄”と恐れられるシンボリの当主がそれに続く。

「下手人について、敢えてこの場では実名を避けますが。メジロ家はこのやり方に賛同できかねます」

「シンボリも同意見さ。この際だからハッキリ言うよ、この二家はアンタレス側に付く。あたし達はね、ただ走りたいだけなのさ。こんな七面倒臭いことされちゃあかなわない」

謝罪会見のはずが一転、全国中継での断罪大会の様相を呈していた。

「それに、だ」

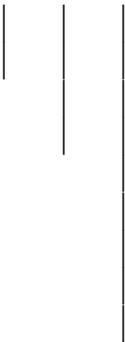
シンボリの当主が、私をちらりと見て、その顔をさらに険しくする。「ウチの若いのと有望なトレーナーを引き裂いて、こんなにしちまつて、黙ってるほどあたしや優しくないんだよ」

私。トレーナー君。理事長。ゴールドシップと、乙名史記者。兩名

家の当主。

バラバラに、しかし確かに存在していた抵抗の目が、トレーナーの存在によって一つ所に纏まった。

ウマ娘を中心とした大連合……後に”アンタレス派”と呼ばれる人々による組織的な反抗が、この日を境に始まったのだ。



俺がトレーナーを辞め、極秘裏に闇に潜ったあの日から、気づけば1年が過ぎようとしている。

あの日を境に、世論は一斉に靡き始めた。攻撃の矛先は変わり、そしてURRは内部分裂した。

新団体設立という事態にこそ陥らなかったが、業界を二つに割って争う俺達を前に、人々の視線は冷たい。レース人気は急速に冷え込み、今や全盛期の1/3も集客できれば上々といった所。

日本のレースは終わったと、この国を離れたウマ娘もいる。

争いごとなんかやってられないと、レースの道を敬遠したウマ娘もいる。

あんな協会は信用ならないと、野良レースに精を出すウマ娘もいる。

それでも俺は、このURRを守るために戦い続けている。

あれ以来、表向きの攻撃は止まり、水面下の攻防が主体になった。表向き引退後の消息は不明という事になっている俺にとって、そちらでの工作は本領だった。

勢力は面白いように拡大していき、理事長をはじめとするアンタレス派の勢力が、URR全体を掌握する日も近い。

かつての同僚の実家を手にかけることに抵抗がなかったとは言わないが、しかし同時に、全てを丸く収める方法がもうないことも、俺には分かっていた。

だから桐生院からの電話を受けたあの時に、俺は決めたんだけ。

選べるものが1つしかないと言うなら。俺が動くことで、1つだけ選んで救う余地が残っているとと言うなら。

俺は、このUR Aを選ぶと。

「——どうした、トレーナー君。手が止まっているぞ」

郊外の料亭。話の分かるその個室で、わざわざ隣に座ったルナが心配そうにこちらを見つめる。

彼女はあの記者会見の数か月後に学園を卒業。現在は大学に通う傍ら、UR Aのインターン生という名目で実質的に組織運営を牛耳り始めている。

「いや、ちよつと考え事してた。俺達もずいぶん遠くまで来たよな……」

その間俺がやっていたことと言えば、地道な根回しと仲間づくりが殆どだった。

関係各所に詫びを入れ、説教され、何とか許してもらい、或いは絶交され、時に新たな支持者を取り込み……そういう果てしなく地味な作業の中で、説得のために投入される錦の御旗。あるいは秘密兵器。

彼女の秘書としての仕事を除けば、俺の価値は専ら「存在すること」そのものにある。世論工作合戦に逆転勝利を収めたことで、俺の立場は「被害者」であり、事実上の「死人」になった。これを秘密裏に共有される神輿に仕立て上げ、俺達の派閥は瞬く間に影響力を増して行った。

「ああ、そうだな。我ながら、まだ表舞台に居られるのが不思議だよ」「やめてくれ縁起でもない。ルナまで消えてたらあと10年くらいかかってたんじゃないか？　これ」

俺というワイルドカードが通用するのは、最初の1年が限度。それ以降は存在が露見して優位性が失われる。その間、ほとんど不眠不休で駆けずり回り、長いようで短い一年間を俺たちは駆け抜けた。

公的に存在していない俺だが、密会に密会を重ねた関係上、UR Aの影響範囲内ではもはや公然の秘密と化している。

中でも元師匠……東条ハナさんの力を借りることが出来たのは大

きい。彼女は年が明けるや否や、スズカの残した6つのレコード……俗に「アンタレスの置き土産」あるいは「宿題」と呼ばれるそれを、全て塗り替えると宣言した。

スター不在になりかけていたUR Aは、その行動でどれだけ救われたことか。きつとあれがなければ、今頃どこかの野良レーズ組織がこちらを飲み込んでいたかも知れなかった。

「そうかもしれないな。けれど、卒業後に君が復帰できる目途も立たじゃないか」

俺達の立ち上げたプランでは、これから約5年、ルナが大学院を修了するまでに①UR A内部の掌握と②大掃除、③最低限の復興を達成し、卒業と同時に樞本理事長代理から正式に理事長の座を継承。そのタイミングでUR A新生を宣言する……という手筈。

この一年はほぼ、①と②に専念し、それらをほぼ完遂した。表に立ったルナと、裏で手を汚した俺と、そしてもっと深いどこかで今も戦い続けている理事長で。

『間違っていると思うものを見つけたら、それをやっているのが誰であろうともあげつらって喧嘩を売るのが“ジャーナリズム”というものです。直属の上司だって例外じゃありません!』

そう言っって味方してくれた記者たちも。

『へへーん、超豪華ゲストのサプライズ出演だ! 驚いたろ! 何せアタシが一番驚いてっからな!! ……少しは、役に立てたか?』

知らぬ間に巡らされた陰謀に気づき、独自に動いていたワールドシップも。

この全貌を伝えられないままターフを去っていったチームメンバーも。

あまりにも多くの協力と、献身と、犠牲の上で、俺達はUR Aを生かしている。

「ああ……今だから言うけどな。俺は最初、復帰するつもりなんかなかったんだ」

聞くや否や、ルナの身体が硬直した。耳がへたれて、眼に見えてシヨンボリしている。

「復帰したくなかった訳じゃない。出来ないだろうと覚悟してたんだ」

「……っ、そうか……そうか、良かった。本当に良かった……!」

優しく頭を撫でてやると、露骨に耳が復活する。昔と比べて、本当に素直になった。

「わたしのしたことは、意味があつたんだな……よかつた」

辞めると言った日、彼女が泣きわめいて止めたから俺がここにいるんだと思っっているのかもしれないが、残念ながら原因ははつきりしている。ストレスだ。

この1年。内憂外患を地で行く状況が続くにつれて、全方位で威厳を保たねばならず彼女にかかる重圧は加速度的に増して行った。

それに比例して、彼女がルナでいる時間が増えた。いや、これは……この臆病で泣き虫で、弱音しか吐かない生き物は、それまで見たことのないものだった。

影であることを決意した俺もまた、ルナ以外とは迂闊に話せない状態。将来設計を変更してまで加勢に来た女が弱っていて、俺に向けた甘えというSOSを受け入れてやれないほど、俺は狭量じゃなかった。

「ふふ……君に触れている今だけは。この瞬間だけは、わたしは君だけのルナでいられる。だからわたしは頑張れるんだ」

俺にしなだれかかり、胸板を撫でながらこちらを見上げて口を開くルナは、大学生になって増した色香と絶妙な弱さ、そしてこの側面は俺にしか見せないのだという危険な優越感を感じさせてくれる。

だから俺も、こんな無茶が続けられているのだろう。

「あと5年か……」

「そう、だな」

遂に遠くまで来たなとしみじみとかみしめる俺だったが、ルナは何か違うものを読み取ったらしかった。俺のワイシャツを掴んだ手が、小刻みに震えている。

俺が自由になるまで、あと5年。今の俺達は、互いのストレス発散のために時折会う機会を設けるだけの関係だ。これだって、週刊誌や

らにすっぱ抜かれないように細心の注意を払っている。これ以上にはなれない。

そしてトレーナーと担当という繋がりには既になく、URAに縛られているルナと違って、俺はその気になれば一般人になることが可能だ。

『……わたしは、こわい』

以前、消え入るような声でそう言われたことがある。寂しいでも、辛いでもなく、怖いだった。

あと5年、関係は前進せず、一方で俺から断ち切ることはできるからだ。

「なあ、ルナ。折り入って話があるんだ」

「っ!!」

彼女の、身長割に華奢になった体が殊更びくり、と震えた。今日もまたルナを不安にさせた。だが、それもこれで終いだ。

「5年後、まだ具体的な話はできないけど。約束はできる。これ、持つてくれないか」

彼女に、せめてこれ以上俺のことを心配しないで欲しかった。

「ありがとうルナ。これからも一生、ルナの傍にいさせて欲しい」

俺達の仕事はまだ終わっちゃいない。けれど、俺はルナのお陰で、URAの再建どころか、もう一度大手を振ってトレーナーをやる可能性を貰った。諦めていた夢さえ、もういちど叶うかも知れなくなつた。

今でこそ俺の我儘に付き合ってもらっているが、俺は本来、彼女の霸道が見たくてここに居るはず。どのみちこれは言うまでもないことで、ただ言葉にしたいだけ。

この時の、指輪を渡されたルナの顔は——俺の脳裏にだけ、独占させてもらおう。